

平成 20 年度

フィールドワーク調査報告書

第 6 号

淑徳大学総合福祉学部
人間社会学科

はしがき

本報告書は、人間社会学科の「フィールドワークⅠ」および「フィールドワークⅡ」を履修した学生の、1年間にわたる研究の成果をあらわしたものである。

本学人間社会学科のカリキュラムの1つの大きな特徴は、社会学の研究方法としての社会調査について、学生が体系的に学習することを可能としている点にある。1・2年次に必修科目として統計学および質的・量的調査の方法について計6科目を学び、3年次には「フィールドワークⅠ・Ⅱ」のほか「応用統計解析」を選択科目として履修することができる。前・後期合わせて通年でとりくむ「フィールドワークⅠ・Ⅱ」は選択科目であるが、社会調査法と統計解析について1・2年次に学習してきた事柄の集大成として、個別の研究テーマの設定から、テーマに関する理論仮説の検討、調査の方法的枠組みと分析方法の検討、調査対象の選定と調査票の作成、実査、データの集計、結果の解析にいたる一連の過程に、学生が主体となって取り組むものである。平成20年度の担当教員は、磯岡哲也・松菌祐子の2名、調査助手 本多敏明、教育助手補 庄司壮であった。履修学生は6名であった。6名全員はすでに（社）社会調査協会の社会調査士資格（見込み）の認定を得ているが、この「フィールドワークⅠ」「フィールドワークⅡ」の単位取得をもって、資格取得に必要な科目を履修済みとなったことになる。

今年度のテーマは「生活様式と環境問題」とした。近年、地球温暖化やエネルギー問題などの地球環境問題が話題になるとともに、地域や個人が取り組む身近なレベルでの環境対策への関心が増大している。本学が立地する千葉市でも、ごみ削減キャンペーンやマイバッグ運動などを行っており、地域や個人での取り組みを働きかけているほか、市民会議などをつうじて市民との協働をすすめている。これらの問題を、人々の生活様式との関連で総合的に考察しようとしたのが、本調査の目的であった。

量的調査は調査票を用いた郵送調査を千葉市において実施した。あわせて今年度の課題に即して行政、地域組織等での聴き取り調査も一部実施した。学生たちは、大変熱心にこれらの調査の企画、実施、集計分析に取り組んだ。ただ、1年間の時間の中ではデータ解析に十分な時間をかけることができず、分析が不十分であることはいなめない。聴き取り調査の実施時期は、調査企画段階で行うべきであったが諸般の事情でややおそくなってしまい、総合的な考察に至らなかった面もある。

調査研究は調査対象者のご協力によってはじめて成し遂げられる。郵送調査にご協力いただいた千葉市民、聴き取り調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。また、サンプリングにあたっては、各区役所の市民課にお世話になった。記して感謝申し上げます。

大学が立地する地域の社会問題を授業の一環として考察していくことは、大変有意義なことである。ともすれば地域での活動から距離をおきがちの学生世代が、懸命に取り組んだ成果が、地域の理解に少しでも資することができれば幸いである。

平成21年3月

総合福祉学部教授 磯岡哲也 松菌祐子

目 次

はしがき	松 蘭 祐子・磯岡 哲也 ..	i
目次		iii
1 章 問題意識と研究テーマ		1
1. ライフスタイルとエコ行動	岡崎 亜季・木戸口 薫・河野 恵 ..	1
2. ライフスタイルとごみ減量行動	渋谷 卓磨・長島 瑠美・名取真里恵 ..	2
2 章 調査研究の概要		4
1. 調査の目的と調査票の概要	本多 敏明・庄司 壮 ..	4
2. 調査の概要	本多 敏明・庄司 壮 ..	5
3. 調査対象	本多 敏明・庄司 壮 ..	5
4. 調査の方法	本多 敏明・庄司 壮 ..	6
5. 調査対象の基本属性	木戸口 薫 ..	6
3 章 千葉市の概要		8
1. 千葉市の人口動態	名取真里恵 ..	8
2. 千葉市の人口移動	渋谷 卓磨 ..	15
3. 千葉市の世帯構成	長島 瑠美 ..	16
4. 千葉市の就業形態	岡崎 亜季 ..	18
5. 国の環境行政	河野 恵 ..	19
6. 千葉市の環境行政	木戸口 薫 ..	21
4 章 エコ行動をする要因	岡崎 亜季 ..	22
5 章 節約行動と環境意識	木戸口 薫 ..	33
6 章 環境に対するスタンスと環境対策の実行度	河野 恵 ..	44
7 章 周囲の人の影響による個人のエコ行動	渋谷 卓磨 ..	52
8 章 ごみ減量行動に影響を及ぼしている要因	長島 瑠美 ..	65
9 章 地域のつながりとごみ減量行動	名取真里恵 ..	74
あとがき	本多 敏明・庄司 壮 ..	87
附録		
事例調査		91
(1) 千葉市環境局	渋谷 卓磨・河野 恵 ..	91
(2) H 自治会	名取真里恵・長島 瑠美 ..	93
(3) NPO 法人「環境ネット」	岡崎 亜季・木戸口 薫 ..	95
単純集計表		99
調査票		113

1 章 問題意識と研究テーマ

1. ライフスタイルとエコ行動

A62070 岡崎 亜季 A62126 木戸口 薫 A62127 河野 恵

1. 1. はじめに

自分たちの問題意識を明確化するために KJ 法による探索をおこなった。まず、環境問題とライフスタイルというテーマで、身の回りで気になること、聞いたことのある環境対策など問題意識を書き出し、グループ単位で整理をした。

1. 2 KJ法の結果概要

書き出したラベルは全部で 47 枚、それを整理した結果、私たちの問題意識は以下の 4 つのグループにまとめられた。

- 1) 国レベルでの様々な環境対策は一般市民と温度差がある。
- 2) 個人レベルで流行している環境対策がある。
- 3) 様々な環境対策があるが、実行していないものもある。
- 4) 温暖化が人に与える影響がある。

1) では、近年特に国や団体による環境の保護の訴え方が、マスコミの報道を通じて「過激」なものになっているものの、その反面では太陽光発電を利用した充電池やオーガニックコットン衣料の販売など技術開発が進めば環境対策になることは浸透していないことが挙げられた。このような環境対策はあくまで国や団体が進めていることで、国レベルでの環境対策は一般市民にあまり知られていない。

2) では、改正容器包装リサイクル法の影響からスーパーマーケットがレジ袋の削減をしており、そこから派生して、ブランド物や無料配布などエコバッグが流行していることが挙げられた。さらにはマイ箸やマイボトルなど、個人で持ち運べる環境対策が流行していることが挙げられた。

3) では、個人だけでなく企業もリユースできる製品を使っていること、不要になったものを作り変える活動があること、さらには無洗米や洗剤の代わりに重曹を使うなど、台所からできる環境対策があることが挙げられた。つまり、一般的にはまだあまり知られていない環境対策があり、それを知っていたとしても実行していない環境対策がたくさんあることが挙げられた。

4) では、温暖化が進むと花粉症の患者が増えるのではないかとされていることや、台風の威力が増加するのではないかとされていることなどが挙げられた。

1. 3 各グループの関係性

まず 4) は他のグループとの関連性が薄いので、独立したグループであると考えた。次に 1) と 2) と 3) は相互に関係しているのではないかと考えた。

つまり、国が推進する環境対策は個人の実行を促すまでに浸透していない。だから、個人レベルで行うことのできる環境対策は流行しているが、それ以外の環境対策は認知されていても実行されていない。これらは、互いに関連しており国と一般市民の間に温度差が

あるから実行しないのか、個人レベルの環境対策は流行したが、それ以外の環境対策は実行していないから温度差が生じたのかということとは分からないものの、なんらかの関係があるのではないかと推測した。

1. 4 考察

KJ 法を行って、様々な環境対策が私たちのライフスタイルに密着した形で存在していることを知った。だが、そうした多くの環境対策を認知しただけでは、対策の実行に繋がっていかないのはなぜだろうという疑問が同時に浮かんだ。そこで私たちは、どのようにすれば環境対策を実行するのかを話し合い、いくつかの考えに辿り着いた。

一つ目は、いくら環境対策を認知しても「理解」しなければ実行にいたらないのではないかというものである。二つ目は、環境対策が「流行」しているなかで、流行に流されやすい人が環境対策を実行するのではないかというものである。三つ目は、「節約」に興味のある人が、自分に利益が生まれるからという動機で節約に繋がる環境対策を実行するのではないかというものである。以上の3つの考えの「理解」、「流行」、「節約」をそれぞれのキーワードとして、仮説を立てて検証していくことにした。

2. ライフスタイルとごみ減量行動

A62055 渋谷 卓磨 A62081 長島 瑠美 A62134 名取 真里恵

2. 1 はじめに

自分たちの問題意識を明確化するために KJ 法による探索をおこなった。まず、環境問題とライフスタイルというテーマで、身の回りで気になることなど問題意識を書き出し、グループ単位で整理をした。

2. 2 KJ法の結果概要

書き出したラベルは全部で 30 枚、それを整理した結果、私たちの問題意識は以下の 3 つのグループにまとめられた。

- 1) ごみ減量に対する企業の意識が高い。
- 2) 家庭から出されるごみはリサイクルできる資源がある。
- 3) リサイクルが浸透していない。

1) は「焼却場では灰や熱を上手く利用している」「ごみ減量に取り組む店が増えてきている」「各企業の特色をいかした環境対策が行われている」の 3 つのカテゴリーからなる。

2) は「再利用商品が注目されている」「アルミ缶は約 9 割がリサイクルできる」「新聞をリサイクルすると木が守れる」「家庭でできる環境対策がある」の 4 つのカテゴリーからなる。

3) は「ごみを減らす行動が遅れている」「新品の方が良いイメージが強い」「リサイクル品は別の資源を消費するため価格が高い」の 3 つのカテゴリーからなる。

2. 3 各グループの関係性

環境問題対策として、リサイクルはごみを減らす有力な方法として注目されている。焼却灰を利用したスラグを道路の舗装に使用したり、割り箸、レジ袋の有料化など企業の特徴をいかした様々なごみ減量行動が行われている。

家庭では、新聞紙やアルミ缶のリサイクルが多く行われるなどごみ減量行動が行われている。このほかに注目されていることは、物を修理補修して使用することや、再利用商品の購入や利用である。しかし、リサイクルを実行する際には別の資源を大量に使用してしまうことや、物を修理するより新品を購入したほうが安上がりであること、リサイクル商品は高価なものが多いなどの問題があることから、リサイクルがしやすい社会になっておらず、また人々に浸透していないことがうかがえる。

2. 4 考察

私たちが当初想定していた以上に企業は環境問題を考え、リサイクルなどのごみ減量行動に力を入れているということになった。しかし、家庭でのごみ減量行動は新聞紙、アルミ缶のリサイクル程度しか定着しておらず、まだまだ資源となる家庭ごみや、減らすことができるごみに対しての人々の意識は薄い。

企業が率先してごみ減量行動を行うことはとても重要だが、家庭も協力しなくては環境問題は改善されないが、「捨てること」に慣れてしまった私たちにいきなり「ごみを減らせ」と呼びかけても実際に実現は難しいだろう。そこで、人々はどうしたらゴミ減量行動を行うのかという疑問が浮上した。ごみ減量行動を行っている人、行っていない人それぞれになんらかの理由があるのではないだろうか。時間に余裕がある人がごみ減量行動を行うのかもしれないし、もしくは家庭や地域といった身近なところでごみ減量行動を行う人が多くいる人が行うのかもしれない。そこで、「身の回りの人」、「余暇時間がある人」、「地域とのつながり」をキーワードとしてそれぞれ仮説を立てて検証していくことにした。

2 章 調査研究の概要

1. 調査の目的と調査票の概要

1. 1 調査の目的

この調査は、人びとの生活様式と環境問題に関して、1 章で述べた問題意識を明らかにするために行った。

1. 2 調査票の概要

調査を行うにあたって、以下の質問項目を設定し、調査票を作成した（巻末の「調査票」を参照）。

居住区に関する項目（Q1）
性別に関する項目（Q2）
年齢に関する項目（Q3）
環境問題の不安感に関する項目（Q4）
環境対策の認知度に関する項目（Q5）
環境対策の実行度に関する項目（Q6）
情報入手経路に関する項目（Q7）
環境対策の理解度に関する項目（Q8）
普段行っているエコ行動の頻度に関する項目（Q9）
普段行っているごみ減量行動の頻度に関する項目（Q10）
家庭で行っているエコに関する項目（Q11）
エコバッグ所持に関する項目（Q12）
エコバッグの使用頻度に関する項目（Q12-1）
エコバッグの使用動機に関する項目（Q12-2）
2008 年に行った環境対策に関する項目（Q13）
エコを目にするテレビ番組に関する項目（Q14）
日常生活での流されやすさに関する項目（Q15）
千葉市の政策の認知・理解に関する項目（Q16, Q17）
地域への愛着度に関する項目（Q18）
地域活動への参加頻度に関する項目（Q19）
ごみ減量行動の時間や手間に関する項目（Q20）
身の回りの人のエコ行動に関する項目（Q21）
中学生時代のしつけに関する項目（Q22）
中学生時代のエコ行動実行度に関する項目（Q23）
環境問題への取り組み方に関する項目（Q24）
環境問題・対策への考え方に関する項目（Q25）
平日の余暇時間に関する項目（Q26_a）
休日の余暇時間に関する項目（Q26_b）
就業場所に関する項目（Q27）
一日の平均就業時間に関する項目（Q27-1）
一日の平均テレビ視聴時間に関する項目（Q28）
家計の管理者に関する項目（Q29）
居住形態に関する項目（Q30）
居住年数に関する項目（Q31）
世帯人数に関する項目（Q32）
家族形態に関する項目（Q33）
一年間の収入に関する項目（Q34）

2. 調査の概要

2. 1 調査の名称

「千葉市における生活様式と環境問題」

2. 2 調査の主体

淑徳大学総合福祉学部人間社会学科

2008 年度「フィールドワークⅠ」「フィールドワークⅡ」受講生

渋谷 卓磨 岡崎 亜季 長島 瑠美 木戸口 薫 河野 恵 名取 真里恵

調査責任者

淑徳大学教授 松菌 祐子

社会調査助手 本多 敏明

淑徳大学教授 磯岡 哲也

教育助手補 庄司 壮

3. 調査対象

3. 1 母集団

千葉市3区（中央区、若葉区、緑区）在住の20代～60代の男女。千葉市を選定したのは、千葉市がさまざまな住民が混住する都市近郊の特色を表わしていると考えられるためである。その中で20代～60代の男女を選定したのは、環境問題が年齢や性別に関係なく全ての世代に関わってくる問題であるためである。

平成20年3月1日現在において、千葉市3区（中央区、若葉区、緑区）の住民基本台帳に記載されている20代～60代の男女は314,014人であった。

3. 2 対象者

千葉市3区（中央区、若葉区、緑区）在住の20代～60代の男女の中から無作為に抽出した1,000名

3. 3 選定方法

以下の手順に従って、確率比例抽出法により抽出をした。確率比例抽出法は、第1段階では第1次抽出単位はその大きさに比例した確率でランダムに抽出され、第2段階では抽出された第1次抽出単位にその大きさに関係なく同数の標本が割り当てられる方法である。

①1地点（町丁）ごとに40名を抽出し、合計1,000人を抽出するために第1次抽出単位として25地点を選定することにする。 $(1,000 \text{ (人)} \div 40 \text{ (人)} = 25 \text{ (地点)})$

②平成20年3月1日現在、千葉市中央区、若葉区、緑区の全291町丁のうち20代～60代の男女の人数が50名以下の町丁をまとめ、第1次抽出単位の町丁数を281町丁とした。

③母集団の人数（314,014人）を抽出する地点数（25）で割り、第1次抽出単位の抽出間隔を決める。その結果、抽出間隔は12560.56（人）となる。

④ランダムに決定した5ケタの番号をスタート番号として、そこから12,560間隔で該当した地点を抽出する。この作業を繰り返して、25地点を抽出する。例えば、スター

ト番号が 1,234 であった場合には、1,234（第一地点）、 $1,234+12,560=13,794$ （第二地点）、 $13,794+12,560=26,354$ （第三地点）と順に選択していき、302,632（第二十五地点）となる。

- ⑤抽出した 25 地点から、各地点ごとに 40 名ずつを抽出して 1,000 名を抽出する。（25（地点） $\times$ 40（人）=1,000（人））

4. 調査の方法

4. 1 統計的（量的）調査〔標本調査〕

郵送調査法（調査票を対象者に郵送し、対象者自身が調査票に記入し、返送する調査方法）

調査時期 平成 20 年 10 月 1 日（水）～10 月 21 日（火）

回収結果 有効回収数（率） 258 票（25.8%）

4. 2 記述的（質的）調査〔事例調査〕

自由面接法（調査員が対象者に直接面会し、質問だけはあらかじめ設定するが、質問に対する対象者の回答は対象者の自由な発話に任せる方法）

調査時期 ①平成 20 年 7 月 29 日、②7 月 20 日、③9 月 18 日

調査対象 ①千葉市環境局、②千葉市内 H 自治会、③NPO 法人「環境ネット」

調査者 ①河野恵・渋谷卓磨、②長島瑠美・名取真里恵、
③岡崎亜季、木戸口薫

（※ 巻末の「事例調査」を参照）

5. 調査対象の基本属性

5. 1 居住区

表1 居住区			参考:千葉市3区の20～69歳人口(居住区別)		
	度数(人)	相対度数(%)		度数(人)	相対度数(%)
中央区	111	43.7	中央区	132628	42.2
若葉区	76	29.9	若葉区	102323	32.6
緑区	67	26.4	緑区	79063	25.2
計	254	100.0	計	314,014	100.0
欠損値=4			※平成20年3月1日現在		

中央区が最も多く、若葉区、緑区と続いた。市の人口統計情報とほぼ同様の割合となった。

5. 2 年齢

表2 年齢			参考: 千葉市3区の20～69歳人口(年代別)		
	度数(人)	相対度数(%)		度数(人)	相対度数(%)
20歳代	26	10.2	20歳代	55177	17.6
30歳代	48	18.9	30歳代	77342	24.6
40歳代	57	22.4	40歳代	61691	19.7
50歳代	51	20.0	50歳代	58918	18.8
60歳代	72	28.4	60歳代	60886	19.4
計	254	100.0	計	314,014	100.0
欠損値=4			※平成20年3月1日現在		

年齢区分は、60歳代が最も多く、次に40歳代、50歳代、30歳代と続き、20歳代は60歳代の半分以上の人数という結果になった。また20～30歳代の返送率が低かった。

5. 3 家族形態

表3 家族形態		
	度数(人)	相対度数(%)
一人暮らし	31	12.3
夫婦のみ	62	18.9
夫婦と子ども	129	22.4
三世代家族	22	20.1
それ以外	8	28.4
計	252	100.0
欠損値=6		

家族形態は「夫婦と子ども」が最も多く、次に「夫婦のみ」、「一人暮らし」と続き、「三世代家族」は少ない傾向が分かった。

資料：千葉市在住の20歳～69歳までの男女の配偶関係について

男女別にみると、女性より男性の方が未婚率は高く、女性の方が有配偶率は高い結果となっている。そして、年ごとに男女ともに未婚率が上昇し、有配偶率が下がっている傾向にある。

表1 千葉市の男性の配偶関係

	総数	未婚	有配偶	死別	離別
平成2年	282,582	77,118 27.3%	193,300 68.4%	2,525 0.9%	5,396 1.9%
平成7年	316,132	101,009 32.0%	201,082 63.6%	3,288 1.0%	7,057 2.2%
平成12年	326,997	103,568 31.7%	203,304 62.2%	3,310 1.0%	8,362 2.6%
平成17年	329,873	105,111 31.9%	201,696 61.1%	3,386 1.0%	10,476 3.2%

表2 千葉市の女性の配偶関係

	総数	未婚	有配偶	死別	離別
平成2年	273,242	52,176 19.1%	198,516 72.7%	11,218 4.1%	8,617 3.2%
平成7年	299,317	68,341 22.8%	206,384 69.0%	12,180 4.1%	10,781 3.6%
平成12年	312,859	71,562 22.9%	211,392 67.6%	12,376 4.0%	13,427 4.3%
平成17年	321,162	73,100 22.8%	214,074 66.7%	12,382 3.9%	16,651 5.2%

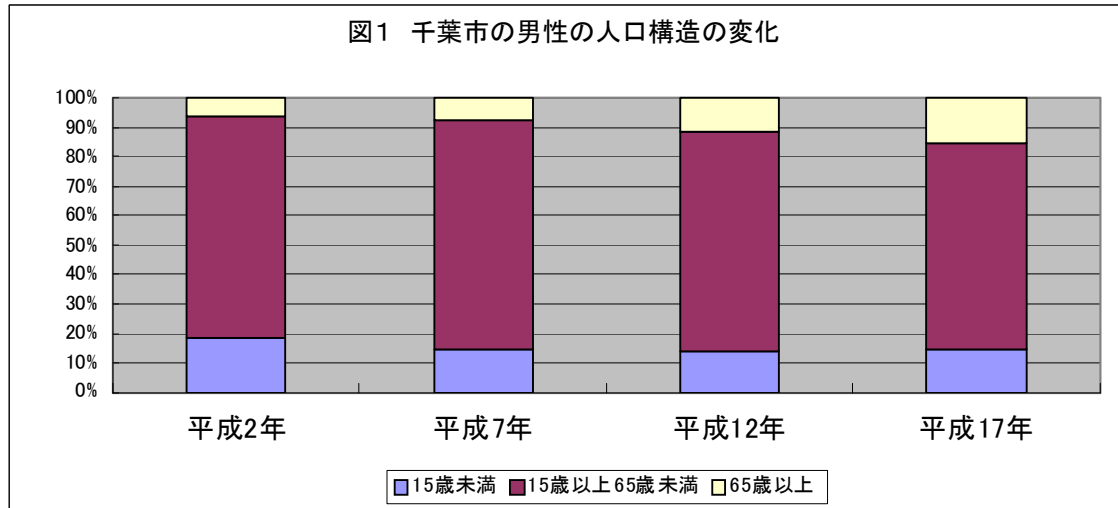
資料：各年国勢調査

3章 千葉市の概要

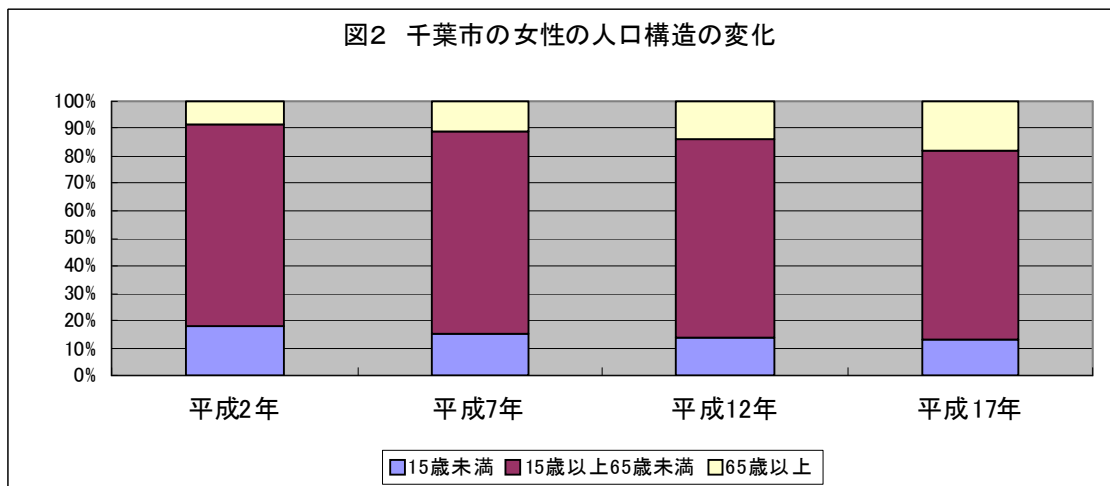
1. 千葉市の人口動態

A62134 名取 真里恵

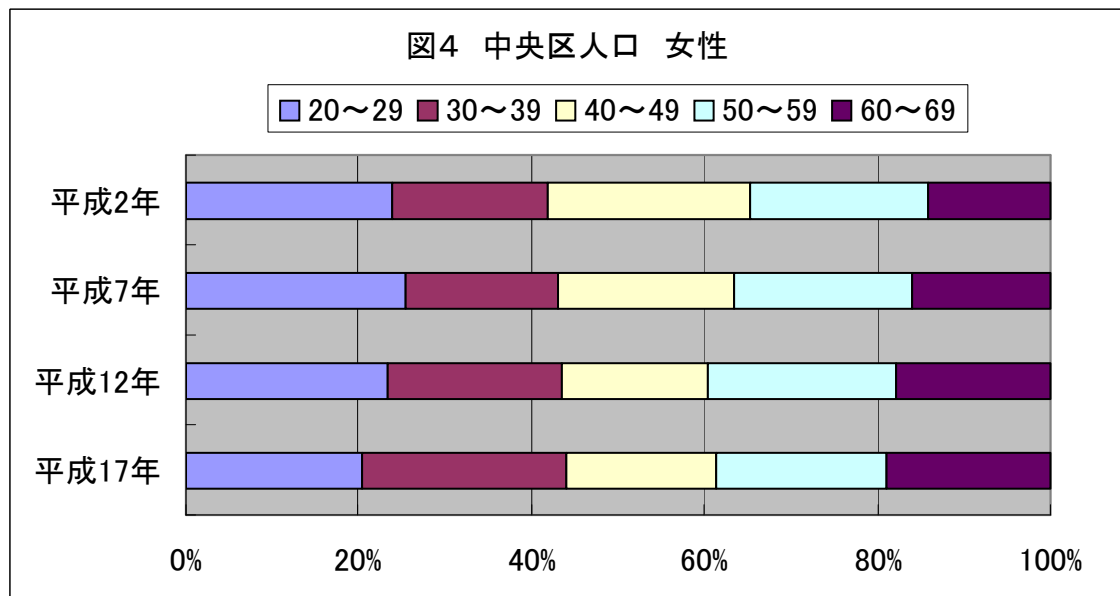
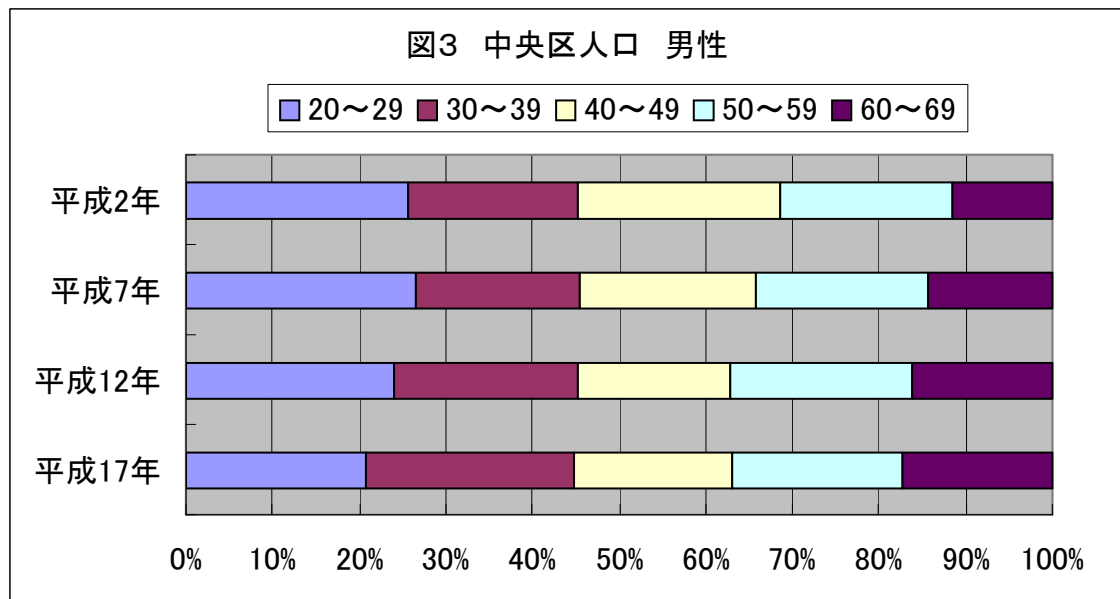
国勢調査のデータを用いて、平成 2 年（1990 年）から平成 17 年（2005 年）までの 5 年ごとの千葉市の人口動態を調べた。



男性の場合、15 歳未満の若年層の割合は平成 12 年まで減少していたが、平成 17 年には増加している。また 65 歳以上の高齢者層の割合は平成 2 年以降増加し続けている。平成 7 年までは 2%程度だった増加率が、平成 12 年には 4%と倍増している。高齢化は確実に進行しているといえるだろう。



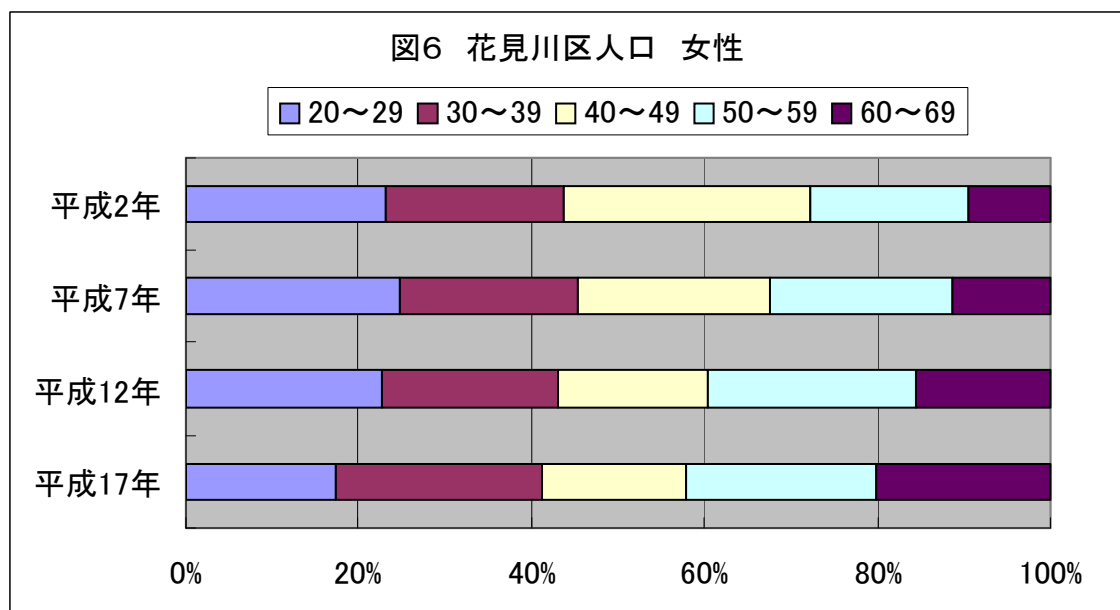
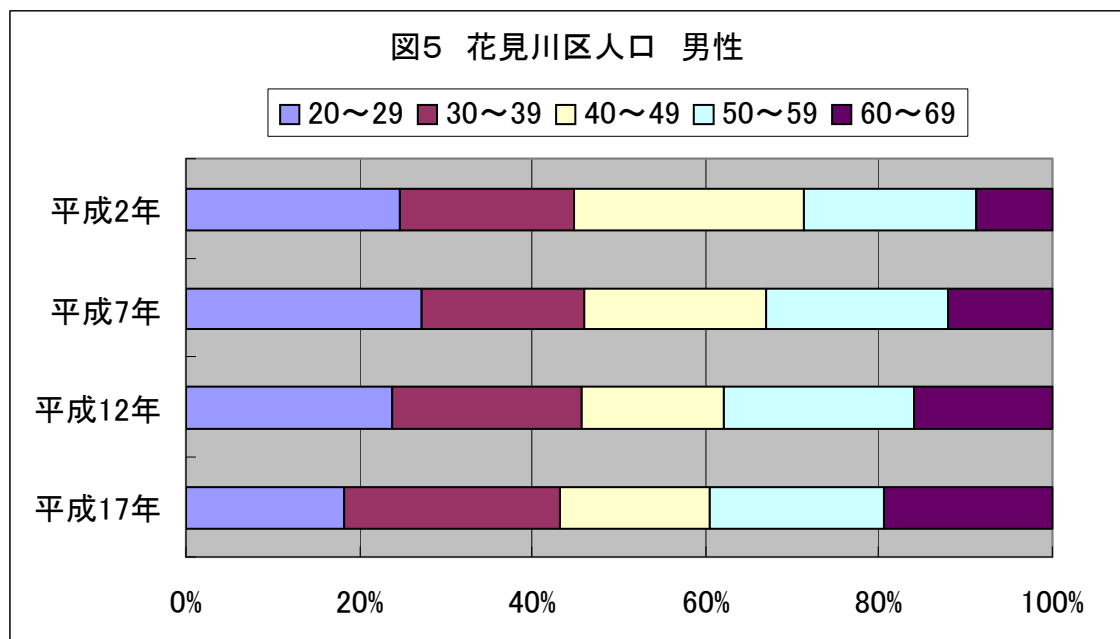
女性の場合も、少子高齢化が進行しているといえる。ただし、平成 12 年を境に 15 歳未満人口は増加に転じているが、65 歳以上の高齢者層は年々増加している。男女ともに、15 歳未満人口の増加率と高齢者層の増加率に差がある。



総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	59144	63647	64123	65768
女性	55316	58506	59343	61440

(単位 人)

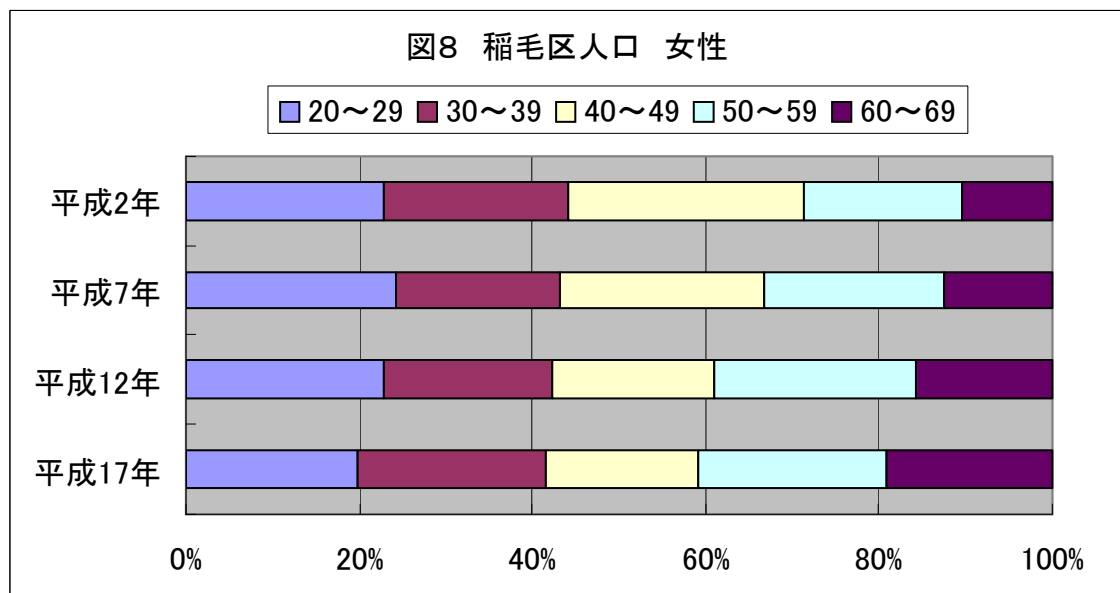
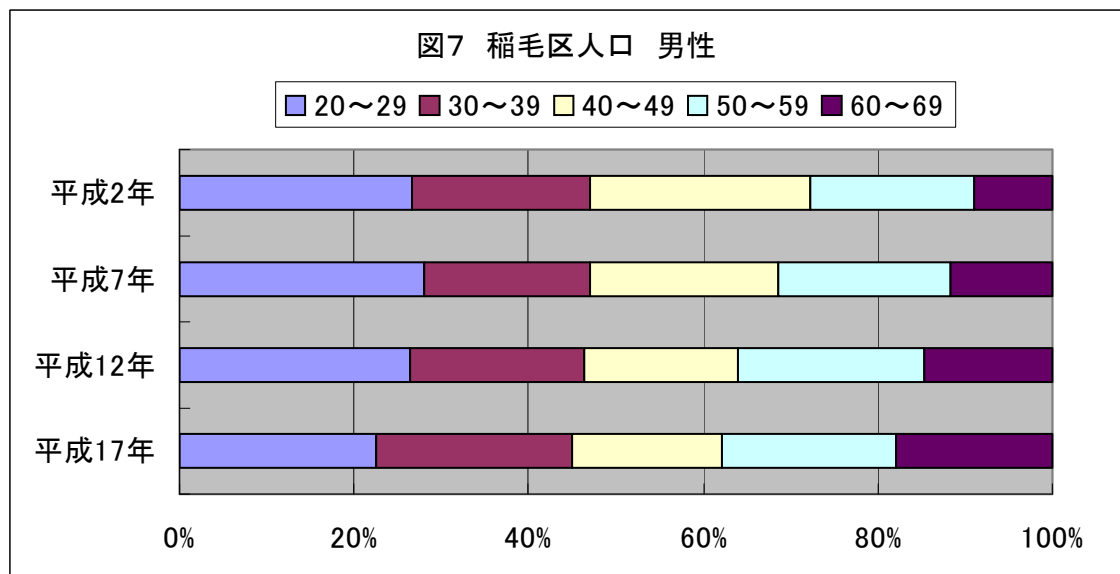
中央区は、都市機能は充実していながら緑地も多く見られる区である。年齢層に大きな偏りは見られない。20代の若者の割合が平成7年まで増加傾向にあったが、平成12年以降男女ともに減少している。



(単位 人)

総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	59490	66654	68039	68445
女性	57007	63895	63457	63875

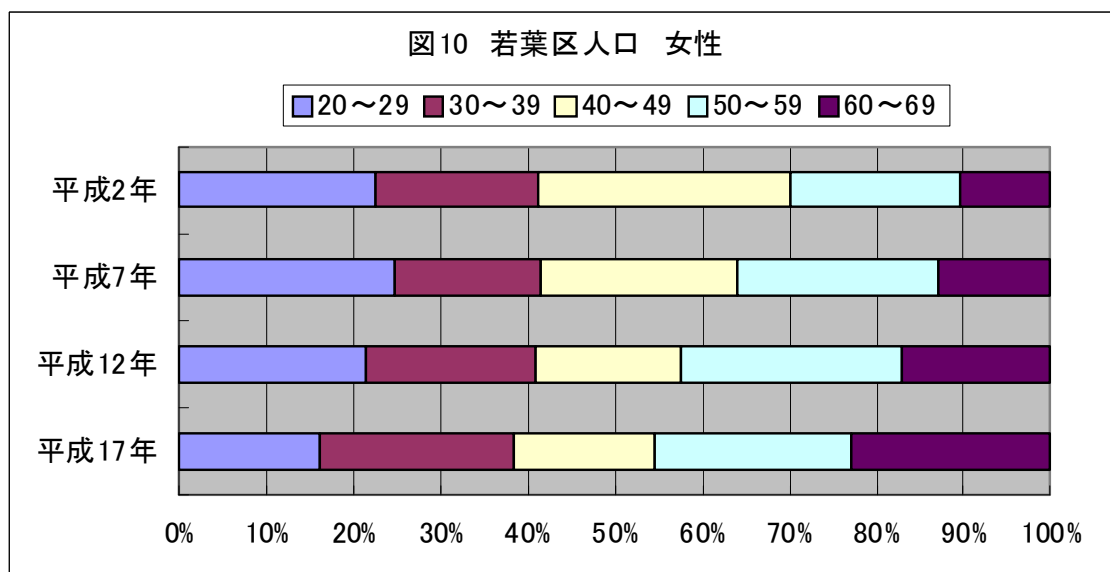
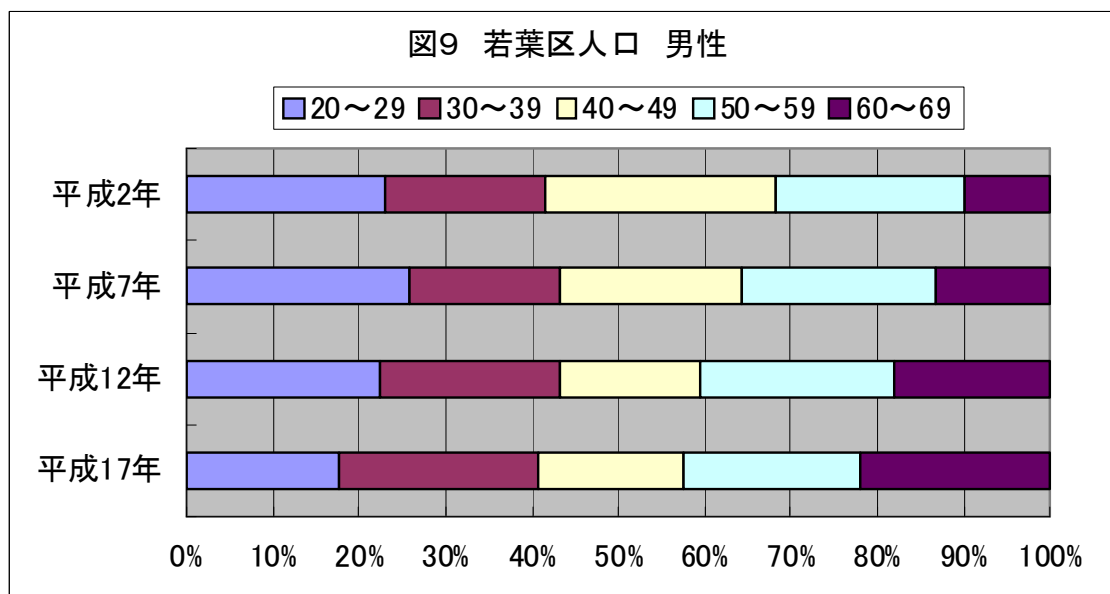
花見川区は、自然と都市の調和を目指しており、自然公園や花見川流域に農地が広がっている。町の環境がよく、教育施設が充実している。転出入による大きな変動はないが、出生率と高齢者の人口比率は高い。中央区に次いで人口が多く、総世帯数は市内で最も多い。



(単位 人)

総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	51765	55737	54626	54560
女性	48769	51790	51634	52116

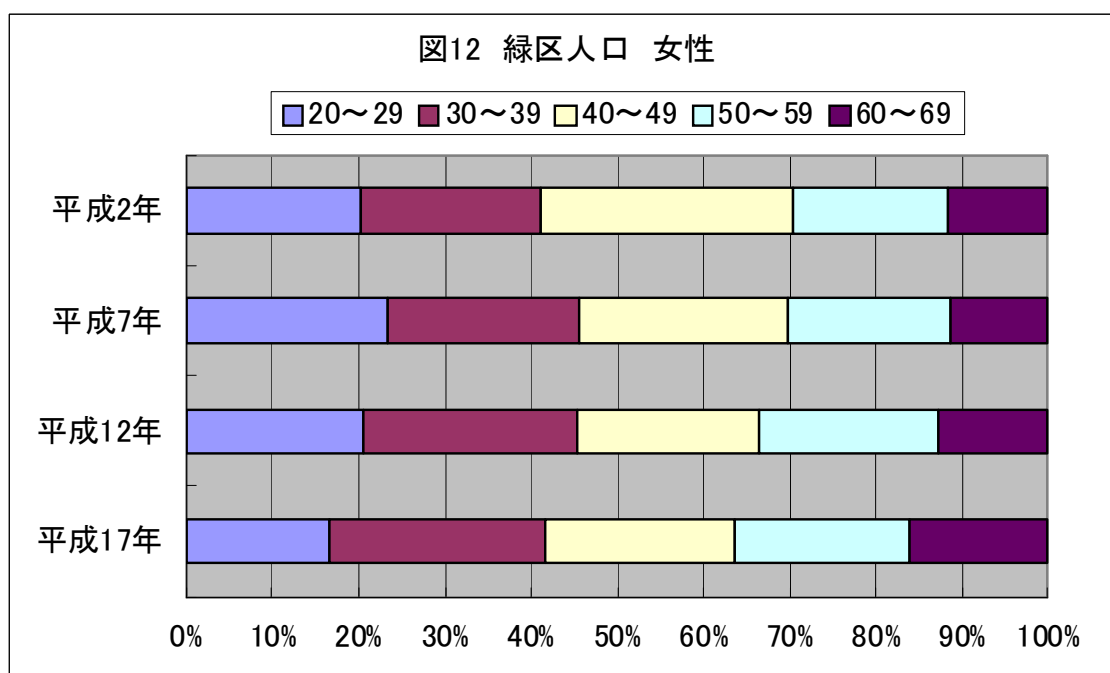
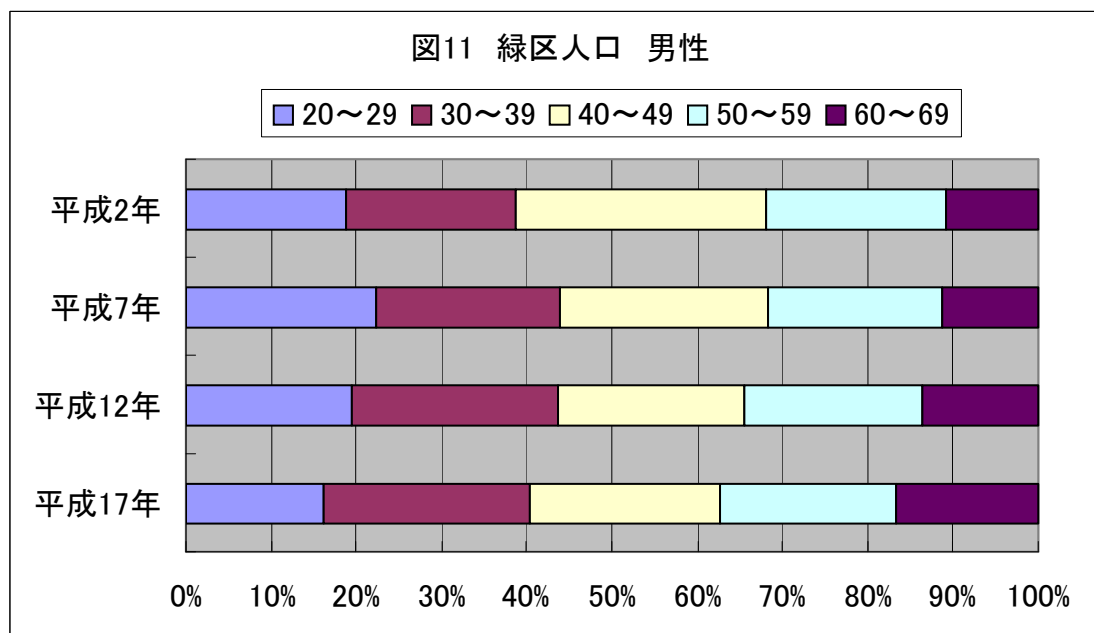
稲毛区は交通の便がよく、千葉大学を始めとする教育機関やスポーツセンターも多くある地域である。そのためか男女とも20代の若者は平成12年以降減少したものの、他区に比べると人口の減少率は小さいといえるだろう。



(単位 人)

総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	49099	55353	54758	53023
女性	47689	52401	52852	51280

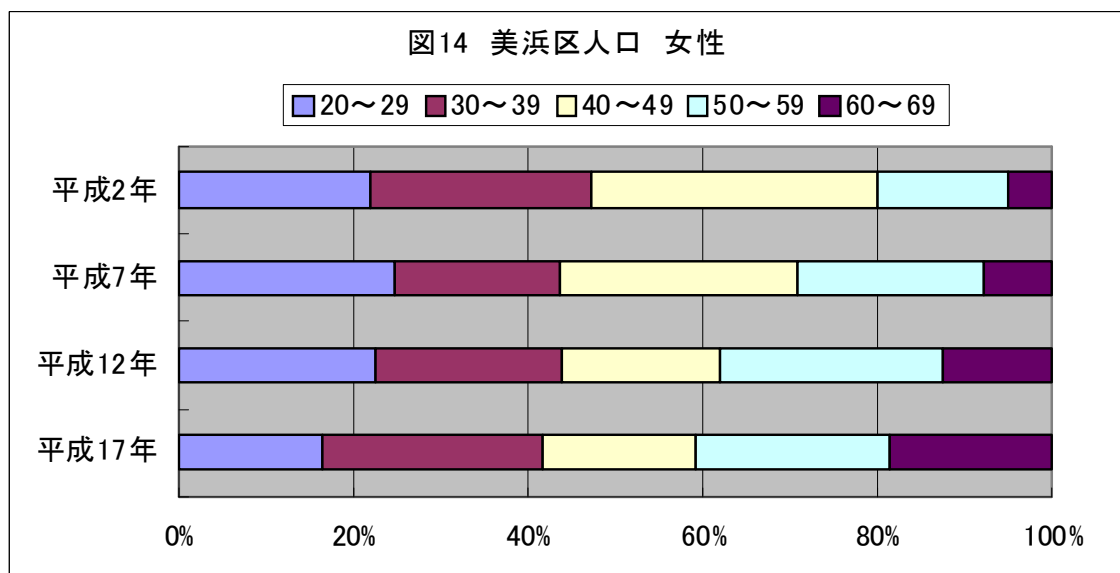
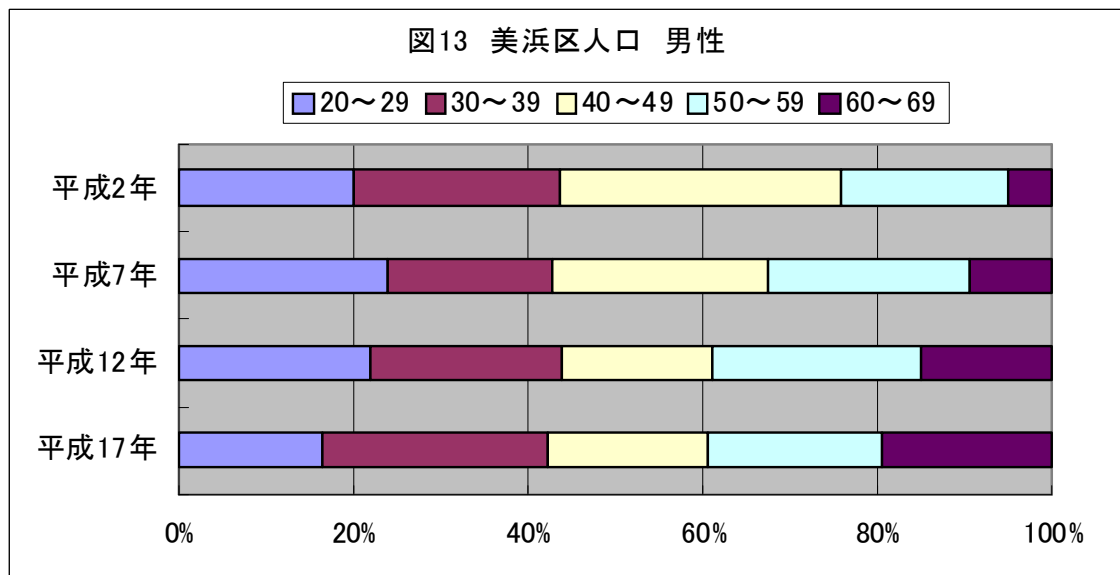
若葉区は市内最大の面積を誇る。大規模な自然公園や施設、加曽利貝塚をはじめとする文化財が多く、東部では農地が広がっている。北西部に市街地はあるものの、総人口に大きな変動はなく人口密度も低い。



(単位 人)

総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	19533	28194	34781	38128
女性	19831	27876	34406	37877

緑区は市内最も人口の少ない区だが人口増加率は高く、どの年齢層も幅広く増加している。ＪＲ外房線が各区域の中央を通っており、沿線にある鎌取・誉田・土気地区で宅地化が進んでいることや、東南部は都心に繋がる京成千原線が通ることが、若者や労働力人口を引き寄せた要因だろう。



(単位 人)

総数	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
男性	43551	46547	50410	52949
女性	44121	46849	51155	54665

美浜区は、県外に従業地を持つ就業者の割合が約4割と市内で最も高い。高層ビルやホテルが建ち並び、定住するイメージはあまりなかったが、中央部に高浜、真砂、高洲等の大規模な住宅地が並びベッドタウン化したことで、30代から50代の幅広い労働力人口の増加に繋がったのではないだろうか。

2. 千葉市の人口移動

A62055 渋谷 卓磨

2. 1. 千葉市の転入出状況

千葉市の転入出状況について、千葉市企画調整局統計課より毎年刊行される千葉市統計書の情報を元に調べてみた。データは平成4年から平成19年にかけてのものだが、全体的にみて転入・転出ともに市外からのものが多い。また、図1は表1の千葉市の転入出状況をグラフ化したものであり、市外からの転入は平成13年の52,000人をピークに、転出は平成8年の52,543人をピークに共に減少傾向にある。そして、市内についての転入・転出の値が同じなのは、千葉市内で転出した人が、また千葉市内に転入していくからである。

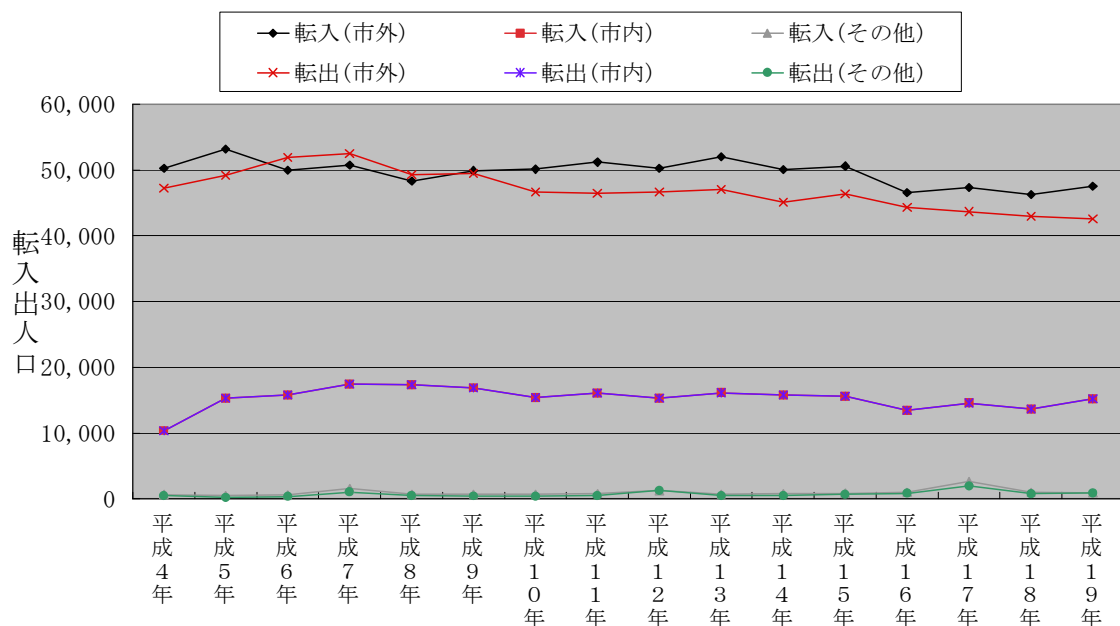
表1 千葉市転入出状況 平成4年(1992)年～平成19(2007)年

(単位:人)

	転入			転出		
	転入(市外)	転入(市内)	転入(その他)	転出(市外)	転出(市内)	転出(その他)
平成4年	50,229	10,374	640	47,264	10,374	513
平成5年	53,160	15,341	509	49,159	15,341	246
平成6年	49,961	15,841	575	51,906	15,841	370
平成7年	50,761	17,478	1,628	52,543	17,478	1,037
平成8年	48,337	17,346	750	49,287	17,346	533
平成9年	49,927	16,899	734	49,495	16,899	447
平成10年	50,120	15,428	718	46,696	15,428	398
平成11年	51,199	16,111	787	46,481	16,111	502
平成12年	50,282	15,331	1,253	46,669	15,331	1,277
平成13年	52,000	16,137	742	47,056	16,137	503
平成14年	50,082	15,819	797	45,104	15,819	510
平成15年	50,621	15,586	858	46,350	15,586	703
平成16年	46,543	13,484	997	44,344	13,484	862
平成17年	47,389	14,576	2,681	43,675	14,576	1,970
平成18年	46,230	13,684	989	42,965	13,684	773
平成19年	47,554	15,206	939	42,547	15,206	935

資料：千葉市企画調整局 千葉市統計書 平成4年～平成19年より

図1 千葉市転入出状況



2. 2. 昼夜間人口

千葉市の昼夜間人口について、国勢調査の情報を元に平成2年から平成17年にかけて調べてみた。5年ごとに行われた調査だが、どの年も昼間人口よりも夜間人口が多く、千葉市から市外に通勤・通学している人が多いことが伺える。また、この常住地による人口の中で、従業も通学もしていない人は、平成2年の時点で233,984人であったのに対し、平成17年では326,059人と大幅に増えている。そして、市内で従業・通学をする人は、ピーク時の平成2年で377,576人であったのに対し、平成17年では351,013人となり、市外で従業・通学をしている人（流出人口）も、ピーク時の平成7年の215,356人に対し、平成17年には200,816人になるなど、共に減少傾向にあるといえる。千葉市の夜間人口が年々増えていくなか、従業も通学もしていない人の割合が年々高くなっており、これは高齢化によるものと推察される。この他に、従業地・通勤地による人口の中で、市外に常住する人口（流入人口）は市外で従業・通学している人口（流出人口）には及ばないが、ピーク時の平成7年には189,102人にのぼり、平成17年には175,293人になるなど減少傾向をみせているが、まだまだ多くの人が千葉市を従業地・通学地として利用していることがわかる。

表2 夜間人口、流出・流入人口、昼間人口及び昼夜間人口比率の推移

(単位:人)

区 分	常 住 地 に よ る 人 口				従業地・通学地による人口	
	夜間人口 1) (A)	従業も通学 もしていない	市内で従業・ 通学	市外で従業・ 通学 (流出人口)	昼間人口 (B)	市外に常住する人口 (流入人口)
平成 2	824,034	233,984	377,576	205,849	772,914	154,729
7	856,593	258,259	372,386	215,356	830,339	189,102
12	883,008	289,331	360,261	201,875	858,702	177,569
17	919,550	326,059	351,013	200,816	894,027	175,293

資 料：国勢調査

(注) 年齢不詳を集計の対象から除外している。1)労働力状態不詳を含む。

3. 世帯構成

A62081 長島 瑠美

千葉市の統計情報（各年10月）を用いて平成11年～平成20年までの世帯数を調べた。世帯数は、国勢調査の結果を基礎として、毎月の住民基本台帳及び外国人登録の異動（出生・死亡・転出）を加減したものである。

千葉市は、中央区、花見川区、稲毛区、若葉区、緑区、美浜区の6区からなる。中央区は県都の中心的な区であり、県庁、市役所をはじめ国・県・市の各種公的機関が集中している。世帯数も6区の中で一番多い。ついで、花見川区、稲毛区、美浜区、若葉区、緑区となっている。平成11年～平成16年まで千葉市全体の世帯数は増加しているが平成17年で前年度と比べ1,193世帯減少したものの、平成18年度からはまた6,530世帯増加し、その後も増加を続けている（表1）。

表 1. 千葉市、行政区別世帯数

市・区	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年
千葉市	342,266	348,159	355,494	362,859	369,807
中央区	72,622	74,548	76,632	78,664	80,417
花見川区	69,408	70,597	71,911	73,236	74,022
稲毛区	59,777	59,932	60,524	61,014	61,639
若葉区	56,121	56,281	57,041	57,787	58,423
緑区	33,190	34,372	35,602	36,980	38,037
美浜区	51,148	52,429	53,784	55,178	57,269

市・区	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
千葉市	374,959	373,766	380,296	386,398	394,223
中央区	81,629	82,627	84,134	86,307	88,355
花見川区	74,543	72,547	73,651	73,873	74,946
稲毛区	62,629	62,863	63,802	64,837	66,228
若葉区	58,790	57,621	58,395	59,125	60,172
緑区	38,984	39,132	40,316	41,355	42,627
美浜区	58,384	58,976	59,998	60,901	61,895

資料：千葉市の統計情報（各年 10 月）

人口の増加以上の伸び率で総世帯数は増加している。少子化が進み、高齢化が進行していることから、単独世帯、核家族世帯数も年々増加し、単独世帯が全世帯数に占める割合は平成 17 年で 29.7%になる。核家族世帯数は年々増加しているが、全世帯に占める割合でもみると平成 2 年の 66.9%から年々減少をたどっていることがわかる。

表 2. 千葉市、「単独世帯」「核家族世帯」数

	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
単独世帯	62,370	84,196	98,833	107,233
核家族世帯	190,061	204,765	220,971	235,752

資料：国勢調査

表 3. 全世帯に占める「単独世帯」と「核家族世帯」の割合

(単位%)

	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
単独世帯	21.9	26.6	28.4	29.7
核家族世帯	66.9	64.7	63.5	63.1

4. 千葉市の就業形態

A62070 岡崎 亜季

千葉市の就業形態をみるために、総務省統計局の「就業構造基本調査」を用いた。就業構造基本調査は、国民の就業及び不就業の状態を調査し、全国及び地域別の就業構造に関する基礎資料を得ることを目的としており、5年ごとに行われている。調査対象は指定された調査区のうち総務大臣の定める方法により市町村が選定した抽出単位（世帯が居住することができる建物又は建物の一部）に居住する約45万世帯の15歳以上の世帯員として

いる。
平成4年10月1日における千葉市の有業者445,000人のうち、正規の職員・従業員総数は約281,000人である。そのうち男性は約208,000人、女性は約74,000人である。パート総数は約49,000人であり、男性は約1,000人、女性は48,000人である。アルバイト総数は約25,000人であり、男性は約13,000人、女性は約12,000人である。

平成9年10月1日における千葉市の有業者469,000人のうち、正規の職員・従業員総数は約287,000人である。そのうち男性は約211,000人、女性は約76,000人である。パート総数は約57,000人であり、男性は約3,000人、女性は53,000人である。アルバイト総数は約32,000人であり、男性は約16,000人、女性は約16,000人である。

平成14年10月1日における千葉市の有業者466,000人のうち、正規の職員・従業員総数は約263,000人である。そのうち男性は約201,000人、女性は約61,000人である。パート総数は約60,000人であり、男性は約5,000人、女性は約56,000人である。アルバイト総数は約38,000人であり、男性は約18,000人、女性は約19,000人である。

前回調査（平成9年）と比較すると、正規の職員・従業員数が24,000人の減少し、パート数が3,000人の増加、アルバイト数が6,000人の増加となっているのがわかる。前々回調査（平成4年）からの推移をみると、有業者総数は増加したが正規の職員・従業員数は減少し、パートとアルバイト数が増加している。

表1 就業状態、年齢、男女別15歳以上人口 (単位：千人)

雇用形態	平成4年			平成9年			平成14年		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
正規の職員・従業員	281	208	74	287	211	76	263	201	61
パート	49	1	48	57	3	53	60	5	56
アルバイト	25	13	12	32	16	16	38	18	19
有業者総数	445	277	168	469	289	180	466	288	178
無業者総数	253	75	178	269	82	186	309	101	208

表は総務省統計局所管の就業構造基本調査による結果である。

この調査結果は、標本調査による推定値である。

<参考資料>

- ・千葉市企画調整局統計課 千葉市統計書平成5年度版 『就業状態、年齢、男女別15歳以上人口』 (<http://www.city.chiba.jp/kikakuchosei/tokei/contents/toukeisyo/05toukei/05toukei.html>)
- ・千葉市企画調整局統計課 千葉市統計書平成10年度版 『就業状態、年齢、男女別15歳以上人口』 (<http://www.city.chiba.jp/kikakuchosei/tokei/contents/toukeisyo/10toukei/10toukei.html>)
- ・千葉市企画調整局統計課 千葉市統計書平成15年度版 『就業状態、年齢、男女別15歳以上人口』 (<http://www.city.chiba.jp/kikakuchosei/tokei/contents/toukeisyo/15toukei/15toukei.html>)

5. 国の環境行政

A62127 河野 恵

個人や企業が行う環境行動の背景には、国の目標として定められる法律があると考えた。そこで国が公布、施行した環境に関する法律の中から、特に今年のテーマに関係する地球温暖化やごみ問題に関する法律について抜き出し、次頁の年表にまとめた。

全体の流れを見てみると、2000年以前は「騒音規制法」や「環境影響評価（アセス法）」など、企業に関係する法律がほとんどであったのに対し、2000年以後、特に「京都議定書」が採択され環境省が発足してからは一般市民に関係する法律が出てきたことがわかる。特に「容器包装リサイクル法」や「家電リサイクル法」は個人の生活に深く関係してくる法律であり、企業向けであった環境対策が、個人向けになってきていると推測できる。

1993年に公布された「環境基本法」の背景には1967年に制定された「公害基本法」があると考えられる。「環境基本法」は、環境保全に関する国の政策の基本的な方向を示すものであり、基本理念や国や地方公共団体の責務、政策の基本となる事項を定めている。

1999年に施行された「地球温暖化対策推進法」の背景には、「気候変動に関する国際連合枠組条約（気候変動枠組条約）」及び、第3回気候変動枠組条約締約国会議（京都会議）があると考えられる。この法律の目的は、京都議定書目標達成計画を策定し、様々な活動による温室効果ガスの排出の抑制とその対策に全てのものが積極的に取り組み、地球温暖化対策の推進を図ることである。

2000年に施行された「循環型社会形成推進基本法」は、循環型社会を形成するためにつくられた法律で、背景には「環境基本法」があると考えられる。この法律によってリサイクルの基盤が確立した。

2001年に施行された「家電リサイクル法」は、廃棄物の適正な処理や再生資源の有効利用を目的としてつくられたもので、背景には前年に施行、制定された「循環型社会形成推進法」があると考えられる。この家電リサイクル法の特徴は、特定家庭用機器（具体例としては、エアコン、ブラウン管式テレビ、電気冷蔵庫・電気冷凍庫、電気洗濯機）を定めていることである。

2005年に発効した「京都議定書」の正式名称は、「気候変動に関する国際連合枠組条約の京都議定書」である。これは、1997年の国連温暖化防止京都会議（COP3）で採択された温暖化防止のための国際合意である。この議定書の背景である「国連気候変動枠組条約」は、その究極的な目標として、「気候系に対して危険な人為的干渉を及ぼすこととしない水準において大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させること」を掲げている。なおこの年からクールビズが盛んに呼びかけられるようになった。

2006年には「容器包装リサイクル法」が改正された。この正式名称は「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」である。この法律が制定されたことで、レジ袋の有料化や削減が、スーパーマーケットやコンビニエンスストアで広まり、エコバッグの普及に繋がったのではないかと推測される。

<国の環境行政年表>

年	月	法案等
1967	8月	「公害対策基本法」公布
1968	6月	「大気汚染防止法」，「騒音規制法」公布
1970	12月	「水質汚濁防止法」，「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」公布
1971	7月	環境庁発足
1978	6月	「省エネルギー法」制定
1988	5月	「特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律（オゾン層保護法）」制定
	6月	トロント会議開催 2005年までに先進国において自国の二酸化炭素の排出量を1988年の実績値より20%削減することが提案される
1991	4月	「地球環境憲章」を発表
1993	11月	「環境基本法」公布
1994	12月	「環境基本計画」公表
1997	6月	「環境影響評価（アセス法）」公布
	12月	地球温暖化対策推進本部，本部長，総理大臣設置
		京都議定書採択
1999	4月	「地球温暖化対策推進法」施行
2000	1月	「ダイオキシン類対策特別措置法」施行
	3月	「P R T R法（化学物質排出把握管理促進法）」，「循環型社会形成推進基本法」施行
	4月	「容器包装リサイクル法」施行
	6月	「改正廃棄物処理法」施行
	10月	「新環境基本法計画」公表，「循環型社会形成推進基本法」制定
2001	1月	環境省発足
	4月	「家電リサイクル法」施行
2002	3月	「エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）」改正
	4月	「フロン回収破壊法」施行
	5月	「地球温暖化対策推進法」改正，「建設リサイクル法」施行
	6月	京都議定書に締結
2003	2月	「土壌汚染対策法」施行
	7月	「環境教育推進法」制定
2004	6月	「景観法」公布
2005	2月	京都議定書発効
	3月	「愛・地球博」開催
	4月	「京都議定書目標達成計画」閣議決定
	5月	「チームマイナス6%」発足
	6月	「地球温暖化対策推進法」改正
	8月	「省エネ法」改正
2006	6月	「容器包装リサイクル法」改正
	10月	「第1回3R推進全国大会」開催

6. 千葉市の環境行政

A62126 木戸口 薫

千葉市で行われた環境保全・環境に関する事項の年表は以下の通りである。

千葉市の環境行政は、1970年の「千葉・千原地域公害防止計画」をはじめ、行政・事業者レベルの活動を90年代まで中心に行っていたが、2001年の「ちば市自然環境フェスタ21」など、2000年代から住民参加型のイベントに政策が変わっていった。2007年に「焼却ごみ1/3削減キャンペーン」を含む「(新)千葉市一般廃棄物(ごみ)処理基本計画」策定後には、キャンペーンの推進のため清掃工場を見学する「クリーンバスツアー」が実施され、ごみを中心とした政策が近年の環境対策のメインとされている。

年	月	内容
1970	12	千葉・市原地域公害防止計画策定
1971	4	千葉市環境保全基本条例制定
1973	6	第一回環境月間を実施
1974	12	千葉臨海地域公害防止計画策定
1977	12	最初の千葉環境白書を公表
1979	3	花見川に水質自動観測局を設置
1980	3	千葉臨海地域公害防止計画延長
1984	4	緑と水辺の基金設立
	10	緑と水辺の都市宣言
1985	3	千葉臨海地域公害防止計画の延長・拡大
1988	4	環境部内に産業廃棄物指導課設置
1989	4	千葉地域公害防止計画を策定
1993	3	千葉市生活排水対策推進計画策定
1995	3	千葉市環境基本計画策定
	3	千葉市自動車公害防止計画策定
1997	4	千葉市環境保全率先実行行動計画 (エコオフィスちばプラン)策定
1998	2	千葉地域公害防止計画を策定
1999	3	千葉市水環境保全計画策定
2001	3	ちば市自然環境フェスタ21開催
	3	千葉市生活排水対策推進計画の改定
2002	4	千葉市一般廃棄物(ごみ)処理基本計画の見直し
	6	千葉市環境基本計画の見直し
	11	千葉市地球温暖化防止実行計画の策定
	11	千葉市緑と水辺の基本計画の見直し
2003	3	蘇我エコロジーパーク構想策定
	6	コロジサン・シンポジウム2003構想
	8	ごみ減量のための「ちばルール」の策定
2004	3	千葉市地球温暖化対策推進計画策定
2006	3	千葉市地下水保全計画の策定
	3	第四次千葉市産業廃棄物処理指導計画の策定
	11	(新)千葉市自動車公害防止計画の策定
2007	3	(新)千葉市一般廃棄物(ごみ)処理基本計画 (消却ごみ1/3削減キャンペーン)策定
	11	千葉市マイバッグキャンペーンの実施
2008	2	クリーンバスツアー(清掃施設見学会)の実施

4 章 エコ行動をする要因

A62070 岡崎 亜季

1. 問題意識と研究テーマ

昨年（2008 年）はエコブームともいえる 1 年だったと感じる。「洞爺湖サミット」の影響はもちろんだが、報道番組でキャンドルナイトなどのエコイベントの様子が紹介されることやエコバッグやエコ替えなど「エコ」と付いた新しい言葉が誕生した。エコブームの代表ともいえるエコバッグは今や目にしたことがない人はいないだろう。そしてブームが起こるきっかけにはメディアの力が大きく影響しているだろう。

私はこのメディアの力により、人々はエコという環境に配慮した行動を行っているのではないかと考えた。なぜならメディアは社会で問題になっていることをすばやく取り上げ、私たちに強い印象を与える。特にテレビは視聴者の興味を引くように衝撃的映像や演出によって私たちに不安感を持たせている。私はこのようなテレビ映像を見る機会が多いと思われる人々、つまりテレビを見る時間が長い人々は環境問題の進行に不安を持つのではないかと考えた。そしてそれが環境に配慮した行動、つまり「エコ行動」をしようと思う要因になっているのではないかと考え仮説 1 を立てた。

私がこの仮説で考える「エコ行動」とはエコバッグやマイボトルなどの近年、流行してきたものとキャンドルナイトやエコツアーのようなイベントによってエコ意識を高めるものである。そして、その流行している「エコ行動」を行っている人は日頃から流行やムードに流されやすい人なのではないかと考えた。流行やムードに流されやすい人はメディアの影響を受けやすそうだからだ。そこで、流行やムードに流されやすい人はエコ行動の中でも特にエコブームの代表といえるエコバッグの使用をしているひとが多いのではないかと考え仮説 2 を立てた。

2. 仮説

＜仮説 1＞テレビを見る時間が長い人は環境問題が進行することへの不安があり、エコ行動を行う

＜仮説 2＞流行やムードに流されやすい人ほどエコバッグ使用率が高い

3. 仮説 1 の検証

3. 1 テレビの視聴時間のデータ分析

（1）テレビの視聴時間の単純集計結果

「1 時間以上 3 時間未満」が 57.4% と最も高く、次いで「3 時間以上 5 時間未満」が 20.3%、「1 時間未満」が 15.9%、「5 時間以上 7 時間未満」が 4.0%、「7 時間以上 9 時間未満」と「9 時間以上」が 1.2% であった。全体的にみると、5 時間未満が大半を占めている。（巻末の「単純集計表」を参照）

（2）テレビの視聴時間（独立変数）

人々のテレビの視聴時間を図るために、一日の平均テレビ視聴時間を「1 時間未満」、「1 時間以上 3 時間未満」、「3 時間以上 5 時間未満」、「5 時間以上 7 時間未満」、「7 時間

以上 9 時間未満」、「9 時間以上」の選択肢からの回答結果を用いる。そしてこの結果を 0 時間以上 3 時間未満、3 時間以上に 2 分類した。

表1 テレビの視聴時間

	度数(人)	相対度数(%)
0時間以上3時間未満	184	73.3
3時間以上	67	26.7
計	251	100.0

欠損値=7

「0 時間以上 3 時間未満」が 73.3%と最も多く、「3 時間以上」が 26.7%であった。

3. 2 環境問題への不安のデータ分析

(1) 環境問題への不安の単純集計結果

「地球温暖化」が 69.0%と最も不安度が高く、次に「食品の安全」の 59.0%、「大気汚染」の 51.2%、「食糧危機」の 49.0%、「ごみ問題」の 35.0%であった。全体的に「不安である」、「やや不安である」に当てはまる割合が高かった。(巻末の「単純集計表」を参照)

(2) 環境問題への不安度(独立変数)

環境問題が進行することへ不安があるか調べるために、「Q4_a 地球温暖化」、「Q4_b 大気汚染」、「Q4_c 食糧危機」、「Q4_d 食品の安全」、「Q4_e ごみ問題」という質問項目を挙げ、これらについて「不安である」、「やや不安である」、「あまり不安でない」、「不安でない」の 4 件法の質問文を作成した。なお、環境問題への不安度を分析するために「不安ではない」は 1 点、「あまり不安ではない」は 2 点、「やや不安である」は 3 点、「不安である」は 4 点というように 5~20 点にスコア化した。そして 5~16 点を「不安度が低い」、17 点~20 点を「不安度が高い」とした。

表2 環境問題の不安度

不安度	度数(人)	相対度数(%)
高い	161	63.4
低い	93	36.6
計	254	100.0

欠損値=4

不安度が「高い」人は 63.4%、不安度が「低い」人は 36.6%で不安度が高い人が半数以上を占めた。

3. 3 「テレビの視聴時間の長さで環境問題への不安」の検証

「テレビを見る時間が長い人は環境問題が進行することへの不安がある」の検証を行うためにテレビの視聴時間と環境問題の不安度をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2 変数間に有意な関連はみられなかった。

表3 テレビ視聴時間と環境問題への不安度 (単位%)

テレビ視聴時間	環境への不安度		計	
	高い	低い		
0時間以上 3 時間未満	62.1	37.9	100.0	(182人)
3時間以上	69.2	30.8	100.0	(65人)
全体	64.0	36.0	100.0	(247人)

$$\chi^2(1)=1.06 \quad p=0.3032$$

テレビの視聴時間が長い人のほうが、環境問題に関するテレビ見る機会が多く不安を持つのではないかと考え、この検証を行った。クロス表をみるとテレビ視聴時間の長さと環境問題への不安度にはあまり差がないことが分かる。このことから、テレビの視聴時間が長い人だけでなく短い人も環境問題が進行することに不安を持っていると考えられる。

3. 4 実行したことのあるエコ行動のデータ分析

(1) 今までに実行したことのあるエコ行動の単純集計結果

「クールビズ」が 51.2%と最も実施率が高く、次いで「マイ箸の携帯」が 22.8%、「エコ替え実行」が 18.9%、「オーガニックコットン製品」が 13.0%、「キャンドルナイトへの参加」と「カーボンオフセット」が 3.2%で、最も実施率が低かったのは「エコツアー参加」の 2.8%であった。メディアでも取り上げられることの多い「クールビズ」や「マイ箸」は身近で始めやすいことから実施率が高いと思われる。また、「どれも実行したことがない」は 1.1%だった。(巻末の「単純集計表」を参照)

(2) マイボトル持参の単純集計結果

水筒(マイボトル)持参を「いつも行う」が 30.0%、「ときどき行う」が 26.9%、「あまり行わない」が 15.0%、「まったく行わない」が 28.1%だった。マイボトルを持参する人は約 7 割である(巻末の「単純集計表」を参照)。

(3) エコバッグ所持の単純集計結果

エコバッグ所持は、「購入・もらった」が 59.5%と最も多く、「以前から使用」が 11.9%、「購入かもらったかは不明だが持っている」が 5.2%、「持っていない」が 23.4%だった。全体的にみてもエコバッグを所持している人は 7 割以上とかなりエコバッグの普及率が高いことが分かる。

(4) エコバッグ使用頻度の単純集計結果

エコバッグを持っている人のうちエコバッグ使用頻度は、「いつも持つて行く」が 47.4%と最も多く、「ときどき持つて行く」が 37.0%、「あまり持つていかない」が 10.4%、「持つて行ったことはない」が 5.2%だった。(巻末の「単純集計表」を参照)

(5) エコ行動の実行度(従属変数)

実行したことのあるエコ行動を調べるために、「Q6_1 マイ箸の携帯」、「Q6_2 キャンドルナイトへの参加」、「Q6_3 エコ替えの実行」、「Q6_4 カーボンオフセット」、「Q6_5 エコツアーへの参加」、「Q6_6 オーガニックコットンでできた服の購入」、「Q6_7 クールビズ」を質問項目として、実行経験の有無を尋ねる質問文を作成した。「Q9_i 水筒(マイボトル)を持参」と「Q12_1 エコバッグの使用頻度」はそれぞれ頻度で尋ねる質問文を作成した。なお、「Q9_i 水筒(マイボトル)を持参」の頻度は、「いつも行う」、「ときどき行う」、「あまり行わない」を合わせて「実行したことがある」とし、「まったく行わない」を「実

行したことがない」とした。エコバッグについては「Q12_1 エコバッグの使用頻度」で「いつも持っていく」と「ときどき持っていく」と「あまり持っていない」を合わせて「実行したことがある」とし、「持っていなかったことはない」と「Q12 エコバッグ所持」のエコバッグを「持っていない」を合わせて「実行したことがない」とした。表4は実施率の高い順に並べ替えてある。

表4 今までに実行したエコ行動

	度数(人)	実施率(%)
エコバッグ	182	72.5
水筒(マイボトル)を持参	182	71.9
クールビズ	130	51.2
マイ箸の携帯	58	22.8
エコ替え実行	48	18.9
オーガニックコットン製品	33	13.0
キャンドルナイトへの参加	8	3.2
カーボンオフセット	8	3.2
エコツアー参加	7	2.8

Q6_1～Q6_8 欠損値=4 Q9_i 欠損値=5 Q12_1 欠損値=66

※実施率の高い順に並べ替えてある。

Q6_8「どれもやったことがない」は31.1% (79人) だった。

「エコバッグ」が 72.5%ともっとも実施率が高く、次いで「水筒(マイボトル)を持参」の 71.9%、「クールビズ」の 51.2%、「マイ箸の携帯」の 22.8%、「エコ替え実行」の 18.9%、「オーガニックコットン製品」の 13.0%、「キャンドルナイトへの参加」の 3.2%、となった。次に、エコ行動実行度を分析するために表4にまとめた Q6_1～Q6_7、Q9_i、Q12-1の項目の回答がどれもあてはまらなかったら0点、1つあてはまったら1点、2つあてはまったら2点、3つあてはまったら3点……すべてあてはまったら9点というように0点～9点にスコア化した。その平均値である5点で区切り、0～4点を「実行度が低い」、5～9点を「実行度が高い」とした。

表5 エコ行動実行度

実行度	度数(人)	相対度数(%)
高い	119	64.0
低い	67	36.0

欠損値=72

「実行度が高い」人は 64.0%、「実行度が低い」人は 36.0%で「実行度が高い」人が6割以上を占めた。

3. 5 「環境問題への不安とエコ行動の実行」の検証

「環境問題への不安がある人はエコ行動を行う」の検証を行うために環境問題の不安度とエコ行動実行度をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2変数間に仮説とは逆の有意な関連がややみられた。

表6 不安度とエコ行動実行度 (単位%)

環境問題の不安度	エコ行動実行度		計	
	高い	低い		
高い	59.2	40.8	100.0	(130人)
低い	76.4	23.6	100.0	(55人)
全体	64.3	35.7	100.0	(185人)

$$\chi^2(1)=4.94 \quad p=0.0262$$

環境問題へ不安を持つことがエコ行動を実行する要因になっているのではないかと考え、この検証を行った。クロス表をみると環境問題への不安度が「高い」人よりも環境問題への不安度が「低い」人のエコ行動実行度のほうが高いという傾向が見られた。このことから、環境問題への不安がエコ行動を実行する要因になっているわけではなく、別の要因が考えられる。

3. 6 「テレビの視聴時間とエコ行動の実行」の検証

「視聴時間の長い人」は「エコ行動する」ことに影響を与えているのかを検証するためにテレビの視聴時間とエコ行動実行度をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2変数間に有意な関連はみられなかった。

表7 テレビ視聴時間とエコ行動実行度 (単位%)

テレビ視聴時間	エコ行動実行度		計	
	高い	低い		
0時間以上3時間未満	62.2	37.8	100.0	(135人)
3時間以上	65.9	34.1	100.0	(44人)
全体	63.1	36.9	100.0	(179人)

$$\chi^2(1)=0.19 \quad p=0.6598$$

「3. 5 環境問題への不安とエコ行動の実行」の検証で、環境問題への不安からエコ行動を実行しているのではないことがわかったので、テレビの視聴時間はエコ行動実行に関係しているのかを調べるためこの検証を行った。クロス表をみると、視聴時間の長さでエコ行動実行度の高さにはほとんど差が見られなかった。このことから、テレビの視聴時間の長さがエコ行動を実行する要因になっているわけではないと考えられる。

4. 仮説2の検証に用いたデータ分析

4. 1 流行・ムードへの流れやすさ

(1) 流行・ムードに流されるかの単純集計結果

「テレビCMで見た商品を買う」に当てはまると回答した人が37.1%と最も多く、次いで「限定商品に弱い」が30.5%、「情報番組で紹介されたものを試す」が27.0%、「衝動買いをしてしまう」が18.8%、「雑誌やネットで流行をチェック」が17.6%、「友人・知人に勧められたものは試す」が15.6%だった。もっとも回答が少なかったのは「新商品が出ると買う」の10.2%だった。(巻末の「単純集計表」を参照)

(2) 流行・ムードへの流れやすさ (独立変数)

流行・ムードへの流れやすさを調べるために、日常生活において人々が流行やムードに流されることによって起こすと思う行動を「Q15_1 テレビCMで見た商品を買う」、「Q15_2 雑誌やネットで流行をチェック」、「Q15_3 新商品が出ると買う」、「Q15_4 情報

番組で紹介されたものを試す」、「Q15_5 衝動買いをしてしまう」、「Q15_6 『限定』商品に弱い」、「Q15_7 友人・知人に勧められたものは試す」の7項目をあげ、質問文を作成した。なお、流行・ムードへの流されやすさを分析するために Q15_1～Q15_7 の項目の回答がどれもあてはまらなかったら0点、1つあてはまったら1点、2つあてはまったら2点、3つあてはまったら3点……すべてあてはまったら7点、というように0点～7点にスコア化した。そして0点を「流されない」、1～2点を「やや流される」、3～7点を「流される」とした。

表8 流行・ムードへの流されやすさ

流されやすさ	度数(人)	相対度数(%)
流される	60	23.4
やや流される	115	44.9
流されない	81	31.6
全体	256	100.0

欠損値=4

「やや流される」が44.9%、次いで「流されない」の31.6%、「流される」の23.4%だった。

4. 2 エコバッグ使用率

(1) エコバッグ所持と使用頻度の単純集計は巻末の「単純集計表」を参照。

(2) エコバッグ使用率（従属変数）

エコバッグの使用率を調べるために Q12 エコバッグ所持でエコバッグを所持していると回答した人にエコバッグを買い物へ行く際、「いつも持っていく」、「ときどき持っていく」、「あまり持っていない」、「持っていたことはない」の選択肢からの回答を用いる。次の表9は「いつも持っていく」と「ときどき持っていく」を合わせて「使用率が高い」、「あまり持っていない」を「使用率が低い」、「持っていたことはない」と Q12 エコバッグ所持のエコバッグを「持っていない」を合わせて「持っていたことはない」とした変数である。

表9 エコバッグ使用率

	度数(人)	相対度数(%)
高い	162	64.5
低い	20	8.0
持っていたことはない	69	27.5
計	258	100.0

欠損値=7

エコバッグの「使用率が高い」が64.5%、「使用率が低い」が8.0%、「持っていたことはない」が27.5%だった。このことからエコバッグを所持している人は6割以上の人が実際に使用していることが分かる。

5. 仮説2の検証

5. 1 「テレビの視聴時間と流行・ムードへの流されやすさ」の検証

仮説2の検証に入る前に「流行やムードに流されやすい人はテレビの影響を受けている」の検証を行う。流行・ムードへの流されやすさとテレビ視聴時間をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、クロス表をみると、視聴時間が「0 時間以上 3 時間未満」よりも「3 時間以上」のほうが流行やムードに「流される」割合が約 1 割高いという傾向が見られたが、2 変数間には有意な関連が見られなかった。

表10 テレビ視聴時間と流行・ムードへの流されやすさ (単位%)

テレビ視聴時間	流されやすさ			計	
	流される	やや流される	流されない		
0時間以上3時間未満	19.2	46.7	34.1	100.0	(182人)
3時間以上	29.9	43.3	26.9	100.0	(67人)
全体	22.1	45.8	32.1	100.0	(249人)

$$\chi^2(2)=3.4158 \quad p=0.1812$$

5. 2 「流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率」の検証

「流行やムードに流されやすい人ほどエコバッグ使用率が高い」の検証を行うために、流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、クロス表をみると、流行やムードに「流される」人は「流されない」人よりもエコバッグ使用率が 2 割ほど高いという傾向が見られたが、2 変数間には有意な関連が見られなかった。

表11 流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ	エコバッグ使用率			計	
	高い	低い	持っていた ことはない		
流される	73.7	8.8	17.5	100.0	(57人)
やや流される	67.3	6.2	26.6	100.0	(113人)
流されない	55.7	10.1	34.2	100.0	(79人)
全体	65.1	8.0	26.9	100.0	(249人)

$$\chi^2(4)=6.16 \quad p=0.1875$$

5. 3 「性別と流行・ムードへの流れやすさとエコバッグ使用率」の検証

先の 5. 2 「流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率」の検証で流行やムードへの流されやすさとエコバッグ使用率には有意な関連が見られなかったが、性別では違いが見られるのかを検証するために、性別とエコバッグ使用率をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2 変数間には有意な関連が見られた。性別の単純集計結果は基本属性を参照。

表12 性別とエコバッグ使用率 (単位%)

性別	エコバッグ使用率			計	
	高い	低い	持っていた ことはない		
男性	44.7	7.5	47.9	100.0	(94人)
女性	76.8	8.4	14.8	100.0	(155人)
全体	64.7	8.0	27.3	100.0	(249人)

$$\chi^2(2)=32.77 \quad p<.0001$$

女性のほうがエコバッグを使用する機会が多く、使用率も高いのではと考え、この検証を行った。クロス表を見ると男性のエコバッグ使用率が「高い」人が 44.7%に対し、女性性はエコバッグ使用率が「高い」人が 76.8%であった。このことから、男性より女性のほうがエコバッグ使用率が高いことが分かる。

次に性別と流されやすさをクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2変数間には有意な関連が見られた。

表13 性別と流行・ムードへの流されやすさ (単位%)

性別	流されやすさ			計	
	流される	やや 流される	流され ない		
男性	12.8	41.5	45.7	37.0	(94人)
女性	30.0	46.9	23.1	63.0	(160人)
全体	23.6	44.9	31.5	100.0	(254人)

$$\chi^2(2)=17.45 \quad p=0.0002$$

性別とエコバッグ使用率の χ^2 検定の結果、女性のエコバッグ使用率が高いことが分かったので、男性より女性のほうが流行やムードに流されやすいのではと考え、この検証を行った。クロス表を見ると、男性は「流されない」人が 45.7%と最も多く、流行やムードに流されやすい人が少ないことがわかった。女性は「やや流される」人が 46.9%、「流される」人が 30.0%とやや流行やムードに流されやすい人が多いことが分かった。

以上の結果をもとに、性別とエコバッグ使用率に流されやすさは関係しているのかを検証するために、性別と流行・ムードへの流れやすさとエコバッグ使用率をクロス集計した。結果、男性と流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率のクロス集計が WARNING になってしまったためカテゴリーの再統合をしたがサンプル数の不足で WARNING はなくならなかった。

表14 流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ(男性)	エコバッグ使用率			計	
	高い	低い	持っていた ことはない		
流される	58.3	8.3	33.3	100.0	(12人)
やや流される	42.1	5.3	52.6	100.0	(38人)
流されない	44.2	9.3	46.5	100.0	(43人)
全体	45.2	7.5	47.3	100.0	(93人)

$$\text{WARNING} \quad \chi^2(4)=1.73 \quad p=0.7859$$

表15 流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ(女性)	エコバッグ使用率			計	
	高い	低い	持っていた ことはない		
流される	77.8	8.9	13.3	100.0	(45人)
やや流される	79.7	6.8	13.5	100.0	(74人)
流されない	71.4	11.4	17.1	100.0	(35人)
全体	77.3	8.4	14.3	100.0	(154人)

WARNING $\chi^2(4)=1.10$ $p=0.8938$

男女別にクロス表をみると、男性は流行やムードに「流されない」人より「流される」人のほうがエコバッグ使用率が1割ほど高いという傾向が見られた。女性は流されやすさとエコバッグ使用率にはほとんど差が見られなかった。このことからエコバッグ使用については女性よりも男性のほうが流行やムードに流されやすい人の使用率が高いことが分かった。

これらの分析により、女性は流行やムードに流されやすくエコバッグの使用率が高いが、流行に流されやすいからエコバッグを使用するというわけではないことがわかった。

5. 4 「流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度」の検証

仮説2の「流行・ムードへの流されやすさとエコバッグ使用率」は立証されなかったが、エコバッグを含めたエコ行動とは関係があるかの検証を行うため、流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、2変数間に有意な関連性はみられなかった。

表16 流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ	エコ行動実行度		計	
	高い	低い		
流される	60.0	40.0	100.0	(50人)
やや流される	67.1	32.9	100.0	(82人)
流されない	62.3	37.7	100.0	(53人)
全体	63.8	36.2	100.0	(185人)

$\chi^2(2)=0.75$ $p=0.6883$

流行やブームに流されやすい人はエコブームにも流されてエコ行動をしているのではないかと考え検証を行った。クロス表をみると、流行やムードに「流される」人と「流されない」人のエコ行動実行度にはほとんど差が見られなかった。このことから流行やムードへの流されやすさはエコ行動を実行する要因にはなっていないと考えられる。

5. 5 「性別と流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度」の検証

先の5. 4「流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度」の検証で流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度に関連がみられないことが分かったが、性別では違いがあるのかを検証するために性別とエコ行動実行度をクロス集計した結果、2変数間に有意な関連性が見られた。

表17 性別とエコ行動実行度 (単位%)

性別	エコ行動実行度		計
	高い	低い	
男性	76.9	23.1	100.0 (52人)
女性	59.0	41.0	100.0 (134人)
全体	64.0	36.0	100.0 (186人)

$$\chi^2(1)=5.25 \quad p=0.0220$$

クロス表を見ると、エコ実行度が高い人が男性は 76.9%、女性は 59.0%だった。このことから女性よりも男性のほうがエコ行動度が高い人が多いことが分かる。

以上の結果をもとに、性別と流されやすさとエコ行動実行度をクロス集計した結果、男性と流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度のクロス集計が WARNING になってしまったためカテゴリーの再統合をしたがサンプル数の不足のために WARNING はなくならなかった。

表18 流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ(男性)	エコ行動実行度		計
	高い	低い	
流される	100.0	0.0	100.0 (7人)
やや流される	80.0	20.0	100.0 (20人)
流されない	66.7	33.3	100.0 (24人)
全体	76.5	23.5	100.0 (51人)

$$\text{WARNING } \chi^2(2)=3.54 \quad p=0.1674$$

表19 流行・ムードへの流されやすさとエコ行動実行度 (単位%)

流行・ムードへの 流されやすさ(女性)	エコ行動実行度		計
	高い	低い	
流される	53.5	46.5	100.0 (43人)
やや流される	62.9	37.1	100.0 (62人)
流されない	58.6	41.4	100.0 (29人)
全体	59.0	41.0	100.0 (134人)

$$\chi^2(2)=0.93 \quad p=0.6276$$

男性の方のみ仮説に近い関係がみられるが、有意といえるほどの差ではなかった。

6. 考察

今回の調査分析では私の立てた 2 つ仮説は検証することができなかった。仮説 1 の「テレビを見る時間が長い人は環境問題が進行することへの不安があり、エコ行動を行う」の検証ために実施した「テレビの視聴時間」、「環境への不安度」、「エコ行動実行度」の関連は認められなかった。環境問題への不安度が高い人は 6 割以上を占めたが、それはテレビの視聴時間の長さによるものではなかった。エコ行動実行度が高い人は 6 割以上を占めたが、環境問題への不安とテレビの視聴時間の長さによるものではなかった。以上の χ^2 検定の結果とクロス集計分析から、エコ行動を実行している人は自らがエコ行動をしていることで今後、環境問題は不安という悪い方向ではなく良い方向へ向かうと思っているから環境問題への不安度が高かったのではないだろうか。また、エコ行動をするきっかけにメ

ディアの影響は多少受けているものの、それはテレビの視聴だけに限られていないことがわかった。

仮説 2 の検証に入る前に、「流行やムードに流されやすい人はテレビの影響を受けている」の検証のために実施した「テレビの視聴時間」と「流行・ムードへの流されやすさ」の関連は認められなかった。仮説 2 の「流行やムードに流されやすい人ほどエコバッグ使用率が高い」の検証のために実施した「流行・ムードへの流されやすさ」と「エコバッグ使用率」の関連は認められなかった。性別でエコバッグ使用率をみると、男性より女性のほうが使用率が高く、エコ行動は男性の方が高かった。流行やムードに流されやすいこととエコバッグ、エコ行動との関連という仮説は、男性のみでみるとやや支持されているが、サンプル数が少なく統計的な検証には至らなかった。女性だけでみるとほとんど関連がみられなかった。女性は流行やムードに流されやすいこと、女性はエコバッグ使用率も男性よりも高いと言えるが、ただし流行やムードの流されやすさとエコバッグ使用率について有意差はみられなかった。私は女性のほうが流行やムードなどに流されやすいことは実証されたが、そのことは直接エコ行動には結びついていなかった。環境問題やエコ行動に関しては女性よりも男性のほうが敏感で協調性があるのではないだろうかと推測した。

今回の調査ではエコ行動の要因を明らかにすることはできなかったが、環境問題を不安を感じて何か行動をするという時代はもう終わっていて、エコはファッションのような気軽な感覚であるのが当たり前ようになってきているのではないかと感じた。

5 章 節約行動と環境意識

A62126 木戸口 薫

1. 問題意識

環境に良いことをしよう、良いものを使おうという風潮が昨今強くなっており、環境に配慮した物に買い換えようというエコ替えや、スーパーのエコバック推進キャンペーン、千葉市が推進している「減らそう！ 焼却ゴミ 1/3 削減キャンペーン」など、企業・行政ともに環境に配慮した商品・企画を出している。

しかし、エコ替えもエコバックも、実際に購入や実行するのは消費者や市民である。いくら環境に良いと言われても、環境に良いだけでは購入・実行には進まないと思う。消費者は経済的に得であると納得できる行動をする。企業側もそれを理解しており、エコ替えをすれば環境に良い上に節電・節水効果もあるから金銭的に得であることをアピールしているし、スーパーのエコバック推進キャンペーンも、レジ袋を断れば割引してくれる等、自分にも得があることをアピールしている。

だが、行政のキャンペーンはどのようなのだろうか。焼却ごみを減らすことが市民の直接の利益になるとは考えにくいし、実行には手間もかかる。実際、キャンペーン開始前の平成 18 年度の年間焼却ごみの総量は 330,692 トン、キャンペーンを開始した平成 19 年度の年間焼却ごみ総量は 306,805 トンと、キャンペーン開始前後のごみ総量は大きな差は見られなかった。千葉市はこのキャンペーンの実施理由として、「ごみを削減すれば、清掃工場の建て替え費用の節減、温室効果ガスの排出量削減、最終処分場の延命化が図られる」と述べている。直接的とは言えないが、市民にもメリットはある。しかしそのメリットは市民の生活とはかけ離れたメリットであり、企業の「買い換えれば節電・節水」というアピールに比べると得だとは言にくい。手間もかかってしまい、余暇時間のある人しか実行に至らなかったのが、昨年の効果が低かった理由ではないかと考える。

また、CM など宣伝の場が多い企業に比べて市のキャンペーンの宣伝は限られている。長く住んでいる人はどこに行けば、市の情報が手に入るか分かっているが、住んでいる期間が短い人は、どこに行けばよいのか分からない。市の行政に全て受身にならざるを得ない。情報量の差も、効果の低かった原因ではないだろうか。

企業の戦略と市の政策の違いを踏まえて、私は以下の仮説を考えた。

- ①節約行動をする人ほど、節約につながる環境対策をしている。
- ②余暇時間が長い人ほど、手間のかかる環境対策を実行している。
- ③居住期間が長い人ほど、市で行われている環境対策を認知している。

2. 単純集計

表1 節約行動の単純集計(q10 a、q10 c、q10 d、q10 e、q10 f、q10 o、q10 p) 単位%(人)

	いつも行う	ときどき 行う	あまり 行わない	行わない	(度数)	(欠損値)
割引クーポンやポイントカードを利用す	50.6	31.5	8.2	9.7	(257)	(1)
似た商品は安い物を選ぶ	32.3	37.8	22.4	7.5	(254)	(4)
無駄な物は買わず、必要なものだけ購入する	31.3	48.0	19.5	1.2	(256)	(2)
レンタルショップを利用する	21.0	31.0	19.4	28.6	(252)	(6)
中古品も気にせず購入する	16.9	27.6	36.6	18.9	(254)	(4)
リサイクルショップ利用	10.2	22.8	33.0	34.1	(255)	(3)
質よりも量を重視して商品を購入する	7.9	22.2	38.5	31.4	(252)	(6)

仮説①に利用する節約行動の単純集計は、「割引クーポンやポイントカードを利用する」が 50.6%と最も多く、「質よりも量を重視して商品を購入する」が 7.9%と最も少ない結果となった。また、「レンタルショップを利用する」、「中古品も気にせず購入する」、「リサイクルショップ利用」など、レンタル品や中古品はあまり利用されていない傾向が分かった。

表2 手間のかかる環境対策の単純集計(q09 e、09 f、q09 j、q09 p、q10 h、q12sq01) 単位%(人)

	いつも行う	ときどき 行う	あまり 行わない	行わない	(度数)	(欠損値)
エコバッグの利用	59.3	12.0	23.5	5.2	(237)	(7)
なるべく物を捨てず、長く使う	45.5	44.3	9.0	1.2	(255)	(3)
メモ用紙として再利用	40.6	44.1	11.3	3.9	(256)	(2)
公共交通機関を利用する	37.1	37.1	18.0	7.8	(256)	(2)
修理・補修	29.8	49.0	14.9	6.3	(255)	(3)
水筒持参	27.2	40.1	17.2	9.5	(254)	(4)
不用品リサイクル	16.5	39.8	24.8	18.9	(254)	(4)
人に譲る、またはお下がりを買う	16.1	23.6	38.2	22.1	(254)	(4)

仮説②に利用する手間のかかる環境対策の単純集計は、「エコバッグの利用」が 59.3%と最も高く、「人に譲る、またはお下がりを買う」の 16.1%が最も低い結果となった。

3. 仮説①（節約行動をする人ほど、節約につながる環境対策をしている）の検証

3. 1 仮説検証に用いた変数の分析

(1) 節約行動（独立変数）

節約行動をするかどうかについて調べるため、日常的に行っている行動について聞いている質問において、お金をあまり使わなくて済むことが分かる項目を用いた。具体的には、q10 から「リサイクルショップを利用する」、「レンタルショップ（本、CD、DVD など）を利用する」、「割引クーポンやポイントカードを利用する」、「質よりも量を重視して商品を購入する」、「同じ種類の商品はより安いものを選ぶ」、「人に譲る、またはお下がりをもろう」、「中古品でも気にしないで購入する」の 7 つの項目である。分析するにあたって、この 7 つの項目を逆転、統合し、中央値の 18 で高低に分けて、「節約行動」という新しい変数を作った。中央値よりも高い人を、節約行動に「積極的」、中央値よりも低い人を、節

約行動に「消極的」とした。

表3 節約行動(q10_a、q10_c、q10_d、q10_e、q10_f、q10_o、q10_pを合成)

	度数(人)	相対度数(%)
積極的	118	45.7
消極的	140	54.3
計	258	100.0

節約行動に「積極的」な人は 118 人 (45.7%)、「消極的」な人は 140 人 (54.3%) である。

(2) 節約につながる環境対策 (従属変数)

節約につながる環境対策について調べるために、節電か節水を行っているかどうか分かる項目を用いた。具体的には、Q9 から「部屋の電気をこまめに消す」、「冷暖房の電気を控えめに設定する」、「使わない家電製品の主電源を切る」、「水を使うとき、出しっぱなしにしない」、「体や頭を洗い流すとき以外は、シャワーの水を止める」、「風呂の残り湯を洗濯に使う」の 6 つの項目を利用した。それぞれの度数分布表は以下の通りである。

表4 部屋の電気をまめに消す(q09_j)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	152	59.4
時々行う	82	32.0
あまり行わない	19	7.4
全く行わない	3	1.2
計	256	100.0

欠損値=2

表5 冷暖房を控えめに設定する(q9_k)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	146	57.3
時々行う	86	33.7
あまり行わない	16	6.7
全く行わない	6	2.4
計	255	100.0

欠損値=3

表6 使わない家電製品の主電源を切る(q9_l)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	109	42.6
時々行う	66	25.8
あまり行わない	60	23.4
全く行わない	21	8.2
計	256	100.0

欠損値=2

節電行動は、「部屋の電気をまめに消す」の「いつも行う」が 152 人 (59.4%)、「冷暖房を控えめに設定する」の「いつも行う」が 146 人 (57.3%)、「使わない家電の主電源を切る」の「いつも行う」が 109 人 (42.6%) と、全て「いつも行う」が最も高い結果となった。

表7 水を出しっぱなしにしない(q9_m)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	144	56.7
時々行う	81	31.9
あまり行わない	25	9.8
全く行わない	4	1.6
計	254	100.0

欠損値=4

表8 シャワーの水をまめにとめる(q9_n)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	166	64.8
時々行う	45	17.6
あまり行わない	32	12.5
全く行わない	13	5.1
計	256	100.0

欠損値=2

表9 風呂の残り湯を洗濯に使う(q9_o)

	度数(人)	相対度数(%)
いつも行う	89	34.9
時々行う	27	10.6
あまり行わない	47	18.4
全く行わない	92	36.1
計	255	100.0

欠損値=2

節水行動は、「水を出しっぱなしにしない」の「いつも行う」が 144 人(56.7%)、「シャワーの水をまめに止める」の「いつも行う」が 166 人(64.8%)と、この2つは「いつも行う」が最も高い結果となったが、「風呂の残り湯を洗濯に使う」は「いつも行う」が 89 人(34.9%)と「全く行わない」が 92 人(36.1%)と、いつも行う人と全く行わない人にはっきりと二分化される結果となった。

3. 2 仮説①の検証

検証の際、従属変数である「節約につながる環境対策」の「あまり行わない」と「行わない」は、「あまり行わない」に合成して使用する。

表10 節約行動と部屋の電気をまめに消す行動(q09_j)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	部屋の電気をまめに消す行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	71.2	22.0	6.8	100.0 (118人)
消極的	49.3	40.6	10.1	100.0 (138人)
全体	59.4	32.0	8.6	100.0 (256人)

 $\chi^2(3)=12.8119$ p=0.0017

表11 節約行動と冷暖房を控えめに設定する行動(q09_k)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	冷暖房を控えめに設定する行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	66.1	27.1	6.8	100.0 (118人)
消極的	49.6	39.4	10.1	100.0 (137人)
全体	57.3	33.7	9.0	100.0 (255人)

$$\chi^2(3)=7.0668 \quad p=0.0292$$

表12 節約行動と使わない家電製品の主電源を切る行動(q09_l)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	使わない家電製品の主電源を切る行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	55.9	25.4	18.6	100.0 (118人)
消極的	31.2	26.0	42.8	100.0 (138人)
全体	42.6	25.8	31.6	100.0 (256人)

$$\chi^2(3)=20.8647 \quad p<0.0001$$

節約行動と節電行動の関係性は、節約行動に積極的な人の方がいずれも節電行動をしているという結果となった。

表13 節約行動と水を出しっぱなしにしない行動(q09_m)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	水を出しっぱなしにしない行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	66.1	26.3	7.6	100.0 (118人)
消極的	45.8	36.8	14.7	100.0 (136人)
全体	56.7	31.9	11.4	100.0 (254人)

$$\chi^2(3)=8.3952 \quad p=0.0150$$

表14 節約行動とシャワーの水をまめにとめる行動(q09_n)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	シャワーの水をまめに止める行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	66.1	18.6	15.3	100.0 (118人)
消極的	63.8	16.7	19.6	100.0 (138人)
全体	64.8	17.6	17.6	100.0 (256人)

$$\chi^2(3)=0.8674 \quad p=0.6481$$

表15 節約行動と風呂の残り湯を洗濯に使う行動(q09_o)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	風呂の残り湯を洗濯に使う行動			計
	いつも行う	時々行う	あまり行わない	
積極的	42.4	8.5	49.1	100.0 (118人)
消極的	28.5	12.4	59.1	100.0 (137人)
全体	34.9	10.6	54.5	100.0 (255人)

$$\chi^2(3)=5.5955 \quad p=0.0609$$

節約行動と節水行動の関係性については、「水を出しっぱなしにしない」と「風呂の残り湯

を洗濯に使う」は関係性は弱く、「シャワーの水をまめにとめる」の差は見られなかった。

次に、節約行動と、節電行動のうち有意の認められた「節約行動と使わない家電の主電源を切る行動」と、節水行動で弱い関係が認められた「節約行動と水を出しっぱなしにしない行動」性別によるクロス集計の結果は以下の通りである。なお、分析の際「節約行動と使わない家電の主電源を切る行動」と「節約行動と水を出しっぱなしにしない行動」の「時々行う」と「あまり行わない」は「時々行う」に合成して利用した。

表16 性別(q02)と節約行動のクロス集計表 単位%(人)

性別	節約行動		計
	積極的	消極的	
男性	45.3	54.8	100.0 (95人)
女性	46.6	53.4	100.0 (161人)
全体	46.1	53.9	100.0 (256人)

$$\chi^2(1)=0.0419 \quad p=0.8377$$

表17 性別(q02)と使わない家電製品の主電源を切る行動(q09_l)のクロス集計表 単位%(人)

性別	使わない家電製品の主電源を切る行動		計
	いつも行う	時々行う	
男性	46.3	53.7	100.0 (95人)
女性	53.5	46.5	100.0 (161人)
全体	50.8	49.2	100.0 (256人)

$$\chi^2(1)=1.2141 \quad p=0.2705$$

表18 性別(q02)と水を出しっぱなしにしない行動(q09_m)のクロス集計表 単位%(人)

性別	水を出しっぱなしにしない行動		計
	いつも行う	時々行う	
男性	48.9	51.1	100.0 (95人)
女性	63.3	36.7	100.0 (161人)
全体	57.9	42.1	100.0 (256人)

$$\chi^2(1)=4.9835 \quad p=0.0256$$

節約行動の男女差はほとんど見る事が出来なかったが、「水を出しっぱなしにしない行動」と「使わない家電製品の主電源を切る行動」は、女性の方が高い結果となった。

次に、「節約行動と使わない家電の主電源を切る行動」と、節水行動で弱い関係が認められた「節約行動と水を出しっぱなしにしない行動」性別による三重クロス集計の結果が以下の通りである。

表19 男性(q02)の節約行動と使わない家電製品の主電源を切る行動(q09_l)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	使わない家電製品の主電源を切る行動		計
	いつも行う	時々行う	
積極的	53.5	46.5	100.0 (43人)
消極的	40.4	59.6	100.0 (52人)
全体	46.3	53.7	100.0 (95人)

$\chi^2(1)=1.6254$ p=0.2023

表20 女性(q02)の節約行動と使わない家電製品の主電源を切る行動(q09_l)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	使わない家電製品の主電源を切る行動		計
	いつも行う	時々行う	
積極的	60.0	40.0	100.0 (75人)
消極的	47.6	52.4	100.0 (84人)
全体	53.5	46.5	100.0 (159人)

$\chi^2(1)=2.4412$ p=0.1182

表21 男性(q02)の節約行動と水を出しっぱなしにしない行動(q09_m)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	水を出しっぱなしにしない行動		計
	いつも行う	時々行う	
積極的	58.1	41.9	100.0 (43人)
消極的	41.2	58.8	100.0 (51人)
全体	48.9	51.1	100.0 (94人)

$\chi^2(1)=2.6864$ p=0.1012

表22 女性(q02)の節約行動と水を出しっぱなしにしない行動(q09_m)のクロス集計表 単位%(人)

節約行動	水を出しっぱなしにしない行動		計
	いつも行う	時々行う	
積極的	70.7	29.3	100.0 (75人)
消極的	56.6	43.4	100.0 (83人)
全体	63.3	36.7	100.0 (158人)

$\chi^2(1)=3.3428$ p=0.0675

男女別の節約行動と使わない家電製品の主電源を切る行動の関係性は、女性の方が実行度が高い結果となった。また、男性は家電製品の主電源を切る行動を「あまり行わない」と答えた人は、節約行動の実行度の差が大きい結果になった。

男女別にみた節約行動と水を出しっぱなしにしない行動については、女性の方が「いつも行う」と答えた人が多い結果となった。

女性の方が節電・節水行動を行っているという結果が出たが、節約行動の実行度に男女差は見られなかったことから、女性は節電・節水行動を行っているが、節約行動としては行われていないと考えられる。

4. 仮説②（余暇時間が長い人程、手間のかかる環境対策を実行している）の検証

4. 1 仮説検証に用いた変数の分析

（1）余暇時間（独立変数）

余暇時間の長さについて、q26「あなたの余暇時間（仕事、学校、家事、睡眠以外に自由に使える時間）は何時間くらいありますか」という質問に対する回答結果を利用する。その際、時間は5時間ずつに分けて利用した。その結果は次の通りである。

表23 平日の余暇時間(q26_a)

	度数(人)	相対度数(%)
5時間未満	198	78.9
5時間以上10時	53	21.1
計	251	100.0

欠損値=7

表24 休日の余暇時間(q26_b)

	度数(人)	相対度数(%)
5時間未満	82	33.6
5時間以上10時	106	43.4
10時間以上	56	23.0
計	251	100.0

欠損値=7

平日の余暇時間は「5時間未満」が198人(78.9%)、休日の余暇時間は「5時間以上10時間未満」が106人(43.4%)が多いという結果になった。

(2)手間のかかる環境対策(従属変数)

手間のかかる環境対策は、実行に時間や手間のかかる行動である q9_e「不要品をリサイクルする」、q9_f「直せば使える物を修理・補修して使う」、q9_i「水筒(マイボトル)を持参する」、q9_p「公共交通機関の利用」q10_h「使い捨て商品(紙コップ、紙皿、カメラなど)ではない物の購入する」、q12sq01「エコバックを持って買い物に行く」の6つの項目を利用した。

分析するにあたって、この6つの項目を逆転、統合し、中央値の18で高低に分けて、「手間のかかる環境対策」という新しい変数を作った。中央値よりも高い人を、手間のかかる環境対策を「している」とし、中央値よりも低い人を、手間のかかる環境対策を「していない」とした。

表25手間のかかる環境対策実行度(q09_e、09_f、q09_j、q09_p、q10_h、q12sq01)

実行度	度数(人)	相対度数(%)
高い	106	41.1
低い	152	58.9
計	258	100.0

手間のかかる環境対策実行度は、106人(41.1%)が「高い」という結果になり、「低い」の152人(58.9%)が上回る結果になった。

4. 2 仮説②の検証

表26 平日の余暇時間(q26_a)と手間のかかる環境対策実行度のクロス集 単位%(人)

平日の余暇時間	手間のかかる環境対策実行度		計
	高い	低い	
5時間未満	40.9	59.1	100.0 (198人)
5時間以上10時間未満	35.9	64.2	100.0 (53人)
全体	39.8	60.2	100.0 (251人)

$\chi^2(1)=0.4466$ p=0.5039

表27 休日の余暇時間(q26_b)と手間のかかる環境対策実行度のクロス集 単位%(人)

休日の余暇時間	手間のかかる環境対策実行度		計
	高い	低い	
5時間未満	43.9	56.1	100.0 (82人)
5時間以上10時間未満	37.7	62.3	100.0 (106人)
10時間以上	39.3	60.1	100.0 (56人)
全体	40.2	59.8	100.0 (244人)

$\chi^2(2)=0.7549$ p=0.6856

余暇時間を平日は「5時間未満」と「5時間以上10時間未満」の2段階で、休日は「5時間未満」と「5時間以上10時間未満」、「10時間以上」の3段階にそれぞれ分けて、手間のかかる環境対策の実行度とクロス集計した結果、余暇時間の長さや手間のかかる環境対策の実行度の関連性はみとめられなかった。

5. 仮説③（居住期間が長い人ほど、市で行われている環境対策を認知している）の検証

5. 1 仮説検証に用いた変数の分析

(1) 居住期間（独立変数）

居住期間について調べるため、q31「あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい住んでいますか」という質問に対する回答結果を利用する。

表28 現在の地域に住んでいる期間(q31)

	度数(人)	相対度数(%)
1年未満	15	5.8
1年以上3年未満	36	14.0
3年以上5年未満	18	7.0
5年以上10年未満	29	11.3
10年以上20年未満	56	21.8
20年以上	103	40.1
計	257	100.0

欠損値=1

「20年以上」が103人(40.1%)と最も多く、次に「10年以上20年未満」が56人(21.8%)、「1年以上3年未満」が36人(14.0%)、「5年以上10年未満」が29人(11.3%)、「3年以上5年未満」が18人(7.0%)と続き、「1年未満」が15人(5.8%)と最も低い結果となった。

(2) 市で行われている環境対策の認知度（従属変数）

市で行われている環境対策の認知度を調べるため、q16「あなたは、千葉市で行われている『減らそう！ 焼却ゴミ 1/3 削減キャンペーン』を知っていますか」と、q17「あなたは、平成 19 年 11 月 15 日(木)～平成 20 年 1 月 15 日(火)の 2 ヶ月間、千葉市の一部店舗にて行われた『マイバックキャンペーン』を知っていましたか」という 2 つの項目を利用した。

表29 「減らそう！ 焼却ごみ1/3削減キャンペーン」の認知度(q16)

	度数(人)	相対度数(%)
内容を理解している	32	12.5
聞いたことがある	105	40.9
知らない	120	46.7
計	257	100.0

欠損値=1

表30 「マイバックキャンペーン」の認知度(q17)

	度数(人)	相対度数(%)
内容を理解している	31	12.1
聞いたことがある	57	22.3
知らない	169	65.6
計	256	100.0

欠損値=2

「減らそう！ 焼却ゴミ 1/3 削減キャンペーン」は「内容を理解している」と「聞いたことがある」を合わせると半数が、「マイバックキャンペーン」は「内容を理解している」と「聞いたことがある」を合わせると約 30%が知っているという結果になった。

5. 2 仮説③の分析

居住年数は 1 年以上 5 年未満、5 年以上 20 年未満、20 年以上の 3 段階に分けてそれぞれクロス集計した結果、各政策ともに居住年数に比例して「内容を理解している」と回答する割合が上昇し、居住年数が長い方が市で行われている環境対策を理解している傾向がややみられた。

表31 居住年数(q31)と「マイバックキャンペーン」の認知度(q17)のクロス集計表 単位%(人)

居住年数	マイバックキャンペーンの認知度			計
	内容を理解している	聞いたことがある	知らない	
1年以上5年未満	9.8	11.8	78.4	100.0 (51人)
5年以上20年未満	10.6	17.0	72.3	100.0 (47人)
20年以上	13.9	27.4	59.2	100.0 (157人)
全体	12.2	22.4	65.6	100.0 (255人)

$$\chi^2(4)=8.0287 \quad p=0.0905$$

表32 居住年数(q31)と「減らそう！焼却ごみ1/3削減キャンペーン」の認知度(q16)のクロス集計表 単位%(人)

居住年数	焼却ごみ1/3削減キャンペーンの認知度			計
	内容を理解している	聞いたことがある	知らない	
1年以上5年未満	9.8	37.3	52.9	100.0 (51人)
5年以上20年未満	4.3	31.9	63.8	100.0 (47人)
20年以上	15.8	44.9	52.1	100.0 (158人)
全体	12.5	41.0	46.5	100.0 (256人)

$$\chi^2(4)=11.2482 \quad p=0.0239$$

6. まとめ

今回の分析を行っての結果は以下の通りである。仮説①の節約行動の実行度と節電・節水などの節約にもなる環境対策については、一部関係が見られないものもあったが、普段節約行動を行っている人は、節電・節水を行っている人が多いという結果になった。男女別にみると、節電・節水行動は女性の方が実行度が高いが、節約行動には男女差はなかった。

仮説②は余暇時間の長さで手間のかかる環境対策の実行度には関連がみられなかった。

仮説③は仮説通り、居住年数に比例して市の政策の認知度が上がるという結果になった。

私は市の政策の実行度の低さは認知度の低さと手間がかかるため時間がないと実行できていないのでは、と考えていたが、手間と時間の長さの関係性はみられなかった。市の政策の認知度も上げることは必要だが、時間があればやるわけではない。実行度を上げるには、本人のやろうと思える意識を持たせる必要が思う。そのやろうと思える理由付けの一つに、「エコ替えをすれば金銭的に得」、「レジ袋を断れば割引してくれる」という、自分にも得があるというアピールなのではないだろうか。市も、もっと個人に対して得があることをアピールできれば、実行度が上がるのではないかと考える。

7. 参考 URL

千葉市ホームページ (<http://www.city.chiba.jp/index.html>) (2009年1月24日)

6章 環境に対するスタンスと環境対策の実行度

A62127 河野 恵

1. 調査テーマ

企業が積極的にごみのリサイクルに取り組んだり、製品を作る際の二酸化炭素を減らしたりするように、個人でも環境に対して一人一人が行うことのできる「環境対策」が近年注目されている。私は、このような「環境対策」の「認知」、「理解」、「実行」の関係性に興味を抱いている。

なぜ、これらに興味を抱いたかという、まず「認知」に関していえば、メディアによって環境対策や環境問題を取り上げられる機会が増えたからである。このようにメディアの報道に多く触れる人は、より多くの知識を得て環境対策を認知していくのではないだろうか。

次に、「理解」や「実行」に関していえば、環境対策を実行しようにも何をしたらよいのか分かっていない、という状態に私たちがなっているのではないかと考えた。つまり環境対策を行うためには、「認知し、理解した上で実行する」というように一直線上に繋がるものなのではないかと私は考えたのである。

しかし、現状を知っていくと、一方で「実行することで理解を深めていく」という流れになっているのではないかと感じた。そのことから、認知すら出来ていない場合もあるが、認知して実行していても、まだ理解するという領域には達していないのではないだろうかと考えた。

また、深刻化した環境問題に対する不安感、ライフスタイルの変化で環境が改善すると考える度合い、未来の環境を重視する未来志向の度合い、環境対策の実行にどのような差が表れるのか、を考えていきたい。

2. 仮説

仮説1. 環境対策の認知度が高いほうが、環境対策を実行している。

仮説2. 環境対策の実行度が高いほうが、環境対策を理解していない。

仮説3. 環境のことで将来への不安度が高いほうが、環境対策を実行している。

仮説4. ライフスタイルの変化で環境が改善すると考えるほど、未来の環境を優先する。

3. 仮説分析に用いた項目・変数

3. 1 仮説1に用いた項目

(1) 新しく作成した変数「認知度」

環境対策の認知度を仮説分析に用いるために、新しく変数を作成した。

用いた項目は Q5「聞いたことのある環境対策」で「マイ箸」「キャンドルナイト」「エコ替え」「カーボンオフセット」「うちエコ!」「ちばルール」「ちばし環境宣言」のそれぞれに対して「聞いたことがある」という選択肢を合成して新たな変数「認知度」を作成し、スコア化して0～2点を「認知度が低い」、3～7点を「認知度が高い」という2群にわけた。その分布は表1の通りである。

表1 環境対策の認知度(Q5)

	度数(人)	相対度数(%)
高い (3～7)	147	57.4
低い (0～2)	109	42.6
計	256	100.0

欠損値=2

(2) 新しく作成した変数「実行度」

環境対策の実行度を仮説分析に用いるために、新しく変数を作成した。

用いた項目は Q6_1～Q6_7「実行したことのある環境対策」で「マイ箸の携帯」「キャンドルナイトへの参加」「エコ替えの実行」「カーボンオフセット」「エコツアーへの参加」「オーガニックコットンでできた服の購入」「クールビズ」のそれぞれに対して「実行したことがある」に当てはまる選択肢を合成して新たな変数「実行度」を作成し、スコア化して0点を「実行度が低い」、1～5点を「実行度が高い」という2群にわけた。その分布は表2の通りである。

表2 環境対策の実行度(Q6)

	度数(人)	相対度数(%)
高い (1～5)	175	68.9
低い (0)	79	31.1
計	254	100.0

欠損値=4

3. 2 仮説2に用いた項目

(1) 環境対策の実行度の単純集計と新しく作成した変数「実行度」

環境対策の実行度については、仮説2で用いたものと同じ変数を使用する。

(2) 新しく作成した変数「理解度」

環境対策の理解度を仮説分析に用いるために、新しく変数を作成した。

用いた項目は Q8_a～Q8_d「意味を理解している環境対策」で「クールビズ」「エコバッグ」「キャンドルナイト」のそれぞれの項目において「わからない」1点、「少しはわかっている」2点、「ある程度わかっている」3点、「わかっている」4点、とスコアを与え、合成して新たな変数「理解度」を作成し、中央値10で2群にわけ、「理解度が低い」(4～10点)、「理解度が高い」(11～16点)とした。その分布は表3の通りである。

表3 環境対策の理解度 (Q8)

	度数(人)	相対度数(%)
高い (11～16)	96	39.3
低い (4～10)	148	60.7
計	244	100.0

欠損値=14

3. 3 仮説3に用いた項目

(1) 環境対策の実行度の単純集計と新しく作成した変数「実行度」

環境対策の実行度については、仮説2で用いたものと同じ変数を使用する。

(2) 新しく作成した変数「不安度」

環境問題への不安度を仮説分析に用いるために、新しく変数を作成した。

用いた項目は Q4_a～Q4_e「環境問題に対する不安度」で「地球温暖化」「大気汚染」「食糧危機」「食品の安全」「ごみ問題」のそれぞれの項目において「不安ではない」1点、「あまり不安ではない」2点、「やや不安である」3点、「不安である」4点、とスコアを与え、合成して新たな変数「不安度」を作成し、スコア化して「不安度が低い」(5～16点)、「不安度が高い」(17～20点)の2群にわけた。その分布は表4の通りである。

表4 環境問題の不安度 (Q4)

	度数(人)	相対度数(%)
高い (17～20)	161	63.4
低い (5～16)	93	36.6
計	254	100.0

欠損値=4

3. 4 仮説4に用いた項目

まず、仮説4を検証するにあたって、全ての項目の中から環境問題に対する取り組み方に関する項目を4つ抜き出した。その項目とは、Q24_d, Q24_f, Q25_Ⅱ, Q25_Ⅲであり、その分布は表5と表6の通りである。

表5 環境問題に対する取り組み方(Q24_d Q24_f)

		(単位%)				
		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	計
Q24_d	現在の生活の豊かさや 便利さを失いたくない	22.9	44.2	23.3	9.6	100.0 (249人)
Q24_f	環境に配慮した行動は 面倒だ	27.6	48.0	20.7	3.7	100.0 (246人)

表6 環境問題に対する姿勢(Q25_Ⅱ Q25_Ⅲ)

		(単位%)				
		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	計
Q25_Ⅱ	ライフスタイルの変化は 環境改善に繋がる	34.5	31.3	16.3	17.9	100.0 (252人)
Q25_Ⅲ	未来の子供達に 良い環境を残すべきだ	62.2	25.6	8.7	3.5	100.0 (254人)

(1) 新しく作成した変数「ライフスタイルの変化」

4つの項目の中から、ライフスタイルの変化によって環境が改善するという姿勢にあたると考えた Q24_f と Q25_II を用いて、Q24_f では「そう思う」1点、「ややそう思う」2点、「あまりそう思わない」3点、「そう思わない」4点とスコアを与え、Q25_II では逆転させて4～1点とスコアを与え、合成して新たな変数「ライフスタイルの変化」を作成し、中央値6で2群に分け、「ライフスタイルの変化に消極的」(2～5点)、「ライフスタイルの変化に積極的」(6～8点)とした。その分布は表7の通りである。

表7 ライフスタイルの変化に対する姿勢

	度数 (人)	相対度数 (%)
積極的 (6～8)	147	60.5
消極的 (2～5)	96	39.5
全体	243	100.0

欠損値=15

(2) 新しく作成した変数「未来志向」

4つの項目の中から、未来に良い環境を残すべきだという姿勢にあたると考えた Q24_d と Q25_III を用いて、Q24_d では「そう思う」1点、「ややそう思う」2点、「あまりそう思わない」3点、「そう思わない」4点とスコアを与え、Q25_III では逆転させて4～1点のスコアを与え、合成して新たな変数「未来志向」を作成し、中央値6で2群に分け、「未来志向が低い」(2～5点)、「未来志向が高い」(6～8点)とした。その分布は表8の通りである。

表8 未来志向の度合い

	度数 (人)	相対度数 (%)
高い (6～8)	133	53.6
低い (2～5)	115	46.4
全体	248	100.0

欠損値=13

4. 仮説の分析

4. 1 仮説検証

(1) 仮説1：環境対策の認知度と実行度

環境対策の認知度と環境対策の実行度の関係を検証する。この2つに関する項目をクロス集計し χ^2 検定を行った。するとこの2つの項目間に関係性が認められた。

結果としては環境対策の認知度が高いほうが、より環境対策を実行しているというもので、仮説1は支持されたといえる。

表9 環境対策の認知度と環境対策の実行度 (単位%)

認知度	実行度		計
	高い	低い	
高い	81.4	18.6	100.0 (145人)
低い	52.3	47.7	100.0 (109人)
全体	68.9	31.1	100.0 (254人)

$$\chi^2(1)=24.57 \quad p<.0001$$

(2) 仮説2：環境対策の理解度と実行度

環境対策の理解度と実行度の関係を検証する。この2つに関する項目をクロス集計し、 χ^2 検定を行った。するとこの2つの項目間に仮説とは逆の関係性が認められた。

結果としては、環境対策の実行度が高いほうが低いほうに比べれば、環境対策を理解しているというものであった。ゆえに、仮説2は支持されなかったといえる。

また、理解度と実行度は相関関係にあり、環境対策の理解度が高いほうが低いほうに比べて、より実行度が高いといえる。

表10 環境対策の実行度と環境対策の理解度 (単位%)

実行度	理解度		計	
	高い	低い		
高い	44.9	55.2	100.0	(165人)
低い	26.0	74.0	100.0	(77人)
全体	38.8	61.2	100.0	(242人)

$$\chi^2(1)=7.87 \quad p=0.0050$$

表11 環境対策の理解度と環境対策の実行度 (単位%)

理解度	実行度		計	
	高い	低い		
高い	78.7	21.3	100.0	(94人)
低い	61.5	38.5	100.0	(148人)
全体	68.2	31.8	100.0	(242人)

$$\chi^2(1)=7.87 \quad p=0.0050$$

(3) 仮説3：環境問題への不安度と環境対策の実行度

環境問題への不安度と環境対策への実行度の関係を検証する。この2つに関する項目をクロス集計し χ^2 検定を行った。するとこの2つの項目間にやや関係性が認められた。

結果としては環境問題への不安度が高いほうが、環境対策を実行しているというもので、仮説4は支持されたといえる。

また、実行度と不安度は相関関係にあり、環境対策の実行度が高いほうが低いほうに比べて、より不安度が高い傾向にある。

表12 環境問題への不安度と環境対策の実行度 (単位%)

不安度	実行度		計	
	高い	低い		
高い	75.0	25.0	100.0	(160人)
低い	57.6	42.4	100.0	(92人)
全体	68.7	31.4	100.0	(252人)

$$\chi^2(1)=8.21 \quad p=0.0042$$

表13 環境対策の実行度と環境問題への不安度 (単位%)

実行度	不安度		計	
	高い	低い		
高い	69.4	30.6	100.0	(173人)
低い	50.6	49.4	100.0	(79人)
全体	63.5	36.5	100.0	(252人)

$$\chi^2(1)=8.21 \quad p=0.0042$$

(4) 仮説4：ライフスタイルの変化に対する姿勢と未来志向

環境問題への取り組み方と現在と未来の重視度の関係を検証する。この2つに関する項目をクロス集計し χ^2 検定を行った。するとこの2つの項目間に関係性が認められた。

結果としては、個人のライフスタイルを変化させることに積極的であるほうが、現在より未来を重視しているというもので、仮説4は支持されたといえる。

表14 ライフスタイルの変化に対する姿勢と未来志向 (単位%)

ライフスタイルの変化	未来志向		計	
	高い	低い		
積極的	66.0	34.0	100.0	(147人)
消極的	35.8	64.2	100.0	(95人)
全体	54.1	45.9	100.0	(242人)

$$\chi^2(1)=21.19 \quad p<.0001$$

4. 2 仮説同士の関連性

(1) ライフスタイルの変化・未来志向と環境対策の実行度

仮説4で用いた「ライフスタイルの変化」と「未来志向」を使って、どちらがより環境対策の実行度に影響を与えているのかを見てみた。すると、「ライフスタイルの変化」との間にのみ関係性が認められた。

この結果から、個人のライフスタイルを変化させることに積極的であるほうが、環境対策を実行する傾向がある。

表15 ライフスタイルの変化に対する姿勢と環境対策の実行度 (単位%)

ライフスタイルの変化	実行度		計	
	高い	低い		
積極的	74.5	25.5	100.0	(145人)
消極的	61.1	39.0	100.0	(95人)
全体	69.2	30.8	100.0	(240人)

$$\chi^2(1)=4.85 \quad p=0.0276$$

表16 未来志向と環境対策の実行度 (単位%)

未来志向	実行度		計	
	高い	低い		
積極的	72.5	27.5	100.0	(131人)
消極的	64.9	35.1	100.0	(114人)
全体	69.0	31.0	100.0	(245人)

$$\chi^2(1)=1.65 \quad p=0.1992$$

(2) ライフスタイルの変化・未来志向と環境問題への不安度

仮説4で用いた「ライフスタイルの変化」と「未来志向」を使って、どちらがより環境への不安度に影響を与えているのかを見てみた。すると、「未来志向」との間にのみ弱い関係性が認められた。

この結果から、未来を重視する度合いが高いほうが、環境問題に対する不安が高い傾向がある。

表17 ライフスタイルの変化に対する姿勢と環境問題への不安度 (単位%)

ライフスタイルの変化	不安度		計	
	高い	低い		
積極的	67.8	32.2	100.0	(146人)
消極的	56.3	43.8	100.0	(96人)
全体	63.2	36.8	100.0	(242人)

$$\chi^2(1)=3.33 \quad p=0.0681$$

表18 未来志向と環境問題への不安度 (単位%)

未来志向	不安度		計	
	高い	低い		
積極的	69.7	30.3	100.0	(132人)
消極的	56.1	43.9	100.0	(114人)
全体	63.4	36.6	100.0	(246人)

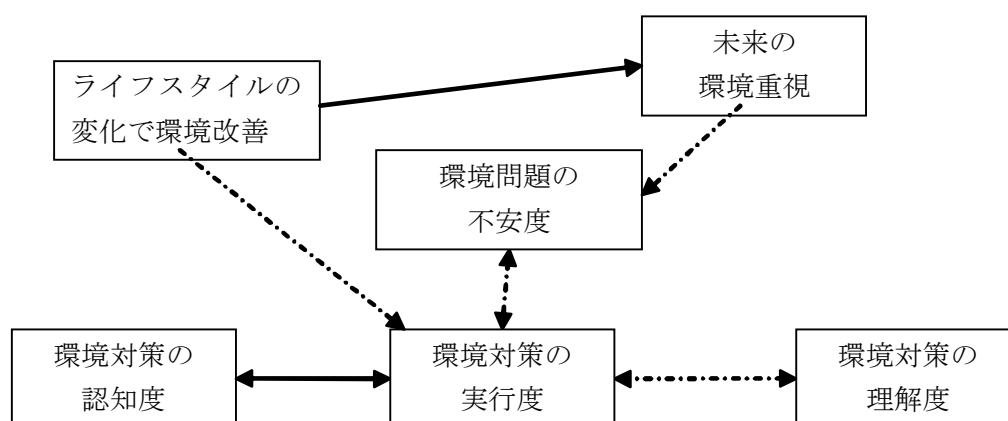
$$\chi^2(1)=4.85 \quad p=0.0277$$

4. 3 項目同士の関連性

(1) 環境対策の実行度との関連性

仮説1～仮説4における、項目同士の関連性を下図に示した。関係性の有意差については、2種類の矢印で表した。

- 有意な関係性が認められた。
- 傾向がみられた



5. 考察

私は初めに、環境対策を「認知しても実行していない」のではないか、そもそも「認知すらできていないのかもしれない」という疑問を抱いた。その後で行った聴き取り調査から、環境対策というのは「認知して理解し実行する」のではないか、それから「理解はしていなくとも実行している」のではないか、そして将来の環境問題の「不安度が高ければ環境対策を実行する」のではないか、と考えが次々と変化していった。

こうして様々な仮説を立ててきたが、相関関係にあってどちらが原因になっているかわからなかったり、認知度に関しては有意な関係性が無かったりと、実行に影響を与えてきたのか実行したから認知した、不安になった、のかが明確にならなかった。ここから考えられるのは、環境対策を認知することは、すでに“当たり前”の領域に達しているのではないかということだ。認知しているから、ということではなく“環境対策は知っていて当たり前”、つまり認知は既にクリアされた項目なのではないか、と私は考えた。

そこで、仮説同士の関連性を見ていくと、最終的には「環境問題・対策への姿勢が実行度・不安度に関係してくる」のではないかという仮説にいたった。ここでいう「姿勢」は「未来志向の高低」と「ライフスタイルの変化に積極的か消極的か」の2項目である。

結果として、「個人のライフスタイルの変化」と「環境対策の実行度の高低」は有意に関係していること、また「未来志向」と「環境問題に対する不安度の高低」が有意に関係していることが、興味深いと感じた。つまり、個人のライフスタイルの変化に積極的である人は、環境対策を実行するし、現在より未来を特に重視する人は今の環境問題が進行することに不安を感じていると言えるのではないだろうか。

特に今回、不安度に影響を与えた「未来志向」には、“子供”というキーワードが深く結びついていると考えられる。今回の質問から導かれた「未来志向が高い」というのは「子供のために何かしたいと考えている」と言い換えることができるように私は思う。したがって、環境対策を実行するには未来志向が必要であり、未来志向には子供と言うキーワードが不可欠であるので、環境対策を実行するためには子供の存在をアピールしていくことが、重要なポイントとなってくるのではないかと推測できる。

すると、千葉市の環境局で行った聴き取り調査の中であげられた、小学生への環境学習を進めているという話は有効であることが裏付けられた。しかし、これを推し進めていけば万人に環境対策が浸透するかというと、そうではない。この環境学習だけでは、一部の人間だけにしか環境対策が行き渡らず、残りの人々は置き去りになってしまう。大学生などの若者、環境対策に消極的・無関心な人々、一人暮らしの人々、子供のいない家庭に対する方向性が定まらないままでは、課題は課題のままでずっと解決されないのではないだろうか。

今後は若者や一人暮らしの人々にターゲットを絞って、対策を考えていくべきだと思う。全ての人に共通する対策を考えるのではなくて、それぞれ世代やライフスタイルに見合った対策があるのだと思う。全ての人に関係する環境問題だからこそ、十人いれば十通りの環境対策を考えていく必要があるのではないかと考えた。

7章 周囲の人の影響による個人のエコ行動

A62055 渋谷 卓磨

1. 問題意識と仮説

1. 1 問題意識

私たちが普段何気なく行っていることにも、何かきっかけがあるのではないか。その時は別段気にすることもないのだが、後々考えてみたり、指摘されたりすると、意外と多くの影響を受けていることがわかるものである。私は、特に回りの人々から受ける影響というものに着目した。

身の回りの人、と考ただけでも家族や友人、また学校に通っていたり、会社に勤めていたりすれば、学校の先生であったり、職場の同僚といった具合にその範囲は増えていく。個人を取り囲む環境には数多くの人が生活しているのである。個人が回りに与える影響も当然あるだろうが、今回はその個人が回りから受ける影響を、現在、グローバルな問題にもなっている環境問題に対する行動、すなわち個人のエコ行動について探ることとする。

そして、回りから受けた影響の結果の一つとして、回りの人と同じ行動をするようになると私は考える。なぜなら、人が何かを始めるとき、模倣するということが一番始めやすいと考えられるからである。特に家庭は人が子ども時代を送るのに重要な位置づけとなると考え、家庭でのしつけは、後に習慣化されると考えられるのである。

1. 2 仮説

- I 「現在、自分の身の回りにエコ行動をしている人がいるという人ほど、自分もその人と同じ種類のエコ行動を行う」
- II 「中学生時代に家庭でエコ行動に関するしつけを受けた人は、現在それに類するエコ行動を行う」

2. 調査結果

表1 エコ行動の状況

(単位%)

Q9	エコ行動の頻度	いつも 行う	ときどき 行う	あまり 行わない	まったく 行わない	計
Q9_a	資源ごみ分別	95.3	3.1	1.2	0.4	100.0 (256人)
Q9_b	古紙集団回収利用	77.0	9.0	7.4	6.6	100.0 (256人)
Q9_c	トレー、紙パック回収ボックス利用	32.0	12.3	20.6	35.2	100.0 (253人)
Q9_d	乾電池回収ボックス利用	43.8	17.5	15.5	23.1	100.0 (251人)
Q9_e	不用品リサイクル	16.5	39.8	24.8	18.9	100.0 (254人)
Q9_f	修理・補修して使用	29.8	49.0	14.9	6.3	100.0 (255人)
Q9_g	紙の裏面をメモ用紙として再利用	40.6	44.1	11.3	3.9	100.0 (256人)
Q9_h	過剰包装を断る	27.2	46.1	17.3	9.5	100.0 (254人)
Q9_i	水筒を持参する	30.0	26.9	15.0	28.1	100.0 (253人)
Q9_j	電気をこまめに消す	59.4	32.0	7.4	1.2	100.0 (256人)
Q9_k	冷暖房温度を控えめに設定	57.3	33.7	6.7	2.4	100.0 (255人)
Q9_l	電気未使用時に主電源を切る	42.6	25.8	23.4	8.2	100.0 (256人)
Q9_m	水を出しっぱなしにしない	56.7	31.9	9.8	1.6	100.0 (254人)
Q9_n	必要のない時シャワーの水を止める	64.8	17.6	12.5	5.1	100.0 (256人)
Q9_o	洗濯に風呂の残り湯を使用	34.9	10.6	18.4	36.1	100.0 (255人)
Q9_p	外出には徒歩や公共交通機関利用	37.1	37.1	18.0	7.8	100.0 (256人)

2. 1 対象者本人のエコ行動の状況

対象者本人のエコ行動の状況について質問した。「いつも行う」の欄を見ると、「Q9_a 資源ごみ分別」が 95.3%で最も多く、「Q9_b 古紙集団回収」「Q9_j 電気をこまめに消す」「Q9_k 冷暖房温度を控えめに設定」「Q9_m 水を出しっぱなしにしない」「Q9_n 必要のない時シャワーの水を止める」も半数以上の人が行っている。しかし、「Q9_e 不要品リサイクル」は 16.5%、「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」「Q9_f 修理・補修して使用」「Q9_h 過剰包装を断る」「Q9_i 水筒を持参する」「Q9_o 洗濯に風呂の残り湯を使用」は、ほぼ 3 割程度の人しか行っておらず、エコ行動の種類の違いで、実行度に大きな差が出るということがわかった。

2. 2 エコバッグの使用頻度

表2 エコバッグの使用頻度

Q12_1 エコバッグ使用頻度	度数（人）	相対度数（%）
いつも持っていく	91	47.4
ときどき持っていく	71	37.0
あまり持っていない	20	10.4
持って行ったことはない	10	5.2
計	192	100.0

欠損値=66

Q12のエコバッグもしくは買い物袋を持っていると答えた人192人にどの程度使用しているかをたずねた。「いつも持っていく」と「ときどき持っていく」を合わせると、全体の84.4%となり、エコバッグを持っている人の大半がエコバックを使用している。

2. 3 身の回りの人のエコ行動の状況

表3 身の回りの人のエコ行動状況

Q21 身の回りの人のエコ行動状況	度数（人）	相対度数（%）
Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的	179	70.8
Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる	70	27.7
Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する	150	59.3
Q21_4 親しい友人がフリーマーケットに参加	28	11.1
Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している	85	33.6
Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる	80	31.6
Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる	47	18.6
Q21_8 どれもあてはまらない	16	6.3

欠損値=5

対象者の身の回りの人のエコ行動の状況を複数回答で質問した。あてはまる人の多かった順にあげると、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」が 70.8%（179 人）、次いで「Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する」が 59.3%（150 人）となっていた。この2つの項目だけ過半数を超える人が「あてはまる」と回答しており、これら以外の項目に関しては、高くても 3 割ほどの人があてはまる程度である。

2. 4 中学生時代のしつけ

表4 中学生時代のしつけ

(単位%)

Q22	中学生時代のしつけ	よく 注意された	ときどき 注意された	注意されなかった	計
Q22_a	物を粗末にしない	53.8	32.7	13.6	100.0 (251人)
Q22_b	電気をつけっぱなしにしない	52.6	36.4	10.9	100.0 (247人)
Q22_c	水を出しっぱなしにしない	49.4	37.0	13.7	100.0 (249人)

対象者の中学生時代のしつけについて質問した。「よく注意された」の多かった順に並べると、「Q22_a 物を粗末にしない」(53.8%)、「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」(52.6%)、「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」(49.4%)となった。これら3項目について、若干の差はあるものの、対象者の約半数が「よく注意された」と回答している。

2. 5 中学生時代のエコ行動の状況

表5 中学生時代のエコ行動状況

(単位%)

Q23	中学生時代のエコ行動	いつも 行っていた	ときどき 行っていた	あまり行って いなかった	行って いなかった	計
Q23_a	修理・補修して使用	34.1	41.3	18.3	6.4	100.0 (252人)
Q23_b	電気をこまめに消す	43.5	31.6	20.2	4.7	100.0 (253人)
Q23_c	水を出しっぱなしにしない	53.5	28.4	13.0	5.1	100.0 (254人)

中学生時代のエコ行動について質問した。「いつも行っていた」の多い順にあげると、「Q23_c 水を出しっぱなしにしない」(53.5%)、「Q23_b 電気をこまめに消す」(43.5%)、「Q23_a 修理・補修して使用」(34.1%)であった。行動の種類によって若干の差が出るということがわかった。

3. 仮説の分析

3. 1 従属変数 (Q9 エコ行動の状況) の因子分析

仮説検証に際して、仮説Ⅰ、Ⅱそれぞれの従属変数となっている「Q9 エコ行動の状況」(表1)の因子分析を行った。なお、この因子分析は、各エコ行動には何らかの関連性があるものと考え、種類別に分類することを目的とするために行った。

表6 個人のエコ行動についての因子分析結果

変数名	質問文	factor1	factor2	factor3	factor4
		節電・節水行動 (ewact)	資源再利用 (recycle)	資源節約 (save)	積極的エコ行動 (activity)
Q9_n	必要のない時シャワーの水を止める	0.75 *	0.16	-0.06	-0.12
Q9_m	水を出しっぱなしにしない	0.72 *	0.03	-0.13	0.18
Q9_j	電気をこまめに消す	0.67 *	-0.10	0.18	0.04
Q9_k	冷暖房温度を控えめに設定	0.57 *	0.05	0.05	0.14
Q9_l	水筒を持参する	0.47 *	-0.05	0.41 *	-0.13
Q9_o	洗濯に風呂の残り湯を使用	0.46 *	0.09	-0.08	-0.05
Q9_d	乾電池回収ボックス利用	-0.06	0.75 *	0.06	0.03
Q9_c	トレー、紙パック回収ボックス利用	0.04	0.70 *	0.34 *	-0.14
Q9_b	古紙集団回収利用	0.17	0.68 *	-0.22	0.06
Q9_h	過剰包装を断る	-0.12	-0.09	0.70 *	0.16
Q12_l	エコバッグ使用	0.10	0.21	0.59 *	-0.10
Q9_g	紙の裏面をメモ用紙として使用	-0.06	0.13	0.47 *	0.32 *
Q9_l	電気未使用時に主電源を切る	0.34 *	-0.25	0.34 *	0.30
Q9_a	資源ごみ分別	0.05	0.34 *	-0.37 *	0.31 *
Q9_p	外出には徒歩や公共交通機関利用	0.03	-0.21	-0.05	0.76 *
Q9_f	修理・補修して使用	0.07	0.19	0.13	0.65 *
Q9_e	不用品リサイクル	-0.11	0.39 *	0.18	0.55 *

因子分析の結果、「節電・節水行動 (ewact)」、「資源再利用 (recycle)」、「資源節約 (save)」、「昔からの習慣 (custom)」の4つの因子に分かれた。大きく見ると、第二因子「資源再利用 (recycle)」と第三因子「資源節約 (save)」はごみ減量行動として見ることもできるのではないかと考えられる。また、第四因子「昔からの習慣(custom)」は、まだエコ行動という言葉が認知される前から、人々が日常的に行っていた環境に関する行動の集まりであると考えられる。

3. 2 因子分析の結果を用いた回帰分析を行うにあたって

仮説Ⅰ，Ⅱを検証するために、因子分析の結果を用いて回帰分析を行うこととする。なお、回帰分析を行う際に、項目ごとの回帰係数を参考にするため、「Q9 エコ行動の状況」に対し項目得点の逆転という処理を行った。これは、「Q9 エコ行動の状況」の回答が調査票上では、「いつも行う…1」、「ときどき行う…2」、「あまり行わない…3」、「まったく行わない…4」となっていたものを、「いつも行う…4」、「ときどき行う…3」、「あまり行わない…2」、「まったく行わない…1」と変更したことである。

3. 3 節電・節水行動に関する回帰分析

仮説Ⅰ，Ⅱの検証のため、「Q9 エコ行動の状況」(表6)の因子分析を行うことによって判明した因子「節電・節水行動 (ewact)」と、仮説Ⅰの独立変数「Q21 身の回りの人のエコ行動状況」(表3)、仮説Ⅱの独立変数「Q22 中学生時代のしつけ」(表4)を用いて回帰分析を行った。

表7 節電・節水行動(ewact)に関する回帰分析結果

独立変数	回帰係数	有意水準
Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的	0.73	0.0003 *
Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる	-0.14	0.432
Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する	0.05	0.778
Q21_4 親しい友人がフリーマーケットに参加	-0.11	0.680
Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している	0.37	0.024 *
Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる	-0.01	0.954
Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる	0.02	0.486
Q21_8 どれもあてはまらない	0.48	0.180
Q22_a 物を粗末にしない	-0.15	0.321
Q22_b 電気をつけっぱなしにしない	-0.12	0.635
Q22_c 水を出しっぱなしにしない	0.36	0.129
R ²		0.15

有意水準5%の見地から、「節電・節水行動」は「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」と、「Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している」の2つに関連性があることが認められた。「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」では、回帰係数の得点が0.73とプラスになっているため、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」にあてはまる人は、「節電・節水行動」を行う傾向にあるといえるだろう。また、「Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している」の回帰係数も、0.37とプラスになっているため、「Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している」にあてはまる人は、「節電・節水行動」を行う傾向にあるといえる結果がみられた。

しかしながら、「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」と、「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」は、「節電・節水行動」に対して、関連性は認められなかった。

3. 4 資源再利用に関する回帰分析

仮説Ⅰ，Ⅱの検証のため、「Q9 エコ行動の状況」（表6）の因子分析を行うことによって判明した因子「資源再利用（recycle）」と、仮説Ⅰの独立変数「Q21 身の回りの人のエコ行動状況」（表3）、仮説Ⅱの独立変数「Q22 中学生時代のしつけ」（表4）を用いて回帰分析を行った。

表8 資源再利用(recycle)に関する回帰分析結果

独立変数	回帰係数	有意水準
Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的	0.00	0.994
Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる	0.04	0.018 *
Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する	0.03	0.850
Q21_4 親しい友人がフリーマーケットに参加	-0.17	0.504
Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している	0.38	0.022 *
Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる	-0.06	0.757
Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる	0.12	0.634
Q21_8 どれもあてはまらない	0.08	0.814
Q22_a 物を粗末にしない	0.34	0.025 *
Q22_b 電気をつけっぱなしにしない	-0.36	0.155
Q22_c 水を出しっぱなしにしない	-0.02	0.949
R ²		0.13

有意水準5%の見地から、「資源再利用（recycle）」は、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」「Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している」「Q22_a 物を粗末にしない」の三項目に対し関連性が認められた。また、関連性のあった項目を回帰係数の高い順に並べると、「Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している」0.38、「Q22_a 物を粗末にしない」0.34、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」0.04となっており、回帰係数の高い順から「資源再利用」を行う傾向が高いということがいえる。

しかしながら、「Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる」や「Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する」は、「資源再利用」に対し関連性は認められなかった。近隣の人の行動と、職場の人の行動は「資源再利用」行動に関して関連がないようである。

3. 5 資源節約に関する回帰分析

仮説Ⅰ，Ⅱの検証のため、「Q9 エコ行動の状況」（表6）の因子分析を行うことによって判明した因子「資源節約（save）」と、仮説Ⅰの独立変数「Q21 身の回りの人のエコ行動状況」（表3）、仮説Ⅱの独立変数「Q22 中学生時代のしつけ」（表4）を用いて回帰分析を行った。

表9 資源節約(save)に関する回帰分析結果

独立変数	回帰係数	有意水準
Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的	0.14	0.4647
Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる	0.53	0.003 *
Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する	0.18	0.280
Q21_4 親しい友人がフリーマーケットに参加	-0.14	0.594
Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している	0.43	0.009 *
Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる	-0.03	0.895
Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる	-0.06	0.810
Q21_8 どれもあてはまらない	0.32	0.366
Q22_a 物を粗末にしない	-0.01	0.968
Q22_b 電気をつけっぱなしにしない	0.02	0.952
Q22_c 水を出しっぱなしにしない	-0.04	0.869
R ²		0.14

有意水準5%の見地から、「資源節約 (save)」は、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」と、「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」の二項目に対し関連性が認められた。また、回帰係数の高い順に並べると、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」0.53、「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」0.43 となり、回帰係数が高い項目にあてはまる人ほど、「資源節約」をしている傾向にあるということがいえるだろう。

しかし、「Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる」や、「Q22_a 物を粗末にしない」の二項目には関連性は認められなかった。

3. 6 昔からの習慣に関する回帰分析

仮説Ⅰ，Ⅱの検証のため、「Q9 エコ行動の状況」(表6)の因子分析を行うことによって判明した因子「積極的エコ行動 (activity)」と、仮説Ⅰの独立変数「Q21 身の回りの人のエコ行動状況」(表3)、仮説Ⅱの独立変数「Q22 中学生時代のしつけ」(表4)を用いて回帰分析を行った。

表10 昔からの習慣(custom)に関する回帰分析結果

独立変数	回帰係数	有意水準
Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的	0.68	0.0004 *
Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる	0.33	0.056
Q21_3 近隣で大半の人は資源ごみを分別する	0.16	0.318
Q21_4 親しい友人がフリーマーケットに参加	0.37	0.142
Q21_5 親しい友人がエコバックを使用している	0.21	0.176
Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる	0.28	0.173
Q21_7 私の職場でごみ減量に取り組んでいる	0.04	0.874
Q21_8 どれもあてはまらない	0.64	0.594
Q22_a 物を粗末にしない	-0.15	0.311
Q22_b 電気をつけっぱなしにしない	-0.001	0.995
Q22_c 水を出しっぱなしにしない	0.25	0.272
R ²		0.19

有意水準5%の見地から、「昔からの習慣 (custom)」は、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」に対しのみ関連性が認められた。また、回帰係数をみると、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」0.68 となっており、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」にあてはまる人は、「昔からの習慣」に関する行動を行う傾向にあるということがいえるだろう。

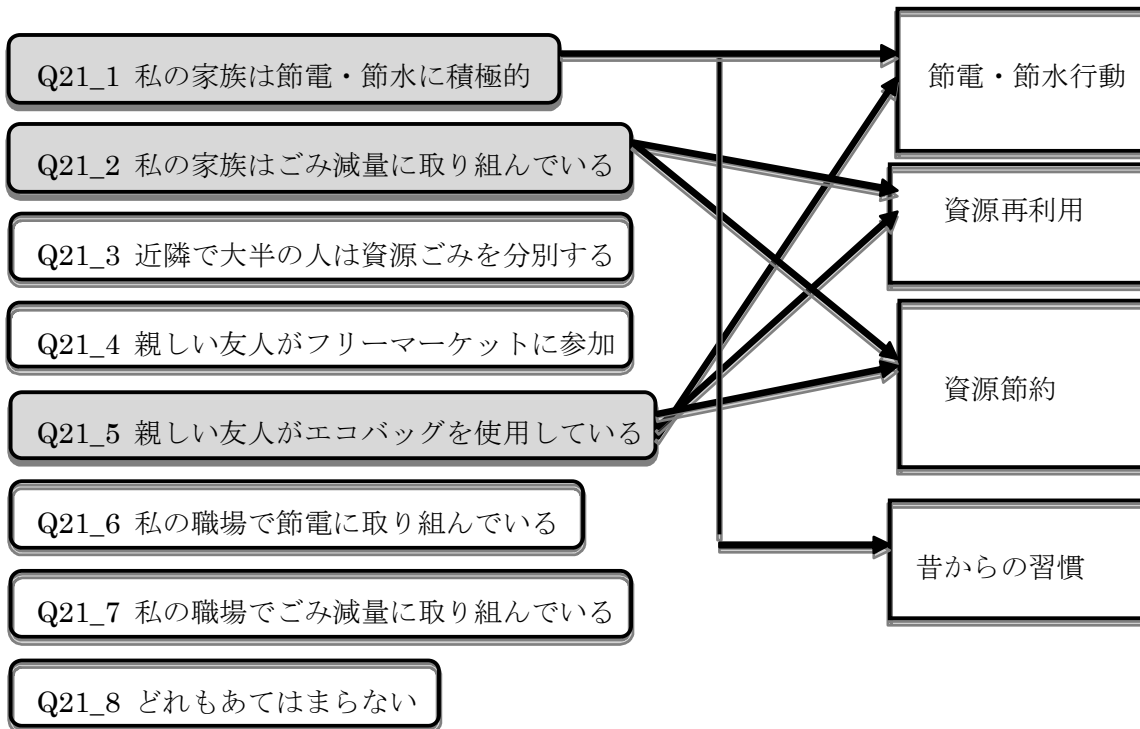
4. 回帰分析結果による仮説の考察

4. 1 仮説 I の検証

まず、仮説 I は、次のものであった。

「現在、自分の身の回りにエコ行動をしている人がいるという人ほど、自分もその人と同じ種類のエコ行動を行う」

この仮説に対しての回帰分析の結果を簡単な図に表してみると次のようになる（関連性があったもののみ矢印で表示）。



注) → …関連性があった

「身の回りの人の行動」の中で、関連性が認められたのは、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」、「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」の三項目だけであった。

ここで重要となってくるのが、身の回りの人と同じ種類のエコ行動を行っているかどうかということである。それを考慮すると、「Q21_1 私の家庭は節電・節水に積極的」と「節電・節水行動」の関連性、「Q21_2 私の家庭はごみ減量に取り組んでいる」と「資源再利用」、「資源節約」への関連性という2つが、まずあてはまるのではないだろうか。そして、「資源再利用」と「資源節約」は大別すると、ごみ減量行動のひとつであるといえるので、「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」の「資源再利用」、「資源節約」への関連性も、仮説 I にあてはまるものだと考える。

そして、先に行った回帰分析の結果では、関連性の認められた項目、ここでいう、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」、「Q21_2 私の家族はごみ減量に取り組んでいる」、「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」の3つは、それぞれ関連性のあったエコ行動項目を行う傾向にあるという結果が出ている。

したがって、仮説 I 「現在、自分の身の回りにエコ行動をしている人がいるという人ほど、自分もその人と同じ種類のエコ行動を行う」というのは、身の回りの人が家族だった場合と、身の回りの人が親しい友人の場合とで、エコ行動の種類がエコバッグの使用とい

った一部の場合においてのみ立証されるのである。

このように、一部のみ立証することが出来た仮説Ⅰだが、仮説検証の際の結果によって新たな事実についても考察を試みる。まず、「身の回りの人の行動」が違う種類のエコ行動に関係しているというものである。これは、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」が「昔からの習慣」に関連性があるということ、また「Q21_5 親しい友人がエコバッグを使用している」が「節電・節水行動」に関連性があるということである。また、回帰分析の結果より、それぞれに関連性のあるエコ行動項目を行う傾向にあるという結果が出ているのである。違う種類の行動に対して影響があるということは、項目の影響が非常に強いということが考えられる。例えば、「Q21_1 私の家族は節電・節水に積極的」などは、対象が「節電・節水行動」するように作用するだけでなく、他のエコ行動を行うようにする作用があるということも、考えられなくはないだろうか。このようにして、他の項目への関連性が出ていたのではないかと思われる。

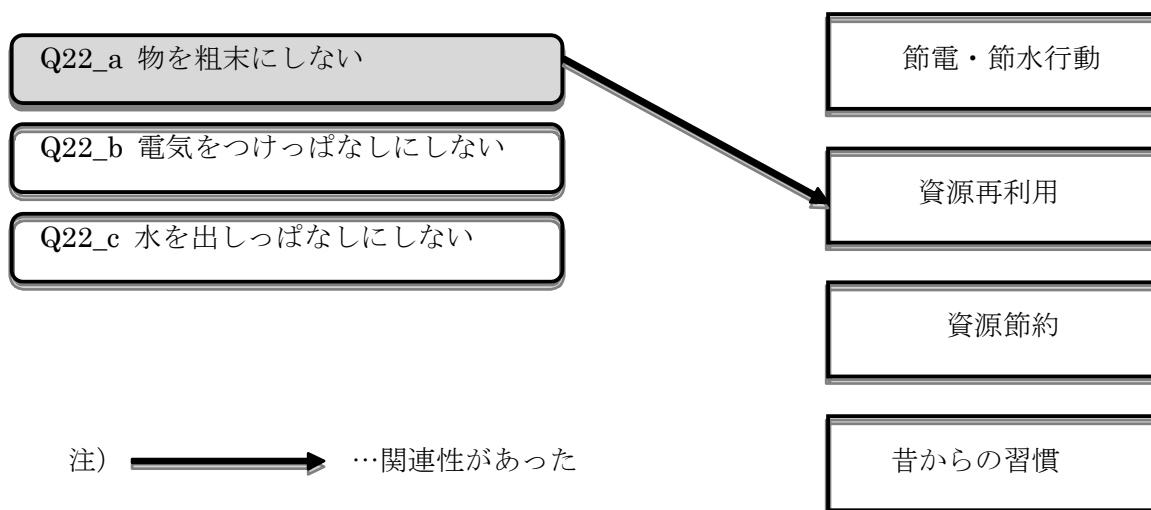
もう一つは、職場の影響というもの一つも認められなかった点である。「Q21_6 私の職場で節電に取り組んでいる」、「Q21_7 私の職場でゴミ減量に取り組んでいる」に対しては関連性が認められなかった。しかしながらこの問題は、調査対象者で就業している人の数が少なく、有意なデータが得られなかったということが起因していることも考えられる。

4. 2 仮説Ⅱの検証

まず、仮説Ⅱは、次のものであった。

「中学生時代に家庭でエコ行動に関するしつけを受けた人は、現在それに類するエコ行動を行う」

この仮説に対しての回帰分析結果を簡単な図に表してみると次のようになる（関連性があったものののみ矢印で表示）。



「中学生時代のしつけ」の中で、関連性の認められた項目は「Q22_a 物を粗末にしない」だけであった。そして、ここで注目すべきはしつけに類するエコ行動を行っているかどうかということである。この場合、「Q22_a 物を粗末にしない」としつけられることにより、

「ごみ減量行動」を行うようになるのではと、推測していた。「Q22_a 物を粗末にしない」に関連性の認められた「資源再利用」という因子は、先ほども述べたように「ごみ減量行動」の一環として捉えるものとするので、「資源再利用」は中学生時代のしつけ「Q22_a 物を粗末にしない」に類するエコ行動だと考えられるのである。

また、先に行った回帰分析の結果では、「Q22_a 物を粗末にしない」にあてはまる人は、「資源再利用」に関する行動を行う傾向にあるという結果が出ている。したがって、仮説Ⅱ「中学生時代に家庭でエコ行動に関するしつけを受けた人は、現在それに類するエコ行動を行う」は、「物を粗末にしない」としつけを受けた人が、「資源再利用」に関する行動をするといった一部の場合でのみ立証できる。

しかしながら、「資源節約」も「ごみ減量行動」の一環であるにもかかわらず、「Q22_a 物を粗末にしない」との関連性は認められなかった。また、「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」、「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」という2項目は、「節電・節水行動」に関連性があるのではと推測していたが、回帰分析の結果、関連性を認めることが出来なかった。

4. 3 仮説Ⅱの検証に際しての補足

「Q22 中学生時代のしつけ」と「Q23 中学生時代のエコ行動」のクロス集計

先に行った仮説Ⅱの検証で、回帰分析により関連性が認められたのは、「Q22_a 物を粗末にしない」と「資源再利用」との間だけであった。なぜ他の項目には関連性がみられなかったのだろうか。そこで私は、しつけを受けていた中学生時代ではどうだったのであるかを調べた。すなわち、しつけを受けていた当時はそれに類するエコ行動を行っていたかどうか、ということである。よって、「Q22 中学生時代のしつけ」と「Q23 中学生時代のエコ行動」のクロス集計を行った。

また、クロス集計にあたり、「Q23 中学生時代のエコ行動」の回答、「いつも行っていた」と「ときどき行っていた」を「行っていた」に、「あまり行っていなかった」と「行っていなかった」を「行っていない」というように、カテゴリの統合を行った。

(1) 「Q22_a 物を粗末にしない」と「Q23_a 直せば使える物を修理・補修して使用」

表11 家庭でのしつけ（物を粗末にしない）
と直せば使えるものを修理して使う (単位%)

物を粗末にしない	修理して使用		計
	行っていない	行っていた	
よく注意された	38.2	61.8	100.0 (34人)
ときどき注意された	32.1	67.9	100.0 (81人)
注意されなかった	17.2	82.8	100.0 (134人)
全体	24.9	75.1	100.0 (249人)

$$\chi^2_{(2)}=9.77 \quad p=0.076$$

有意水準5%の見地から、この2項目間に関連性は認められなかった。

(2) 「Q22_a 物を粗末にしない」と「Q23_b 電気をこまめに消す」

表12 家庭でのしつけ（物を粗末にしない）

物を粗末にしない	と電気をこまめに消す		(単位%)	
	電気をこまめに消す			
	行っていない	行っていた	計	
よく注意された	35.3	64.7	100.0	(34人)
ときどき注意された	39.5	60.5	100.0	(81人)
注意されなかった	13.4	86.6	100.0	(134人)
全体	24.9	75.1	100.0	(249人)

$$\chi^2_{(2)}=20.63 \quad p<.0001$$

有意水準1%の見地から、この2つの項目に関連性が認められた。「電気をこまめに消す」という行動を、注意されないでも行っている人が86.6%で、よく注意されていて行っていた人は64.7%であり、「物を粗末にしない」と注意を受けていない方が行う傾向が高いということがいえる。

(3) 「Q22_a 物を粗末にしない」と「Q23_c 水を出しっぱなしにしない」

表13 家庭でのしつけ（物を粗末にしない）

物を粗末にしない	と水を出しっぱなしにしない		(単位%)	
	水を出しっぱなしにしない			
	行っていない	行っていた	計	
よく注意された	29.4	70.6	100.0	(34人)
ときどき注意された	24.7	75.3	100.0	(81人)
注意されなかった	11.9	88.2	100.0	(135人)
全体	18.4	81.6	100.0	(250人)

$$\chi^2_{(2)}=8.74 \quad p=0.0127$$

有意水準5%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。「行っていた」についてみると、「よく注意された」70.6%、「ときどき注意された」75.3%、「注意されなかった」88.2%となっており、注意を受けていない人の方が「水を出しっぱなしにしない」行動を行っていた傾向にあったようである。

(4) 「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」と「Q23_a 直せば使える物を修理・補修して使用」

表14 家庭でのしつけ（電気をつけっぱなしにしない）

電気をつけっぱなしにしない	と直せば使えるものを修理して使う		(単位%)	
	修理して使用			
	行っていない	行っていた	計	
よく注意された	29.6	70.4	100.0	(27人)
ときどき注意された	38.6	61.4	100.0	(88人)
注意されなかった	15.4	84.6	100.0	(130人)
全体	25.3	74.7	100.0	(245人)

$$\chi^2_{(2)}=15.31 \quad p=0.0005$$

有意水準5%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。「行っていた」についてみると、「よく注意された」70.4%、「ときどき注意された」61.4%、「注意されなかった」84.6%となっており、注意を受けていない人の方が「修理して使用」を行っていた傾向にあったようである。

(5) 「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」と「Q23_b 電気をこまめに消す」

表15 家庭でのしつけ（電気をつけっぱなしにしない）
と電気をこまめに消す (単位%)

電気をつけっぱなしにしない	電気をこまめに消す		計	
	行っていない	行っていた		
よく注意された	44.4	55.6	100.0	(27人)
ときどき注意された	35.6	64.4	100.0	(90人)
注意されなかった	12.3	87.7	100.0	(130人)
全体	24.3	75.7	100.0	(247人)

$$\chi^2_{(2)}=22.32 \quad p<.0001$$

有意水準 1%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。注意されなくとも行っていた人の割合が 87.7%と高く、注意を受けない人の方が「電気をこまめに消す」という行動をとる傾向にあるといえるだろう。

(6) 「Q22_b 電気をつけっぱなしにしない」と「Q23_c 水を出しっぱなしにしない」

表16 家庭でのしつけ（電気をつけっぱなしにしない）
と水を出しっぱなしにしない (単位%)

電気をつけっぱなしにしない	水を出しっぱなしにしない		計	
	行っていない	行っていた		
よく注意された	22.2	77.8	100.0	(27人)
ときどき注意された	26.7	73.3	100.0	(90人)
注意されなかった	10.8	89.2	100.0	(130人)
全体	17.8	82.2	100.0	(247人)

$$\chi^2_{(2)}=9.58 \quad p=0.0083$$

有意水準 5%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。注意されなくとも行っていた人の割合が 89.2%と非常に高く、「電気をつけっぱなしにしない」と注意を受けない人の方が「水を出しっぱなしにしない」という行動をとる傾向にあるといえるだろう。

(7) 「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」と「Q23_a 直せば使える物を修理・補修して使用」

表17 家庭でのしつけ（水を出しっぱなしにしない）
と直せば使えるものを修理して使う (単位%)

水を出しっぱなしにしない	修理して使用		計	
	行っていない	行っていた		
よく注意された	29.4	70.6	100.0	(34人)
ときどき注意された	32.6	67.4	100.0	(92人)
注意されなかった	18.0	82.0	100.0	(122人)
全体	25.0	75.0	100.0	(248人)

$$\chi^2_{(2)}=6.35 \quad p=0.0418$$

有意水準 5%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。注意されなくとも行っていた人の割合が 82.0%と高く、「水を出しっぱなしにしない」と注意を受けない人の方が「修理して補修」を行っていた傾向にあるといえるだろう。

(8)「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」と「Q23_b 電気をこまめに消す」

表18 家庭でのしつけ（水を出しっぱなしにしない）
と電気をこまめに消す (単位%)

水を出しっぱなしにしない	電気をこまめに消す		計	
	行っていない	行っていた		
よく注意された	44.1	55.9	100.0	(34人)
ときどき注意された	37.0	63.0	100.0	(92人)
注意されなかった	10.6	89.4	100.0	(123人)
全体	24.9	75.1	100.0	(249人)

$$\chi^2(2)=27.38 \text{ } p<0.0001$$

有意水準 1%の見地から、この2項目の間に関連性が認められた。注意されなくとも行っていた人の割合が 89.4%と高く、「水を出しっぱなしにしない」と注意を受けない人の方が「電気をこまめに消す」という行動をとる傾向にあるといえるだろう。

(9)「Q22_c 水を出しっぱなしにしない」と「Q23_c 水を出しっぱなしにしない」

表19 家庭でのしつけ（水を出しっぱなしにしない）
と水を出しっぱなしにしない (単位%)

水を出しっぱなしにしない	水を出しっぱなしにしない		計	
	行っていない	行っていた		
よく注意された	32.4	67.7	100.0	(34人)
ときどき注意された	26.1	73.9	100.0	(92人)
注意されなかった	8.1	91.4	100.0	(123人)
全体	18.1	81.9	100.0	(249人)

$$\chi^2(2)=16.89 \text{ } p=0.0002$$

有意水準 5%の見地から、この2項目間に関連性が認められた。注意されなくても行っていたという人が、91.4%と非常に高く、「水を出しっぱなしにしない」と注意を受けない人の方が「水を出しっぱなしにしない」という行動をとるといえる傾向にあるといえるだろう。

以上の表 11～19「Q22 中学生時代のしつけ」と「Q23 中学生時代のエコ行動」のクロス集計を行った結果、総じていえることは、中学生時代しつけ（注意）を受けていなかった人ほど中学生時代にエコ行動を行う人が多かったということである。しつけを受けていた人ほど当時にエコ行動をしていたのではないかと推測していたのだが、結果はその逆であった。そもそも、中学生当時に、現代におけるエコ行動に類似する行動を行っていた人は、その行動に対する注意を受けることなど、ほとんどなかったであろう。しつけとエコ行動に関する私の認識が間違っていたという結果が出たのである。以上のことから、調査票における質問設計の段階で、私の認識不足により質問の設計が不十分であったと考えられる。このようなことが原因で先に述べた問題が発生しているのであろう。

5. 考察

身の回りの人が与える、個人のエコ行動への影響について仮説を立て、分析を進めてきたが、身の回りの中でも限られた人にのみ影響を受けるということがわかった。中でも、家族の影響というものはとても大きく、仮説Ⅰの「現在、自分の身の回りにエコ行動をしている人がいるという人ほど、自分もその人と同じ種類のエコ行動を行う」に関してい

ば、自分の身の回りの人が家族であった場合に、かつ一部の状況下でのみ立証できるのである。しかし、仮説とは別に、身の回りの人の行動が違った種類のエコ行動に影響を与え、という結果が出てきた。個人の行動というものは、意外なものに影響を受け、一部の状況下でのみ影響が見受けられ、行動によって影響が異なるなど、複雑なものである。

そして、仮説Ⅱの家庭のしつけという場合も、限られた状況下でのみ立証することができる結果となり、仮説Ⅰ、Ⅱともに、仮説がそのまま立証できるといったことではなかった。そして、しつけ（注意）を受けていたから、現在のエコ行動に類する行動をその当時行っていたのではなく、しつけ（注意）を受けていなかった者の方が、当時のエコ行動を行っていたのである。仮説のように、しつけを受けていた者ほど当時のエコ行動を行う傾向にあったという結果は得られなかった。これらは私の認識不足による調査設計段階でのミスということが考えられる。しかしながら、予想に反する結果が出たということは非常に有意なことであり、新たな考えの足がかりになるものだと考える。

いつでも人は、様々なものに影響を受けている。そして、そのアウトプットともいえるのが行動という訳である。この場合、アウトプットを「エコ行動」、インプットを「身の回りの人の行動」と、「中学生時代のしつけ」というものに絞って考えてきた、一見単純なインとアウトの構造に思えるが、すんなりとした結果が出てくるものではないのだ。これは、人間がより複雑であるということを示唆すると同時に、多くの要因が混在する環境の中で生活は形成されていくのだ。

6. 参考文献

- 千葉市・淑徳大学，2008『平成 19 年度千葉市・大学等共同事業報告書　ごみ減量を促進する PR 戦略等に関する研究』
- 淑徳大学総合福祉学部社会学科，2008『平成 19 年度フィールドワーク調査報告書　第 5 号』淑徳大学総合福祉学部社会学科
- 広瀬立成，2007『物理学者、ゴミと闘う』講談社現代新書

8章 ごみ減量行動に影響を及ぼしている要因

A62081 長島 瑠美

1. テーマ

近年、環境問題についてのニュースや環境問題への取り組みを促すようなCMを目にすることが多くなった。スーパーや商店でも環境に配慮した「エコ製品」や「エコ替え」といった言葉を耳にすることも多くなった。さらには、エコバッグやクールビズなどの環境問題に対する意識を高める対策が進められている。こうした流れのなかで環境問題への人びとの取り組みの意識は向上しているのだろうか。2003年に行われた環境問題への取り組みについての態度を調べた調査（『平成15年度フィールドワーク調査報告書 第1号』）によると、環境問題に対する取り組みについて「ひとりで行動しても効果があると思えない」「商品・サービスが身近にない」「具体的に何をすればいいかわからない」と考える人が多かった。しかし、この調査から5年が経過した現在では、人びとの環境問題に対する取り組みについてのイメージは変化しているのではないだろうか。そこでこの5年間に人びとのイメージがどのように変化しているのかを調べることにした。

こうしたイメージが変化しているのかどうかと並んでまた、人びとのエコ行動はどのくらい行われているのか。エコ行動のイメージが良くなったとしても、エコ行動がめんどろなことを考えられていてはあまり実行されないだろう。私たちの生活においては「ごみを捨てること」は当たり前であっても、「ごみを出さないようにすること」は当たり前ではない。たとえば、ごみの分別は、私の親が子どもの頃は行われていなかった。細かく指定された分別はわかりにくく、手間と時間がかかる面倒なことだと考えられているのではないのか。

H自治会副会長のMさんの聞き取り調査の結果によると、ごみの分別が分かりにくかったため自治会はパンフレットを配布したり、ごみステーションでのごみの分別指導を行うことにした。ごみの分別指導を行う前は、生ごみとダンボールを同じ袋に入れてだす、ダンボールを束ねない、指定袋以外の袋でごみをだす、などの問題があったそうだ。やはり細かく指定された分別はわかりにくかったようだ。指導後は多少の違反者もいるがほとんどの人がルールを守ってごみ捨てを行っている。分かりやすくなることで習慣化されやすくなるのだろう。

ごみ捨てという「家事」の時間はあっても、ごみ減量行動は私たちの習慣ではないため、ごみ減量行動を行う人は仕事、学校、家事、睡眠以外の時間(余暇時間)にしているのではないだろうか。さらに、ごみ減量行動は余暇時間に行われると考えてみると、一人暮らしの人には家事などの時間がかかる事を家族と分担できないため余暇時間が家族と同居している人より少なく、そのためごみ減量行動をする余裕がないと考えた。

2. 調査仮説

- I. 環境問題に対する取り組みへの態度はこの5年間で肯定的になった。
- II. 家族と同居している人は一人暮らしの人よりもごみ減量行動をしている。
- III. 余暇時間が短いほどごみ減量行動をしていない。

3. 仮説検証に使用する変数

3. 1 ごみ減量行動

ごみ減量行動の実行状況についての質問では「Q9_a 資源ごみの分別」「Q9_b 古紙集団回収利用」は「いつも行う」が大部分を占めた。「いつも行う」「ときどき行う」をあわせると、「Q9_d 乾電池回収ボックス利用」「Q9_e 不用品リサイクル」「Q9_f 修理・補修して使用」「Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用」「Q9_h 過剰包装を断る」「Q9_i 水筒を持参」が半数以上となり、大多数の人はごみ減量行動をしていることになる。「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」が唯一、「いつも行う」「ときどき行う」をあわせても半数に満たなかった。

3. 2 ごみ減量行動の手間や時間

ごみ減量行動は手間や時間がかかると考えているかについての質問では「Q20_c 家庭で生ごみを処理」が「そう思う」「ややそう思う」をあわせた回答で一番多かった（66.4%）（巻末の「単純集計表」を参照）。Q9 で唯一行っている人が半数に満たなかった「トレー、紙パック回収ボックス利用」を手間や時間がかかると思っている人（Q20_g）は、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて過半数にのぼった（62.9%）。

このことと Q9_c の結果から「トレー・紙パック回収ボックス利用」はスーパーなどにもって行かなくてはならず、手間と時間がかかるから回収ボックスを利用しない、ということになるのではないか（この点について詳しくは後述）。そして、「水筒を持参」に関しては、半数以上の人が手間や時間がかかると思わないという結果になった。しかし、「Q9_i 水筒を持参」の質問に対して「あまり行わない」「まったく行わない」と答えた人が比較的多い結果になっている（43.1%）。このことから、水筒持参は手間や時間がかからないと思われているが、実際に行っている人は少ないということがわかった。

4. 仮説検証

4. 1 仮説Ⅰ：環境問題に対する取り組みへの態度はこの5年間で肯定的になった

表1 2003年の調査結果

		単位（％）				
環境問題に対する取り組み方		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	計
a	一人で行動しても効果があると思えない	32.7	23.5	25.5	18.4	100.0
b	商品・サービスが身近にない	26.0	42.7	26.0	5.2	100.0
c	具体的になにをしていいか分からない	30.9	35.1	27.8	6.2	100.0
d	生活の便利さや豊かさを失いたくない	41.4	39.4	17.2	2.0	100.0
e	時間的余裕が無い	18.4	33.7	34.7	13.3	100.0
f	めんどうだ	17.4	28.6	39.8	14.3	100.0
g	経済的ではない	16.7	29.2	41.7	12.5	100.0
h	かっこ悪い	4.2	4.2	40.7	51.0	100.0

注：それぞれの質問ごとの回答者数は不明（調査回答者数は101名）

ここで2003年『フィールドワーク調査報告書』で千葉市で調査をしたデータとの比較を試みる。5年前の調査結果を振り返ってみると、「d 生活の豊かさや便利さを失いたくない」に「そう思う」「ややそう思う」と答えた人が80.8%と一番多かった。次に多いのは

「b 商品・サービスが身近にない」で 67.8%となっていた。

表2 環境問題に対する取り組み方

単位 (%)

Q24	環境問題に対する取り組み方	そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	計
Q24_a	一人で行動しても効果があると思えない	16.3	28.7	24.3	30.7	100.0 (251人)
Q24_b	商品・サービスが身近にない	14.3	39.3	34.8	11.5	100.0 (244人)
Q24_c	具体的になにをしていいかわからない	12.5	30.1	36.1	21.3	100.0 (249人)
Q24_d	生活の便利さや豊かさを失いたくない	22.9	44.2	23.3	9.6	100.0 (249人)
Q24_e	時間的余裕が無い	10.5	32.8	40.1	16.6	100.0 (247人)
Q24_f	めんどろだ	3.7	20.7	48.0	27.6	100.0 (246人)
Q24_g	経済的ではない	2.8	13.7	47.6	35.9	100.0 (248人)
Q24_h	かっこ悪い	0.0	2.4	31.3	66.3	100.0 (246人)

それに対して今回（2008 年）の結果では、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて一番多かったのは、5 年前と同じく「d 生活の便利さや豊かさを失いたくない」（67.1%）であり、次に多いのは「b 商品・サービスが身近にない」（53.6%）だった。それ以外の順位も 5 年前とほぼ変わらない結果がみられた。しかし、環境問題に対する取り組みに否定的な態度を取る人の割合は、すべての項目で 5 年前よりも低くなっている。「そう思う」「ややそう思う」を合わせて過半数を超えた項目は、「b 商品・サービスが身近にない」と「d 生活の便利さや豊かさを失いたくない」という 2 項目のみであった（5 年前は 5 項目が過半数を超えていた）。ここで注目すべき点は、環境問題への取り組みについて否定的な態度を取る人（「そう思う」「ややそう思う」）の割合は、すべての項目でおよそ 10 ポイント減っているということである。特に、「h かっこ悪い」では「ややそう思う」が 2.4%、「そう思う」は 0%であった（5 年前は合わせて 8.4%）。このことから、環境問題に対する取り組みへの否定的な態度を取る人は少なくなっていることがわかる。現在の生活の豊かさや便利さを失ってまでは環境に配慮した行動をしようと思わないという傾向は 5 年前と変わらないものの、環境問題に対する意識は否定的ではなくなっていることが明らかになった。

4. 2 仮説Ⅱ：家族と同居している人は一人暮らしの人よりもごみ減量行動をしている。

表3 居住形態

居住形態	度数（人）	相対度数（%）
一人暮らし	31	12.2
家族と同居	223	87.8
計	254	100.0

欠損値=4

Q32 を「一人暮らし」とそれ以外を合わせた「家族と同居」とし、二つの変数に分けクロス集計を行った。

表4 居住形態と資源ごみ分別 (単位%)

居住形態	資源ごみ分別		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	100.0	0.0	100.0	(31人)
家族と同居	98.2	1.8	100.0	(221人)
全体	98.4	1.6	100.0	(252人)

$$\chi^2_{(1)}=0.57 \quad p=0.5$$

表5 居住形態と古紙集団回収 (単位%)

居住形態	古紙集団回収		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	64.5	35.5	100.0	(31人)
家族と同居	89.6	10.4	100.0	(221人)
全体	86.5	13.5	100.0	(252人)

$$\text{warning} \quad \chi^2_{(1)}=14.6 \quad p=0.0001$$

表6 居住形態とトレイ、紙パック回収ボックス利用 (単位%)

居住形態	回収ボックス利用		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	32.3	67.7	100.0	(31人)
家族と同居	46.3	53.7	100.0	(218人)
全体	44.6	55.4	100.0	(249人)

$$\chi^2_{(1)}=2.2 \quad p=0.1$$

表7 居住形態と乾電池回収ボックス利用 (単位%)

居住形態	回収ボックス利用		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	51.6	48.4	100.0	(31人)
家族と同居	63.0	37.0	100.0	(216人)
全体	61.5	38.5	100.0	(247人)

$$\chi^2_{(1)}=1.5 \quad p=0.2$$

表8 居住形態と不用品リサイクル (単位%)

居住形態	不用品リサイクル		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	45.2	54.8	100.0	(31人)
家族と同居	57.5	42.5	100.0	(219人)
全体	56.0	44.0	100.0	(250人)

$$\chi^2_{(1)}=1.7 \quad p=0.2$$

表9 居住形態と修理・補修 (単位%)

居住形態	修理・補修		計	
	行っている	行っていない		
一人暮らし	61.3	38.7	100.0	(31人)
家族と同居	81.4	18.6	100.0	(220人)
全体	78.9	21.1	100.0	(251人)

$$\chi^2_{(1)}=6.57 \quad p=0.0104$$

表10 居住形態と水筒持参 (単位%)

居住形態	水筒持参		計
	行っている	行っていない	
一人暮らし	35.5	64.5	100.0 (31人)
家族と同居	60.6	39.5	100.0 (218人)
全体	57.4	42.6	100.0 (249人)

$$\chi^2_{(1)} = 6.98 \quad p = 0.0083$$

居住形態（表 3）とごみ減量行動の変数（Q9a～i）をそれぞれクロスさせた結果、表 4～8 は有意な結果は得られなかったが、割合でみると「一人暮らし」より「家族と同居」している人のほうがごみ減量行動を行っている傾向がある。有意な結果ではないが、居住形態がごみ減量行動に影響を及ぼしている傾向がある。特に資源ごみ分別（表 4）や古紙集団回収利用（表 5）は、「家族と同居」している人にとって分担できると考えられているためか、比較的よく行われているのかもしれない。

居住形態と Q9_f「修理・補修して使用」（表 9）、居住形態と Q9_i「水筒持参」（表 10）は有意な結果が得られた。「修理・補修して使用」では「一人暮らし」の人も「家族と同居」している人も「修理・補修して使用」を行っている人の割合が多いが、「一人暮らし」が 61.3%、「家族と同居」は 81.4%で家族と同居のほうが多い。「水筒持参」に関して「一人暮らし」は「行っている」が 35.5%で「家族と同居」は「行っている」が 60.6%で「一人暮らし」の人のほうが水筒を持参していないことがわかる。

以上の結果から、ごみ減量行動をするかしないかは居住形態（ひとり暮らしか家族と同居か）によって影響を受けている傾向がみられる。つまり、「家族と同居」しているの方がごみ減量行動をしている。「家族と同居」している人は、家事を分担できる時間的な余裕があるため、ごみ減量行動をするのではないだろうか。

そこで余暇時間が短いとごみ減量行動を行わないかを調べるため、半数以上の人が行わないと答えた Q9_c「トレー紙パック回収ボックス利用」と「一人暮らし」「家族と同居」で「行っている」「行っていない」が分かれた Q9_c「水筒持参」を取り上げ、以下の検証を行う。

4. 3 仮説Ⅲ：余暇時間が短いほどごみ減量行動をしていない。

表11 余暇時間（平日）

余暇時間	度数（人）	相対度数（%）
平均未満（5時間）	198	78.9
平均以上（5時間）	53	21.1
計	251	100.0

欠損値=7

表12 余暇時間（休日）

余暇時間	度数（人）	相対度数（%）
平均未満（8時間）	158	64.8
平均以上（8時間）	86	35.3
計	244	100.0

欠損値=14

余暇時間の平均値を平日、休日それぞれ求めた結果、平日が 5 時間、休日が 8 時間となった（表 11,12）。それぞれを「平均未満」「平均以上」の二つの変数に分け、仮説Ⅱの検証で有意な結果がみられた「Q9_i 水筒を持参」と、有意な結果ではなかったが、「一人暮らし」の人、「家族と同居」している人ともに半数以上が「行っていない」と回答した「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」をそれぞれクロス集計を行った。

余暇時間が平均未満の人を余暇時間が短い、余暇時間が平均以上の人を余暇時間が多いとし、以下の検証をしていく。

表13 余暇時間（平日）とトレー紙パック回収利用（単位％）

余暇時間	トレー紙パック回収ボックス利用		計
	行っている	行っていない	
平均未満	44.3	55.7	100.0 (194人)
平均以上	42.3	57.7	100.0 (52人)
全体	43.9	56.1	100.0 (246人)

$\chi^2_{(1)}=0.07$ $p=0.7941$

表14 余暇時間（休日）とトレー紙パック回収利用（単位％）

余暇時間	トレー紙パック回収ボックス利用		計
	行っている	行っていない	
平均未満	49.4	50.7	100.0 (154人)
平均以上	36.5	63.5	100.0 (85人)
全体	44.8	55.2	100.0 (239人)

$\chi^2_{(1)}=3.67$ $p=0.0552$

表15 余暇時間（平日）と水筒持参（単位％）

余暇時間	水筒持参		計
	行っている	行っていない	
平均未満	55.9	44.1	100.0 (195人)
平均以上	58.8	41.2	100.0 (51人)
全体	56.5	43.5	100.0 (246人)

$\chi^2_{(1)}=0.14$ $p=0.7075$

表16 余暇時間（休日）と水筒持参（単位％）

余暇時間	水筒持参		計
	行っている	行っていない	
平均未満	58.4	41.6	100.0 (154人)
平均以上	51.8	48.2	100.0 (85人)
全体	56.1	43.9	100.0 (239人)

$\chi^2_{(1)}=0.99$ $p=0.3194$

表 13～16 は有意な結果は得られなかった（表 13、14）。ただし、余暇時間が平均以上の人のほうが「トレー、紙パック回収ボックス利用」を行っていないという結果だった。「水筒持参」に関しても同様に有意な結果は得られなかった（表 15、16）。つまり、余暇時間が多いか少ないかはごみ減量行動に影響を及ぼしていないことがわかる。

以上の仮説ⅡとⅢの検証を通じて、居住形態は「Q9_f 修理・補修」「Q9_i 水筒を持参」といったごみ減量行動に有意な影響を与えているものの、その他のごみ減量行動には有意な影響を与えていなかった。さらに実際に余暇時間があるのかどうかということも、ごみ減量行動に影響を与えてはいなかった。

では、何がごみ減量行動に影響を与えているのだろうか。ここで「ごみ減量行動は手間や時間がかかると思うか」を尋ねた Q20 に注目したい。仮説Ⅲで余暇時間が長い人はごみ減量行動を行うと考えて分析をおこなったが、ごみ減量行動を行うにあたって重要なのは、ごみ減量行動に手間や時間がかかるかと思っているかどうかということではないだろうか。

そこで、ごみ減量行動に手間や時間がかかると思うかは余暇が多いか少ないかが影響しているのではないかと考え、「余暇時間が長い人は、トレー、紙パック回収ボックス利用を手間と時間がかかると思わない」と考えて分析を行ったが、「余暇時間」が長い人、短い人で「トレー、紙パック回収ボックス利用は手間と時間がかかる」と思う、思わないかはほとんど差がないという結果になった。つまり、「トレー、紙パック回収ボックス利用は手間と時間がかかる」と思う、思わないは余暇時間の多寡と関連はなかった。

では、余暇時間は関係していないということは、手間と時間がかかると思うかどうかは直接ごみ減量行動に影響を及ぼしているのではないだろうか。

「トレー、紙パック回収ボックス利用」については、「一人暮らし」の人と「家族と同居」している人に差が見られず、どちらも実行率の低いごみ減量行動であった。(68 頁の表 6 を参照)。

「トレー、紙パック回収ボックス利用」は、燃えるごみとして捨てることができるが、回収ボックスを利用するには後日、トレー、紙パックを洗い、スーパーまで持っていかなくてはならず手間と時間がかかると思われるから行われたいのではないだろうか。

表17 手間と時間がかかるとトレー紙パック回収ボックス利用 (単位%)

手間と時間がかかる	トレー、紙パック回収ボックス利用		計
	行っている	行っていない	
そう思う	38.4	61.6	100.0 (159人)
そう思わない	54.8	45.2	100.0 (93人)
全体	44.4	55.6	100.0 (252人)

$$\chi^2_{(1)}=6.4 \quad p=0.01$$

その結果、「トレー、紙パックの回収ボックス利用」は手間と時間がかかると考えている人と、「トレー、紙パック回収ボックス利用」行動との間に有意な関係が見られ、手間と時間がかかると思っている人は「トレー、紙パック回収ボックス利用」をしないことがわかった。

この傾向は「一人暮らし」と「家族と同居」と関係が見られた、「水筒持参」についても、見られるのかについて、検証を試みた。その結果、水筒持参の実行率が低い「一人暮らし」の人でも、水筒持参は手間がかからないと思っている人は、水筒持参の実行率が高いことがわかった。

以上のことから、余暇時間の多寡にかかわらず、手間と時間がかかると思うかどうかでごみ減量行動をするかしないかが決まることが推察される。

表18 居住形態と水筒持参の手間と時間と水筒持参 (単位%)

居住形態	水筒持参は手間と時間がかかる	水筒持参		χ^2 (1) 値
		行っている	行っていない	
一人暮らし	そう思う	26.7	73.3	5.4751※
	そう思わない	46.7	53.3	
家族と同居	そう思う	51.1	48.9	1.2919
	そう思わない	66.9	33.1	

※ $p < 0.05$

5. まとめ

近年、環境問題が深刻な問題としてマスコミ、メディアで取り上げられることが多くなってきた。そのため、人びとの環境への意識は向上し、大多数の人がごみ減量行動をしていた。そして今回の調査結果によると、2003年と比べて環境問題に対する取り組みを否定的にとらえる人は少なくなっていた。

しかし、「家族と同居」している人と違い、「一人暮らし」の人は家事などを分担できないため余暇時間が少いだろうと推測し、「家族と同居」している人と「一人暮らし」の人でごみ減量行動に違いがあるのではないかと考えた。そこで「一人暮らし」の人と「家族と同居」している人でごみ減量行動に違いがあるのかを調べたところ、「一人暮らし」の人より「家族と同居」している人のほうがごみ減量行動を行っている傾向があった。仮説どおり、ごみ減量行動をするかしないかは居住形態によって影響を受けている傾向がみられた。やはり、「家族と同居」している人は、家事などを分担できる時間的余裕があるため、ごみ減量行動をするのではないか。

ここで、「家族と同居」している人で「行っている」が6割に対し、「一人暮らし」の人は3割ほどで「家族と同居」している人と「一人暮らし」の人で正反対の結果になった「Q9_i 水筒を持参」と、「行っている」が「家族と同居」している人、「一人暮らし」の人ともに少なかった「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」に重点を置いて調べていった結果、余暇時間が多いか少ないかは「水筒を持参」「トレー、紙パック回収ボックス利用」に影響を及ぼしていなかった。

そこで、余暇時間の多寡でごみ減量行動をするかしないかが決まるのではないとしたら、手間や時間がかかると思うかどうかの方が重要なのではないかと考えた。「トレー、紙パック回収ボックス利用は手間と時間がかかる」と「平日の余暇時間」「休日の余暇時間」をそれぞれクロスし、ごみ減量行動に手間や時間がかかると思うかは余暇が多いか少ないかが影響しているのではないかと考え、「余暇時間が長い人は、トレー、紙パック回収ボックス利用を手間と時間がかかると思わない」という仮説をたてた。

その結果、「トレー、紙パック回収ボックス利用は手間と時間がかかる」と思う、思わないは余暇時間の多寡に影響していなかった。余暇時間は関係していないということは、手間と時間がかかると思うかどうかは直接ごみ減量行動に影響を及ぼしているのではないかという考えから、「Q20_g トレーや紙パックを回収ボックスへ持っていく」と「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」をクロス集計した。

その結果、手間や時間がかかると思うかどうか「トレイ、紙パック回収ボックス利用」に影響していた。以上のことから、余暇時間の多寡にかかわらず、手間と時間がかかると思うかどうかでゴミ減量行動をするかしないかが決まるということがわかった。

「できない」ではなく「手間や時間がかかると思うからやらない」ということが人びとがゴミ減量行動を行わない最大の理由だと思われる。仮説Ⅰの分析で「現在の生活の豊かさや便利さを失いたくない」が上位に上がったとおり、現在は便利なものがあふれている。便利な生活に慣れてしまったため、便利さに甘えてしまっているのだろう。環境問題が身近な問題になってきている今、ゴミ減量行動をどう「手間や時間がかからない」ものへしていくか、また人びとの甘えをどう変えていくかが今後重要になっていくのではないだろうか。

9章 地域のつながりとごみ減量行動

A62134 名取 真里恵

1. 問題意識と仮説

1. 1 問題意識

私たちは人と人とのつながりの中で生きている。「地球の未来のために環境対策を」と言われてもなかなか動き出せないが、身近な人とのつながりに関わると考えると、自然に何かしらの行動を起こすのではないだろうか。ごみ減量行動は特に身近な環境対策であり、資源回収などは地域に貢献することにもなる。地域のためを思い、地域への愛着が強い人ほど積極的にごみ減量行動をするようになると考えた。

日常生活の中での交流範囲は隣近所に限られてしまうことが多いが、地域で行われる行事や活動には、同じ地域内でも離れたところに住む人も集まるため、交流範囲が広がる。また、日頃は挨拶を交わす程度の人とも、活動を通してより一層交流を深めることができるのではないだろうか。積極的にそうした地域の活動に参加し、地域の人々とふれあうほど、親しい人たちがいる地域に愛着を感じるようになるのではないか。

だがその一方で、居住年数の浅い人にとっては、何十年もかけてできあがっている地域の輪に飛び込むことは難しいのではないだろうか。特に借家で集合住宅に住んでいる人は自治会等の組合に入る義務もなく、仮住まいとしていることが多いこともあってか、なかなか関わる機会もない。居住年数や居住形態、特に住居の所有形態が、地域への愛着の形成に大きく影響するのではないだろうか。

ところで、千葉市ではレジ袋削減のためにエコバッグを推奨する「マイバッグキャンペーン」が行われている。専用のエコバッグを利用すると、ポイントがつくなどのサービスが受けられる店もある。ブランドものやカラフルなファッション感覚のエコバッグが増えているが、家計を管理する立場の人は、エコバッグの使用理由として特に経済的メリットを重視しているのではないかと考えた。

地域への愛着を軸に、ごみ減量行動への影響、愛着の形成に影響するもの、そしてエコバッグ使用に影響を与える経済的メリットの重要性について調査をするための仮説を立てた。

1. 2 仮説

- I 地域に愛着を感じている人ほど、ごみ減量行動に取り組む
- II 地域の活動に積極的な人ほど、地域に愛着を感じている
- III 居住年数が長く、持ち家の人ほど、地域に愛着を感じている
- IV 家計の管理者は、経済的メリットを重視してエコバッグを使用する

2. 問題の背景・概要

2008年7月20日に、H自治会副会長のMさんにご協力いただき、聞き取り調査を行った。H自治会のごみ収集所には、Mさんのアイディアで、ごみ出しのルールなどが書かれた大きな立て看板が設けられている。Mさん御自身も公園の落ち葉拾いから治安維持まで自治会員としても一住民としても積極的に活動されている。先の立て看板や、千葉市環境

局環境管理部資源循環推進課職員さんと協力して行ったごみ出しルールに関する説明会、パンフレットのポスティングによってルール違反者は減ったが、それでもまだいなくなつた訳ではない。ごみのルール違反は顔見知りには咎められればバツが悪くなって繰り返さないが、他所の地域の人やそうしたその地域の住民との関わりが薄い人々のモラルの低下が問題ではないかとMさんは感じている。

Mさんが公園の掃除などをしていると、通りかかった顔見知りの人たちが自然に手伝ってくれるという。Mさんは「環境シェフ」や廃棄物適正化推進委員会としての活動もされている。Mさんのように地域のために思って行動している人を見ると、自分も動かなければと回りの人も考えるようになり、またそれを受けて、率先して行動していた人もより一層地域のために貢献しようとするのではないかと感じた。

3. 仮説検証に使用する変数

3. 1 ごみ減量行動

ごみ減量行動においては、「Q9_a 資源ごみ分別」、「Q9_b 古紙集団回収利用」、「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」、「Q9_d 乾電池回収ボックス利用」、「Q9_e 不用品リサイクル」、「Q9_f 修理・補修して使用」、「Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用」、「Q9_h 過剰包装を断る」の8つの設問を用いた。

「Q9_a 資源ごみ分別」は「いつも行う」が95.3% (244人)、「Q9_b 古紙集団回収」は「いつも行う」77.0% (197人)と「ときどき行う」9.0% (23人)をあわせると86.0%、「Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用」は「いつも行う」40.6% (104人)と「ときどき行う」44.1% (113人)をあわせると84.7%とほとんどの人が行っている。この3項目は、ごみの種類によってごみ袋の色が違う、回収の曜日が決められているなど、習慣化のしやすさが影響していると思われる。「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」、「Q9_d 乾電池回収ボックス利用」は回収ボックスのある店に赴く手間のためか、行う人と行わない人に分かれるようである。「Q9_e 不用品リサイクル」、「Q9_f 修理・補修して使用」、「Q9_h 過剰包装を断る」は程度の基準が曖昧なこともあってか「ときどき行う」が最も多かった。全体的にごみ減量行動は行われているようである。

表1 ごみ減量行動の頻度

(単位%)

Q9 ごみ減量行動	いつも行う	ときどき行う	あまり行わない	まったく行わない	計	
Q9_a 資源ごみ分別	95.3	3.1	1.2	0.4	100.0	(256人)
Q9_b 古紙集団回収利用	77.0	9.0	7.4	6.6	100.0	(256人)
Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用	32.0	12.3	20.6	35.2	100.0	(253人)
Q9_d 乾電池回収ボックス利用	43.8	17.5	15.5	23.1	100.0	(251人)
Q9_e 不用品リサイクル	16.5	39.8	24.8	18.9	100.0	(254人)
Q9_f 修理・補修して使用	29.8	49.0	14.9	6.3	100.0	(255人)
Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用	40.6	44.1	11.3	3.9	100.0	(256人)
Q9_h 過剰包装を断る	27.2	46.1	17.3	9.4	100.0	(254人)

3. 2 エコバッグの使用理由

エコバッグの使用理由においては、Q12_2 エコバッグ使用理由の設問を用いた。

「環境によい」が41.9% (77人)と最も多く、ついで「お店のサービス」が21.2% (39人)、「もらった」からが13.6% (25人)、「レジ袋の有料化」が7.6% (14人)であった(巻

末の「単純集計表」を参照)。流行やデザインよりも、“エコバッグ”としての利用価値を重視しているようである。

分析の際には、「レジ袋の有料化」と「お店のサービス」を経済的メリット、「環境によい」を環境対策、それ以外をその他、として統合した変数を作成した。

表2 エコバッグの使用理由の単純集計

Q12.2 エコバッグ使用理由	度数(人)	相対度数(%)
レジ袋の有料化	14	7.6
お店のサービス	39	21.2
環境によい	77	41.9
ブランド・デザイン	6	3.3
流行	1	0.5
もらった	25	13.6
国や市の呼びかけ	3	1.6
その他	7	3.8
理由は複数	12	6.5
計	184	100.0

欠損値=74

表3 エコバッグの使用理由

エコバッグの使用理由	度数(人)	相対度数(%)
経済的メリット	54	29.3
環境対策	77	41.9
その他	53	28.8
計	184	100.0

欠損値=74

3. 3 地域の活動への参加頻度

地域の活動への参加頻度においては、「Q19_a 環境保全」、「Q19_b 地域行事」、「Q19_c 教育・文化」、「Q19_d 防犯・防災」、「Q19_e 自治会運営」、「Q19_f 高齢者・障害者支援」の6つの設問を用いた。

「Q19_a 環境保全」は「いつもしている」26.5% (50人)と「よくしている」27.5% (52人)をあわせると54.0%と最も参加率が高かった。次に「Q19_b 地域行事」が「いつもしている」12.6% (25人)と「よくしている」22.6% (45人)をあわせると35.2%、「Q19_e 自治会運営」が「いつもしている」10.2% (19人)と「よくしている」23.1% (43人)をあわせると33.3%であった。近隣の住民が集まる可能性の高い行事であることが参加率の高さに影響していると思われる。「Q19_d 教育・文化」、「Q19_d 防犯・防災」、「Q19_f 高齢者・障害者支援」は「いつもしている」と「よくしている」をあわせても30%に満たない。この3項目は多少の知識や興味が無ければなかなか参加しづらいと思われる。また回答者は60代が最も多く、体力を消耗する行事からは遠ざかってしまいがちになるのではないだろうか。

分析の際には地域の活動への参加頻度を測定する項目として、クロンバックの α 信頼係数を確認したところ、0.8以上と内的整合性が認められ妥当性のある尺度であることが確認されたため、Q19_a～Q19_fの6項目を合成し、Q19_a～Q19_fの各選択肢で「あてはまらない」以外を用い、「いつもしている」に4点、「よくしている」に3点、「あまりしていな

い」に2点、「まったくしていない」に1点を与えてそれぞれ点数化し、平均値17以上を地域の活動への頻度が「高い」、16以下を「低い」に分割した変数を作成した。

表4 地域の活動参加頻度の単純集計

(単位%)

Q19 地域の活動	いつも している	よくしている	あまり していない	全く していない	計	
Q19_a 環境保全	26.5	27.5	24.3	21.7	100.0	(189人)
Q19_b 地域行事	12.6	22.6	32.7	32.2	100.0	(199人)
Q19_c 教育・文化	6.6	17.4	32.3	43.7	100.0	(167人)
Q19_d 防犯・防災	4.5	19.0	40.2	36.3	100.0	(179人)
Q19_e 自治会運営	10.2	23.1	33.9	32.8	100.0	(186人)
Q19_f 高齢者・障害者支援	3.1	6.9	34.6	55.4	100.0	(159人)

表5 地域活動の参加頻度

活動への参加頻度	度数(人)	相対度数(%)
高い	65	49.6
低い	66	50.4
計	131	100.0

欠損値=127

3. 4 地域への愛着度

地域への愛着においては、「Q18_a 地域住民と気軽に挨拶しあえる」、「Q18_b 地域住民と互いに協力しあえる」、「Q18_c 地域の悪口は不快」、「Q18_d できる限り住み続けたい」、「Q18_e 地域に貢献したい」、「Q18_f 『まち』に帰ると安心する」の6つの設問を用いた。

「Q18_a 地域住民と気軽に挨拶しあえる」は「そう思う」28.5% (73人) と「ややそう思う」35.9% (92人) をあわせると64.4%と最も多かった。「Q18_b 地域住民とは互いに協力しあえる」、「Q18_c 地域の悪口は不快」、「Q18_e 地域に貢献したい」は「ややそう思う」と「あまりそう思わない」が多く、あまり踏み込んだところまで関わるとはいえないようである。「Q18_d できる限り住み続けたい」は「そう思う」32.7% (84人) と「ややそう思う」38.5% (99人) をあわせると71.2%、「Q18_f 『まち』に帰ると安心する」、は「そう思う」39.5% (101人) と「ややそう思う」39.5% (101人) をあわせると79.0%と、土地柄や地域としての居心地はよいようである。

分析の際には、地域への愛着の高さを測定する項目として、Q18_a～Q18_f の6項目を合成し、クロンバックの α 信頼係数を確認したところ、0.8以上と内的整合性が認められ妥当性のある尺度であることが確認されたため、Q18_a～Q18_f の6項目を合成し、Q18_a～Q18_f の各選択肢で「そう思う」に4点、「ややそう思う」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を与えてそれぞれ点数化し、平均値17以上を愛着が「高い」、16以下を「低い」に分割した変数を作成した。

表6 地域への愛着の高さの単純集計

(単位%)

Q18 地域への愛着	そう思う	ややそう思う	あまり そう思わない	そう思わない	計	
Q18_a 地域住民とは気軽に挨拶しあえ	28.5	35.9	22.3	13.3	100.0	(256人)
Q18_b 地域住民と互いに協力しあえる	14.6	33.9	35.0	16.5	100.0	(254人)
Q18_c 地域の悪口は不快	15.1	34.5	34.5	15.9	100.0	(252人)
Q18_d できる限り住み続けたい	32.7	38.5	22.6	6.2	100.0	(257人)
Q18_e 地域に貢献したい	18.0	51.2	24.2	6.6	100.0	(256人)
Q18_f 「まち」に帰ると安心する	39.5	39.5	15.2	5.9	100.0	(256人)

表7 地域への愛着の高さ

地域への愛着	度数(人)	相対度数(%)
高い	139	55.4
低い	112	44.6
計	251	100.0

欠損値=7

3. 5 居住形態

居住形態においては、Q31 居住形態の設問を用いた。分譲マンションは管理組合に加入するため、少なくとも賃貸よりは同じマンション内の住民や周囲の人と関わると考えられる。

よって建物の形態よりも所有形態に着目し、分析の際には、「持ち家」か「借家」に分割した変数を作成した。

表8 居住形態(所有形態別)の単純集計

居住形態(所有形態別)	度数(人)	相対度数(%)
持ち家	186	74.3
借家	65	25.7
計	251	100.0

欠損値=7

3. 6 居住年数

居住年数においては、Q32 居住年数の設問を用いた。越してきて数年では愛着という概念はなくとも、20 年も経つと差が出てくるのではないかと考え、分析の際には、「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」「5 年以上 10 年未満」「10 年以上 20 年未満」を「20 年未満」と、「20 年以上」との二つに分割した変数を作成した。居住年数「20 年以上」の人だけで 40.1% (103 人) と、表 8 居住形態と照らし合わせてみても、同じ地域に長く住み続ける人が多いようである。

表9 居住年数の単純集計

居住年数	度数(人)	相対度数(%)
20年以上	103	40.8
20年未満	154	59.1
計	257	100.0

欠損値=1

3. 7 家計の管理者

家計の管理者においては、Q29 家計の管理者の設問を用いた。家計の管理者が「自分」である人が 58.0% (148 人) で最も多く、ついで「配偶者」が 28.2% (72 人)、「母親・配偶者の母親」9.4% (24 人) であった。分析の際には、回答者が家計管理者であるか否かを特定するため、家計管理者が「自分」であるか「それ以外」に分割した変数を作成した。

表10 家計の管理者

家計の管理者	度数(人)	相対度数(%)
自分	148	58.0
配偶者	72	28.2
母親・配偶者の母親	24	9.4
父親・配偶者の父親	6	2.4
子ども	0	—
子どもの配偶者	0	—
祖父母	1	0.4
兄弟、姉妹	2	0.8
その他	2	0.8
計	255	100.0

欠損値=3

表11 家計の管理者特定の単純集計

家計の管理者	度数(人)	相対度数(%)
自分	148	58.0
それ以外	107	42.0
計	255	100.0

欠損値=3

4. 仮説検証

4. 1 仮説1 地域に愛着を感じている人ほど、ごみ減量行動に取り組む

「地域への愛着の高さ」(表7)と、「ごみ減量行動」(表1)のそれぞれの質問をクロス集計し、 χ^2 検定を行った。

表12 地域への愛着と資源ごみ分別 (単位%)

地域への愛着	資源ごみ分別		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	97.8	2.2	100.0	(138人)
低い	92.0	8.0	100.0	(112人)
全体	95.2	4.8	100.0	(250人)

$p=0.03 \quad \chi^2 = (1) 4.6488$

表13 地域への愛着と古紙集団回収利用 (単位%)

地域への愛着	古紙集団回収利用		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	86.2	13.8	100.0	(138人)
低い	65.2	34.8	100.0	(112人)
全体	76.8	23.2	100.0	(250人)

$p<.0001 \quad \chi^2 = (1) 15.3797$

表 1 4 地域への愛着とトレー・紙パック回収ボックス利用 (単位%)

地域への愛着	トレー・紙パック回収ボックス利用		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	41.2	58.8	100.0	(136人)
低い	20.5	79.5	100.0	(112人)
全体	31.9	68.2	100.0	(248人)

p=.0005 $\chi^2 = (1) 12.0544$

表 1 5 地域への愛着と乾電池回収ボックス利用 (単位%)

地域への愛着	乾電池回収ボックス利用		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	51.1	48.9	100.0	(135人)
低い	33.9	66.1	100.0	(112人)
全体	43.3	56.7	100.0	(247人)

p=.006 $\chi^2 = (1) 7.3606$

「Q9_a 資源ごみ分別」(表 12)では、「地域への愛着が高く」「いつも行う」人が 97.8% (135 人)で、「愛着が低く」「いつも行う」人が 92.0% (103 人)であった。「Q9_b 古紙集団回収利用」(表 13)では、「地域への愛着が高く」「いつも行う」人が 86.2% (119 人)で、「愛着が低く」「いつも行う」人が 65.2% (73 人)であった。「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」(表 14)では、「地域への愛着が高く」「いつも行う」人が 41.2% (56 人)、「愛着が低く」「いつも行う」人が 20.5% (23 人)であった。「Q9_d 乾電池回収ボックス利用」(表 15)では、「地域への愛着が高く」「いつも行う」人が 51.1% (69 人)、「愛着が低く」「いつも行う」人が 33.9% (38 人)であった。「Q9_e 不用品リサイクル」(表 16)では、「地域への愛着が高く」「いつも行う」人が 19.7% (27 人)、「愛着が低く」「いつも行う」人が 9.9% (11 人)であった。以上の 5 項目では有意な関連性が認められた。それに対して、「Q9_f 修理・補修して使用」(表 17)、「Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用」(表 18)、「Q9_h 過剰包装を断る」(表 19)の 3 項目では有意な関連性は認められなかった。

「Q9_a 資源ごみ分別」、「Q9_b 古紙集団回収利用」、「Q9_c トレー、紙パック回収ボックス利用」、「Q9_d 乾電池回収ボックス利用」の共通点は、資源回収とごみの削減である。トレーや紙パックはそのままごみ収集に出してしまうことも可能だが、買い物のついでなどに回収ボックスを利用することで資源を無駄にせず、きちんと分別をすれば地域のごみ収集所もきれいに保てる。地域で行われる集団回収を利用することは、より地域に貢献しようという思いの現れではないだろうか。

表 1 6 地域への愛着とリサイクル (単位%)

地域への愛着	リサイクル		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	19.7	80.3	100.0	(137人)
低い	9.9	90.1	100.0	(111人)
全体	15.3	84.7	100.0	(248人)

$$p=0.03 \quad \chi^2 = (1) 4.5371$$

表 1 7 地域への愛着と修理補修して使用 (単位%)

地域への愛着	修理補修		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	33.6	66.4	100.0	(137人)
低い	23.2	76.8	100.0	(112人)
全体	28.9	71.1	100.0	(249人)

$$p=n.s \quad \chi^2 = (1) 3.2192$$

表 1 8 地域への愛着とメモ用紙裏利用 (単位%)

地域への愛着	メモ用紙裏利用		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	41.3	58.7	100.0	(138人)
低い	36.9	63.1	100.0	(111人)
全体	39.4	60.6	100.0	(249人)

$$p=n.s \quad \chi^2 = (1) 0.4916$$

表 1 9 地域への愛着と過剰包装を断る (単位%)

地域への愛着	過剰包装断る		計	
	いつも行う	いつも行う わけではない		
高い	30.7	69.3	100.0	(137人)
低い	21.4	78.6	100.0	(112人)
全体	26.5	73.5	100.0	(249人)

$$p=n.s \quad \chi^2 = (1) 2.6940$$

「Q9_e 不用品リサイクル」(表 16)、「Q9_f 修理・補修して使用」(表 17)、「Q9_g 紙の裏面をメモ用紙として使用」(表 18)、「Q9_h 過剰包装を断る」(表 19)の共通点はごみを出さないことである。昭和初期頃まで、生ごみは家畜の餌か各家庭で焼却し、ものが壊れば修理して何度でも使い、利用価値のあるものは「ごみ」と呼ばなかったという。こうしたごみ減量は地域への愛着の度合いよりも、家庭によって当たり前のように行われていたことが結果に影響したのではないだろうか。有意差が認められた「Q9_e 不用品リサイクル」に関しては、家電や生活用品などの中古販売を意味するようだが、今回の調査の回答者で最も多い 60 代の人にとって、「リサイクル」という言葉はあまり身近ではないのではない

だろうか。「リサイクル」という言葉の本来の意味をとれば「不用品を再度資源化し、新たな製品を作り出すこと」であり、リサイクルショップの利用やものを人に譲ることなどは「リユース（再使用）」の意味合いを持つ。この設問設計では選択した言葉に問題があったと考えられる。

地域に愛着を感じている人ほど、特に資源回収、リサイクルという観点を重視したごみ減量行動を行うことがわかった。ただし、ごみを出さないという観点においては、あくまで推測ではあるが、地域への愛着の度合いよりも各家庭での習慣が影響しているのではないだろうか。

4. 2 仮説2 地域の活動に積極的な人ほど、地域に愛着を感じている

「地域活動への参加頻度」（表5）と「地域への愛着」（表7）の2変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、5%の有意水準で関連性が認められた（表20）。地域の活動に参加すれば交流も深まり地域への愛着は高まるだろう。ただし、「地域の活動への参加頻度が低い」人の愛着の高低に差がないことに関しては、地域の活動に参加しなくても隣近所との交流を深めることは可能であり、その範囲を“地域”をとれば地域への愛着は高いと捉えるのではないだろうか。設問の“地域”の範囲設定に問題があったと考えられる。

地域の活動に参加し続けているうちに地域に愛着が沸いたのか、地域に愛着を感じているから地域の活動に参加するのかは定かではないが、地域の活動への参加頻度は地域への愛着度に影響することがわかった。

表20 地域活動への参加頻度と地域への愛着				(単位%)
地域活動への参加頻度	地域への愛着		計	
	高い	低い		
高い	77.4	22.6	100.0	(62人)
低い	50.0	50.0	100.0	(64人)
全体	63.5	36.5	100.0	(126人)

$$p < .01 \quad \chi^2 = (1) 10.2143$$

4. 3 仮説3 居住年数が長く、持ち家の人ほど、地域に愛着を感じている

(1) 補足仮説1: 居住年数が長い人ほど、地域への愛着は高い

居住年数（表9）と、「地域への愛着」（表7）の2変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、「居住年数20年以上」で「地域への愛着が高い人」は66.7%（66人）で、「居住年数20年未満」で「地域への愛着が高い人」は48.3%（73人）であった。「居住年数20年以上」の人のほうが、「居住年数20年未満」の人よりも愛着が高いことが分かった。（表21）

表21 居住年数と地域への愛着				(単位%)
居住年数	地域への愛着		全体	
	高い	低い		
20年以上	66.7	33.3	100.0	(99人)
20年未満	48.3	51.7	100.0	(151人)
全体	55.6	44.4	100.0	(250人)

$$p < .005 \quad \chi^2 = 8.1316$$

(2) 補足仮説 2：持ち家の人ほど、地域に愛着を感じている

居住形態（表 8）と「地域への愛着」（表 7）の 2 変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、「持ち家」「地域への愛着が高い」人は 62.6%（114 人）で、「借家」で「地域への愛着が高い」人は 35.9%（65 人）であった。「持ち家」の人のほうが、「借家」の人よりも「地域への愛着が高い」ことがわかった。（表 22）

表 2 2 居住形態と地域への愛着 (単位%)

居住形態	地域への愛着		全体
	高い	低い	
持ち家	62.6	37.4	100.0 (182人)
借家	35.9	64.1	100.0 (64人)
全体	55.7	44.3	100.0 (246人)

$$p = <.0001 \quad \chi^2 = 13.6791$$

補足仮説 1 と 2 より、「居住年数」と「居住形態」はそれぞれ「地域への愛着」に影響を与えることがわかった。仮説検証のため、「居住年数」と「居住形態」は「地域への愛着」に相互に影響を与えるのかを検証する。

居住年数（表 9）と、居住形態（表 8）の 3 変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、「居住年数 20 年以上」（表 23）において、度数の偏りによりワーニングが発生してしましたが、「居住年数 20 年未満」（表 24）に限り、有意な関連性が認められた。

「持ち家」で「地域への愛着が高い」人は 55.7%（49 人）で、「借家」で「地域への愛着が高い」人は 37.3%（22 人）であった。少なくとも「居住年数 20 年未満」の人の中では、「持ち家」の人のほうが「借家」の人よりも愛着が高いことが分かった。

表 2 3 居住年数 20 年以上と所有形態と地域への愛着度 (単位%)

所有形態	地域の愛着		計
	高い	低い	
持ち家	69.2	30.9	100.0 (94人)
借家	20.0	80.0	100.0 (5人)
計	66.7	33.3	100.0 (99人)

$$p=0.02 \quad \chi^2 = (1) 5.1606$$

表 2 4 居住年数 20 年未満と所有形態と地域への愛着度 (単位%)

所有形態	地域の愛着		計
	高い	低い	
持ち家	55.7	44.3	100.0 (88人)
借家	37.3	62.7	100.0 (59人)
計	48.3	51.7	100.0 (147人)

$$p=0.03 \quad \chi^2 = (1) 4.7854$$

(3) 補足仮説 3：「居住年数 20 年未満」の人の中でも、年数が長く持ち家の人ほど愛着が高い

仮説検証の為に、有意差のあった「居住年数 20 年未満」の人に注目する。表 24 の「居住年数 20 年未満」の人の中で、「持ち家」で「地域への愛着が低い」人は 44.3%（51 人）で、「借家」で「地域への愛着が低い」人は 62.7%（37 人）であった。表 24 で「居住年数が 20 年未満の人の中でも、借家の人より持ち家の人のほうが地域への愛着は高い」ことがわかったが、居住形態だけが影響するのであれば、「持ち家」の人の愛着の高低差が、

「借家」の人の愛着の高低差と同じくらいのひらきがあるのではないだろうか。「居住年数 20 年未満」の中には、「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」「5 年以上 10 年未満」「10 年以上 20 年未満」の人が含まれている。「居住年数 20 年未満」の人に限定し、居住年数の長さと地域への愛着の影響をしてみる。

「居住年数 20 年未満」の人の中で居住年数が長い人と短い人を調べる為に、この仮説のみ「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」を「5 年未満」、「5 年以上 10 年未満」「10 年以上 20 年未満」を「5 年以上 20 年未満」に分割し、「居住形態」、「地域への愛着」の 3 変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、「居住年数 5 年以上 20 年未満」に 5 % の有意水準で関連性が認められた。「居住年数 5 年未満」には有意差は認められなかった。(表 25) (表 26)

有意差のあった「居住年数 5 年以上 20 年未満」(表 25) では、「持ち家」で「地域への愛着が高い」人は 56.9% (37 人) で、「借家」で「地域への愛着が高い」人は 25.0% (4 人) であった。「居住年数 20 年未満」の人の中でも、「居住年数 5 年以上 20 年未満」に限り、「借家」の人よりも「持ち家」の人のほうが、地域への愛着が高いことが分かった。

表 2 5 居住年数5年以上20年未満と所有形態と地域への愛着度 (単位%)

居住形態	地域への愛着		全体
	高い	低い	
持ち家	56.9	43.1	100.0 (65人)
借家	25.0	75.0	100.0 (16人)
全体	50.6	49.4	100.0 (81人)

$$p=0.02 \quad \chi^2=(1)5.2346$$

表 2 6 居住年数5年未満と所有形態と地域への愛着度 (単位%)

居住形態	地域への愛着		全体
	高い	低い	
持ち家	52.2	47.8	100.0 (23人)
借家	41.9	58.1	100.0 (43人)
全体	45.5	54.6	100.0 (66人)

$$p=0.42 \quad \chi^2=(1)0.6429$$

以上の補足仮説 1、2、3 と三重クロスの結果より、「居住年数 20 年以上」の人について推測する。

補足仮説 1 では、「居住年数 20 年未満」の人よりも「居住年数 20 年以上」の人のほうが、地域への愛着が高かった。

補足仮説 2 では、「借家」の人よりも「持ち家」の人のほうが地域への愛着は高かった。

三重クロスにおいて、「居住年数 20 年未満」の人の中でも、「借家」の人よりも「持ち家」の人のほうが地域への愛着が高かった。

補足仮説 3 では、「居住年数 20 年未満」の人の中でも、「居住年数が長い人 (居住年数 5 年以上 20 年未満)」では「借家」の人よりも「持ち家」の人のほうが地域への愛着は高かった。

これらの結果から推測すると、『「居住年数 20 年以上」で「持ち家」の人は、「借家」の人よりも愛着が高い』『「居住年数 20 年以上」で「持ち家」の人は、「居住年数 20 年未満」

の「持ち家」の人よりも愛着が高い』といえるのではないだろうか。

今回、「居住年数 20 年以上」のクロス集計の結果にワーニングが出てしまった原因は、「居住年数 20 年以上」で「借家」の人が 5 人と少な過ぎたことである。居住年数の上限を下げるか、間隔を考慮すればまた違った結果になったのではないかと感じた。

「借家」の人は、どの年代もほとんどの人が集合住宅に住んでいる。同じ建物の中の人と交流はあるかもしれないが、その中に限定されてしまい「地域全体への愛着」という感覚は形成されにくいのではないだろうか。「居住年数 20 年未満」の「借家」の人の愛着の低さは、こうした地域住民という意識を持ちにくい環境に影響されるのではないだろうか。

「5 年未満」ではまだ越してきて日が浅いこともあってか「持ち家」と「借家」に差はなかったが、長く住み続けるうちに「持ち家」の人は隣近所や自治会等で地域住民と交流を深めていくのではないだろうか。

「居住年数が長く、持ち家の人ほど、地域に愛着を感じている」という仮説は、推測ではあるが、ほぼ支持されたといえるだろう。

4. 4 仮説 4 家計の管理者は、経済的メリットを重視してエコバッグを使用する

「家計の管理者」(Q29 を分割) とエコバッグの使用理由 (Q12_2 を分割) の 2 変数間でクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、有意な関連性は認められなかった。

「家計の管理者」が「自分」である人よりも「それ以外」の人のほうが、経済的メリットや環境対策などの“エコバッグ”を使用する意味を重視しているようである。このような結果になった理由のひとつとして、私の経験をふまえて推測すると家計の管理者でない人は買い物に行く際に、「環境のためだから」「ポイントがつくから」といった理由でエコバッグを渡されるからではないだろうか。もうひとつは、家計の管理者が「自分」である人が経済的メリットよりも環境を意識し、買い物などでレジ袋を利用する自分たちが率先して“エコ”バッグを使用することが重要であると考えているのではないだろうか。

家計の管理者か否かにかかわらず、重視するエコバッグの使用理由は、経済的メリットだけではないことがわかった。

家計の管理者	エコバッグの使用理由			計	
	経済的メリット	環境対策	その他		
自分	29.7	45.1	25.2	100.0	(111人)
それ以外	25.7	37.1	37.2	100.0	(70人)
全体	28.2	42.0	29.8	100.0	(181人)
p=n. s. $\chi^2 = (2) 2.9277$					

5. まとめ

まず地域への愛着の項目においてどの項目も「そう思う」「ややそう思う」人が半数程度であることに驚いた。現代の人間関係は希薄化してきていると言われているが、そう感じさせるのはほんの一部程度だろうと考えていたからである。その中でも「地域に愛着を感じている人ほど、ごみ減量行動に取り組む」という第一の仮説の結果を見ると、ごみ減量行動が浸透しないことと、地域への愛着の低さは関連していることがわかった。統計的に有意な結果ではなかったが「Q9_e 不用品リサイクル」については、設問に使用する言葉

の選択に考慮が足りなかったことと、「不要品を人にあげる」といった再使用（リユース）に関する項目であったなら、違う結果が出たのではないかと感じた。

「地域の活動に積極的な人ほど、地域に愛着を感じている」という第二の仮説では、地域の活動そのものへの参加率が高くなかったという単純集計の結果を考慮しても、確かにその中でも積極的に参加する人はより地域に愛着を感じている、という結果がでた。今回の調査票を私の母にも回答してもらったところ、母はパートタイマーとして働いているため地域の活動にはほとんど参加していないが、隣近所との交流は良好で地域への「愛着は高い」と答えた。ひと口に“地域”と言ってももっと範囲を限定できる言葉を使用すれば、より有意義な調査ができたと感じた。

「居住年数が長く、持ち家の人ほど、地域に愛着を感じている」という第三の仮説では、持ち家の人に比べて、借家で居住年数の長い人が非常に少ないという偏りがあったことが影響していると感じた。居住形態や年数によって地域住民と関わる機会の少ない状況が形成され、その結果として、借家の人は持ち家の人に比べて地域にあまり愛着を感じなくなっているのではないだろうか。

「家計の管理者は、経済的メリットを重視してエコバッグを使用する」という第四の仮説では、統計的に有意差は出なかったが、買い物に“エコバッグ”を使う家計の管理者にとって、店のサービスなどは付加価値であることに変わりはないことがわかった。

今回、地域の人間関係とごみ減量行動の関係についての調査を行ったが、居住形態などの「環境」が、地域内での人間関係を築くにあたって大きく影響していることが一番印象に残った。ライフスタイルは多様だが、地域住民としての地域とのかかわり方次第で、ごみ問題一つとっても行動や意識が変わるのだと感じた。

6. 参考文献・URL

鈴木広編, 1978『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会

山本耕平のホームページ (<http://www2u.biglobe.ne.jp/~kouhei-y/haikibutuno-teigi.htm>)
(2009/2/23)

あとがき

今年の就職戦線は未曾有の厳しさになっている。毎年、報告書を作成し始める 1、2 月になると、就職活動と報告書作りとでいっぱいになる学生を何人も見てきたが、今年はより大変だったに違いない。そのような中であって学生は先生方のご指導、ご指摘に何とか応えようと真摯に努め、その結果が本報告書として結実した。

本報告書の成果を教育効果、とりわけ経済産業省が提示している「社会人基礎力」の育成という点からみてみたい。「社会人基礎力」とは、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」を指し、これを構成する 3 つの能力として、「考え抜く力（シンキング）～疑問を持ち、考え抜く力～」「前に踏み出す力（アクション）～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～」「チームで働く力（チームワーク）～多様な人とともに、目標に向けて協力する力～」があげられている。

「考え抜く力」という点では、調査票の作成において訓練されただろう。履修生は、素朴な疑問に対して真摯に向き合い、自分なりの答え（仮説）を見出すために、30 代の主婦ならどう考えるか、50 代のサラリーマンならどう考えるかと考え抜き、それをどのような文言で聞けば誤解がないかを推敲した。「前に踏み出す力」という点では、データの解釈において訓練されただろう。現実感覚に乖離しないように仮説を設定したとはいえ、現実の結果はそれを裏切ったりする。履修生は、仮説どおりにならなかった結果に対して、どうしてそうなったかを解釈し、どうすれば説明したい現象を説明できるのかを、1 度や 2 度の予想外の結果を前にしても、諦めることなく試みた。「チームで働く力」という点では、調査票・報告書の作成において訓練されただろう。調査票の作成は、各人の興味関心、疑問に基づいて行っているが、ひとつの調査票になるために協同してまとめている。それは本報告書でも同様である。これらのことからいえば、本報告書は、調査の専門性もさることながら、社会人としての基礎的な素養をも身につけたことの証左となっているといえる。

マーケティング系の企業に就職したフィールドワークの卒業生に話を聞くと、企業にとって、調査の優先順位はそれほど高くないという。確かに、調査は、利益をもたらす作業というよりは、その確率をあげる作業だといえるかもしれない。とはいえ、調査は、潜在的・顕在的なニーズを把握したり、要因連関を明らかにすることによって、持続的な利益を得る希少な手段であることに変わりはないだろう。社会調査の専門性や社会人の素養を身につけたことに自信を持って、就職戦線を戦い抜き、社会で活躍することを祈っている。

末筆ながら、調査をさせていただくにあたって、本調査にご協力いただいた千葉市各区役所の市民課の皆様、住民基本台帳より選出させていただいた皆様、またインタビューに応じてくださった皆様各位に、心より感謝を申し上げたい。

平成 21 年 3 月

調査助手 本多 敏明
教育助手補 庄司 壮

事例調査

(1) 千葉市環境局

A62055 渋谷 卓磨 A62127 河野 恵

1. テーマ

千葉市環境局はどのような環境対策に取り組んでいるのか。また、環境対策を市民に理解してもらうために広報活動をいかに行っているか。

2. 調査協力者

千葉市環境局 環境管理部 環境総務課職員

千葉市環境局 環境管理部 資源循環推進課職員

千葉市環境局 環境保全部 環境調整課 温暖化対策室職員

3. 調査日時・場所

2008 年 7 月 29 日（火曜日）、午後 1 時～午後 3 時まで、千葉市役所にて行った。

4. 調査方法

自由面接法

5. 知見・考察

<ごみ減量>

2000 年 6 月より施行された循環型社会基本法に示されたように、国はごみの量を減らすこと、資源を循環させることに力を入れている。千葉市では「焼却ごみ 1 / 3 削減計画」を打ち立て、焼却ごみに的を絞ったアプローチを行っている。なぜ、焼却ごみ中心なのだろうか。これは、千葉のごみ処分場が飽和状態に近いことが関係している。ごみ処分場には燃えないごみが集められる。燃えるごみは生活をしていく中でどうしても出るにしろ、燃えないごみの中に燃えるごみが混ざっていたら、焼却されない燃えるごみが増えてしまうことが大きな原因の一つである。これにより新しいごみ処理施設を立てるのではなく、燃えるごみ自体の量を減らすというコンセプトのもと行っているのである。

このほかに、2005 年より事業者や事業所が環境に配慮した活動を行うと市に約束をする、「ちばルール」が作られ、このルールに協定した店舗が協定店となり、マイバックキャンペーンを行っているのだ。これは、マイバックを持って買い物すると、1 回の会計につき 1 個のスタンプがもらえて、5 つたまと豪華賞品があたる抽選に応募することができる。このキャンペーンを通し、環境問題や対策について意識の低かった人が積極的に参加し、他の環境対策にも興味を持ったり、店側の意識改革になったりと、様々なよい事例が報告されている。しかしながら、参加を促す際に豪華賞品を用意したところなど、まだまだ改善の余地はあるだろう。

また、小学 4 年生を対象にごみ分別スクールを実施している。これは現在、年間で 80 校ほど実施している。社会科の授業の一環として行っている学校が多い。分別講習では、プラスチックや古紙などかなり細かなことまで教えるのだそうだ。

<地球温暖化対策>

千葉市では、地球温暖化対策のひとつとして「ちばし環境宣言」を行っている。市民に、Web 上や書面によって「環境にやさしい生活をする」と宣言してもらうもので、市民のライフスタイルを環境に配慮したものにするのを、千葉市民に約束してほしいというコンセプトのもと、環境に配慮した行動を市民に意識づけるものである。現在では約2万5千人の人が宣言している。

さらに、「環境家計簿」といって、各家庭でどれだけのエネルギーを使用したのか、ごみの量はどれだけか、を家計簿のように毎月記録して市に送ることで、統計処理された情報が返信されてくるというものだ。現在約6千世帯が参加しているが、やはり環境対策について意識の高い人でないと積極的には行わないようである。

他にも、「環境アドバイザー派遣制度」というものを実施している。環境アドバイザーとは、千葉市が認定し、環境問題や環境対策の仕組みなどの説明を市民に対して行う専門家のことである。派遣される場所はまちまちで、主に学校や自治体の会議等と呼ばれる。また、今年は洞爺湖サミットの影響もあってか、2008年7月までで例年の倍ほどの要請があるそうだ。

<広報活動>

積極的に取り組んでいる広報活動としては、自治会での説明会があげられる。これは、2007年6月から始まった取り組みで、役員会や清掃活動の際に市の職員が直接対面して資料を渡して説明を行うものである。定期的に行ったり、1日に20カ所まわったりと、かなりの回数をこなす広報をしている。この方法は手間や時間がかかるが、直接顔を見て話すことで他の広報活動よりも多くの効果がある。

さらに、2007年からは「ごみ削減市民会議」というものも行っている。これは、行政が用意した対策だけでは不十分であると判断し、もっと市民に近いところのできる対策を考えようというコンセプトのもと、公募した市民・NPO・事業者などが集まって会議を行うものである。2008年から2009年にかけて、12回ほどの会議を予定している。

他にも事業者向けに古紙分別を広報し、広報の伝わりにくい若者に対しても、サマーソニックなどの野外ロックフェスを通してボランティアと会場付近を掃除し、ごみ分別に関するポスターを貼ったりして、ごみ分別を広報している。

ごみ減量は他の環境問題とは違い、全ての人が直に関わってくるものなので、情報が行き渡らなくてはならない。しかしながら、若者や環境問題に消極的・無関心な人々の層に対する広報活動はまだまだ効果的に働いていないようだ。今後の課題としてもこのことが残ってくるであろう。これについては、先ほども出てきたサマーソニックなどの若者向けイベントでの広報の強化、そしてNPOやマスコミなどの広報活動を利用する、というのも一つの方法であると考える。環境問題はもはや全ての人に関係がある問題なのだ。

（２）H自治会

A62081 長島 瑠美 A62134 名取 真里恵

1. テーマ

テレビのコマーシャルや店のポスターで企業が行っている環境対策を目にすることがある。個人レベルの環境対策、特にごみ問題に関しての対策はどの程度行われているのだろうか。個人に最も近い自治会で行われている地域レベルの環境対策の実態と現状について、聞き取り調査を行った。

2. 調査協力者

H自治会副会長 Mさん（65 歳）

企業に勤めていた当時は地域に全く関心もなく仕事中心だったが、定年後は地域への恩返しに、特に高齢者のために何かしようと思ったことがきっかけで、自治会役員に立候補した。現在は主に治安維持と環境問題（ごみ問題）に積極的に取り組んでいる。

自治会活動以外にも、廃棄物適正化推進委員¹、防犯指導員²、環境シェフ³などの活動も積極的にされている。

3. 調査日時・場所

2008 年 7 月 20 日（日曜日） 稲毛公民館会議室にて実地

4. 調査方法

自由面接法

5. 知見・考察

報告書にまとめるにあたって、ごみ問題についてお話いただいたことを特記する。

1 月 18 日、分別のされていないごみがあったと業者から環境局職員さんに連絡が入り、Mさんに通達が入った。対策を行うため、環境局資源循環推進課職員さんの協力を得てごみの説明会やごみ出しルールパンフレットを作成、配布を行った。

1 月 21 日 公民館でごみに関する説明会を行う

1 月 28 日 環境局資源循環推進課職員さんらと各家庭に説明しながらパンフレットの配布、ポスティング

1 月 31 日 2 回目のポスティング（アパートへも）

2 月 1 日 環境局資源循環推進課職員さん立会いの下集積所へそれでも違反はあった

4 月 14 日～4 月 17 日 環境事業所職員さんと自治会で 4 日間夜間監視を実施

5 月 25 日 環境保全委員男 1 名女 1 名で朝ごみを捨てに来る人にパンフレットの説明

¹ 千葉市廃棄物減量等推進員の委嘱により平成 5 年に設置。廃棄物の適正処理及び再利用の普及、啓発のために活動している。

² 地域の治安を守るために、県警察から委嘱されたメンバーで組織されたボランティア団体の成員。

³ 千葉市環境保全部環境調整課の温暖化防止企画の一つ。ちば・エコファミリーとも呼ばれている。

一ヵ月ごとのガソリン・水道・電気・ガス・石油の使用量を環境家計簿に記入する。はがきでは三ヶ月に 1 回、市に報告する（水道のみ二ヶ月に 1 回）H自治会員でも計 3 名が参加している。

また 11 月 7 日にMさんが集積所にごみの出し方や収集日が提示してある大きなプレート建て、呼びかけを行ったことで以前よりも違反者が減り、集積所の環境は改善された。プレートには回収日、粗大ごみ回収場所と警察の電話番号などが書いてあり、こうした看板を自主的に設置しているのはH自治会だけである。

しかし違反者は未だにいます。監視の終わった深夜のうちに捨ててあったり、分別のされていないものが捨てられていることがある。粗大ごみの不法投棄には張り紙をして自主回収するように呼びかけているが、回収していく人はなかなかおらず（他の町内に住む人が車で捨てに来ると思われる）、最終的に自治会が環境事業所へ連絡して回収してもらう。片付けなければ他にも捨てる人が出てしまう為、放置はできない。捨てた人の捨て得となっているのが現状である。H自治会の集積所は一箇所しかないため、集積所を増やして欲しいという要望もあるが、自宅の近くに集積所を設置されるのは住民も困るし、コンテナを設置するほどの予算はない。ごみステーションを増やすスペースもなく、ごみ収集車はいってこられないなどの問題もある。

Mさんは、こうした違反者の多くはアパートに住む一人暮らしの男性ではないかと推測している。以前、アパートに住む人が空き缶を灰皿がわりにしてそのまま捨てている問題について、自治会からアパート経営者等に連絡して呼びかけてもらったが、改善されなかった。なかには文句を言う人もおり、怖くて対処しきれずにいた。自治会員同士や地域住民と顔見知りであったなら、違反をしてもし咎められたら気まづくなり繰り返さなくなるが、アパートの住民はそうした関わりがない。人間関係の希薄化によるモラルの問題であると牧野さんは感じている。

Mさんのお話を聞いて、自治会の活動というよりも「H自治会副会長のMさん」の活動がとても影響力があるように感じた。Mさんは公園の落ち葉拾いなども行っており、最初は一人で行っていても、次第に通るかかった人が集まって協力してくれるという。地域と人間関係を大切にするMさんだからこそ、プレートの設置やパンフレットのポスティングのような積極的な働きかけができ、それを見た人に効果があったのではないだろうか。

Mさんが懸念しているアパートの住人の実態は把握できておらず、加入の義務もない為、自治会としても直接会う機会もない。特に若い人や一人暮らしの人は、Mさんはもちろん、他の地域住民との接点は少ないのかもしれない。Mさんが「人間関係の希薄化によるモラルの問題」と感じているように、周囲とのコミュニケーションの機会がなくなると、自分本位になりがちになってしまうのではないだろうか。

地域レベルでのごみ問題は市や住民の協力によって行われているが、すべての人に浸透、実行されることは難しい現状があることが分かった。

(3) 環境 NPO「環境ネット」

A62070 岡崎 亜季 A62126 木戸口 薫

1. テーマ

環境問題や市民のごみ減量行動への啓発に取り組んでいる千葉市の環境 NPO がどのような活動を行っているのか、現在の千葉市の取り組みをどのようにみているのかを知る。

2. 調査協力者

環境ネット副理事長

環境ネット事務局

3. 調査日時・場所

2008 年 9 月 18 日（木曜日）15:30～17:30、「環境ネット」事務所

4. 調査方法

自由面接法

5. 知見

まず、環境ネットの設立経緯について説明する。2002 年、千葉市環境局が環境に対する意識の高い市民が集まった懇談会において、千葉市一般廃棄物（ごみ）処理基本計画の改正に盛り込むべき内容について、市民の立場から提言をまとめることが求められた。この懇談会で提言されたのが、①エコショップの基準作り、②ごみ処理費用負担の適正化、③ごみ処理に対する意識改革と情報基地づくりの 3 つであった。このうち、①と②は千葉市が行うことができるだろうが、③は行政には困難であり、民間主導で行うべきという考えから市民へ呼びかけを行い 2002 年 6 月に「環境ネット準備会」が結成され、その後「環境ネット推進協議会」（同年）、NPO 法人「環境ネット」（2004 年 5 月）へと展開した。

環境ネットは、数ある NPO 法人をまとめて情報発信をするための千葉市の受け皿になることを目的として設立された。しかし、現在の活動は、本来の主旨とはずれてきているという。

現在、環境ネットの会員数は、個人会員 33 人、団体会員 3 団体であり、個人会員の半数が他の様々な NPO 法人にも籍を持って活動している。年齢は 60 代が多く、学生や主婦の方も少数ながら参加している。男女比は同じくらいである。年会費は個人会員が 2,000 円、学生 1,000 円、団体 10,000 円である。

現在、環境ネットが取り組んでいる主な活動は、①生ごみ資源化アドバイザー、②バスツアー、③分別スクール、④機関紙「環境ネット通信」の配布である。①は生ごみ処理機の利用・管理に関する助言や技術取得、生ごみの減量・資源化に関する学習会などを行うアドバイザーを確保することが目的であり、これまでに 3 回開設された。②は調査日の時点では 2008 年 11 月 13 日に市川廃プラ処理工場を見学する予定ということだった。③は千葉市の小学 4 年生を対象としたもので、環境ネットと環境事業所が一緒に行っている。2008 年は 80 校で行い、2009 年は市内の小学校全校（126 校）で行う予定である。1 校に 2 人以上で伺い、環境ネットからはこれまで 12～13 人が講師として出向いている。④は

環境ネットを PR する目的で作成している。

過去に環境ネットが取り組んだこととして、ごみの「ポイ捨て」の現状と対策調査、千葉市中央公園の利用者に対するアンケート調査の実施、「中央公園」「富士見通り」「千葉銀座商店街」でポイ捨てごみの実態調査の実施などがある。

千葉市の取り組みについては、千葉市はごみ処理について最先端とはいえず、遅れていると感じている。それは他の市町村と比べても遅れている。また、市や環境事務局が作成するパンフレットは完璧に作ろうとしすぎている。文字が細かすぎて高齢者には読みにくい。1 つのパンフレットに複数の電話番号を載せると市民はどこにかければ良いか迷うので、1 つにしたほうが良いと考えている。千葉市で作成された資料は、1 度しか配布されず、あとは取りに行かなければいけないので不便だということなど環境 NPO からみた改善点も挙げられた。

環境ネットは、本来目指している環境情報発信地としての役割の実現はまだ十分には達成されていないものの、小学生対象の分別スクールなど若い人たちがごみ問題を学習する機会を与えている。2008 年には 80 校で行っていたものが 2009 年には市内の小学校 126 校全校で行われることになったことから少しずつではあるが目的達成へと近づいていると感じた。

単 純 集 計 表

Q1 居住区	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 中央区	111	43.02	111	43.02
2 若葉区	76	29.46	187	72.48
3 緑区	67	25.97	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q2 性別	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 男性	95	36.82	95	36.82
2 女性	161	62.40	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q3 年齢	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
20歳代	26	10.08	26	10.08
30歳代	48	18.60	74	28.68
40歳代	57	22.10	131	50.78
50歳代	51	19.76	182	70.54
60歳代	72	27.91	254	98.45
DK/NA	4	1.55	258	100.00
平均値 = 48.37 (歳)				
Q4_a 環境問題の不安感 地球温暖化	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 不安である	176	68.22	176	68.22
2 やや不安である	62	24.03	238	92.25
3 あまり不安ではない	14	5.43	252	97.67
4 不安ではない	3	1.16	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q4_b 環境問題の不安感 大気汚染	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 不安である	130	50.39	130	50.39
2 やや不安である	106	41.09	236	91.47
3 あまり不安ではない	15	5.81	251	97.29
4 不安ではない	3	1.16	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q4_c 環境問題の不安感 食糧危機	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 不安である	125	48.45	125	48.45
2 やや不安である	99	38.37	224	86.82
3 あまり不安ではない	27	10.47	251	97.29
4 不安ではない	4	1.55	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q4_d 環境問題の不安 食品の安全	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 不安である	151	58.53	151	58.53
2 やや不安である	85	32.95	236	91.47
3 あまり不安ではない	18	6.98	254	98.45
4 不安ではない	2	0.78	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q4_e 環境問題の不安感 ごみ問題	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 不安である	89	34.50	89	34.50
2 やや不安である	137	53.10	226	87.60
3 あまり不安ではない	22	8.53	248	96.12
4 不安ではない	6	2.33	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q5_1 環境対策の認知度 マイ箸	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	19	7.36	19	7.36
1 聞いたことがある	237	91.86	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_2 環境対策の認知度 キャンドルナイト	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	126	48.84	126	48.84
1 聞いたことがある	130	50.39	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_3 環境対策の認知度 エコ替え	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	114	44.19	114	44.19
1 聞いたことがある	142	55.04	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_4 環境対策の認知度 カーボンオフセット	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	187	72.48	187	72.48
1 聞いたことがある	69	26.74	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_5 環境対策の認知度 うちエコ！	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	160	62.02	160	62.02
1 聞いたことがある	96	37.21	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_6 環境対策の認知度 ちばルール	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	240	93.02	240	93.02
1 聞いたことがある	16	6.20	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_7 環境対策の認知度 ちばし環境宣言	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 聞いたことがない	200	77.52	200	77.52
1 聞いたことがある	56	21.71	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q5_8 聞いたことのある環境対策 どれも聞いたことがない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 どれか聞いたことはある	245	94.96	245	94.96
1 どれも聞いたことがない	11	4.26	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00

Q6_1 環境対策の実行度 マイ箸の携帯	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	196	75.97	196	75.97
1 実行したことがある	58	22.48	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_2 環境対策の実行度 キャンドルナイトへの参加	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	246	95.35	246	95.35
1 実行したことがある	8	3.10	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_3 環境対策の実行度 エコ替えの実行	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	206	79.84	206	79.84
1 実行したことがある	48	18.60	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_4 環境対策の実行度 カーボンオフセット	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	246	95.35	246	95.35
1 実行したことがある	8	3.10	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_5 環境対策の実行度 エコツアーへの参加	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	247	95.74	247	95.74
1 実行したことがある	7	2.71	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_6 環境対策の実行度 オーガニックコットン製の服購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	221	85.66	221	85.66
1 実行したことがある	33	12.79	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_7 環境対策の実行度 クールビズ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 実行したことがない	124	48.06	124	48.06
1 実行したことがある	130	50.39	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q6_8 環境対策の実行度 どれも実行したことがない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 どれか実行したことがある	175	67.83	175	67.83
1 どれも実行したことがない	79	30.62	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q7_a 言葉の意味や内容の情報収入経路 クールビズ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 テレビ番組・CM	179	69.38	179	69.38
2 新聞	28	10.85	207	80.23
3 雑誌	—	0.00	207	80.23
4 インターネット	1	0.39	208	80.62
5 市や県の広報	1	0.39	209	81.01
6 ポスター・電車内の広告	—	0.00	209	81.01
7 家族・地域の人から	3	1.16	212	82.17
8 友人・知人から	1	0.39	213	82.56
9 この言葉を知らない	7	2.71	220	85.27
10 複数回答	35	13.57	255	98.84
11 その他	1	0.39	256	99.22
12 なぜ知ったか覚えていない	—	0.00	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q7_b 言葉の意味や内容の情報収入経路 エコバッグ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 テレビ番組・CM	139	53.88	139	53.88
2 新聞	17	6.59	156	60.47
3 雑誌	7	2.71	163	63.18
4 インターネット	1	0.39	164	63.57
5 市や県の広報	10	3.88	174	67.44
6 ポスター・電車内の広告	6	2.33	180	69.77
7 家族・地域の人から	24	9.30	204	79.07
8 友人・知人から	3	1.16	207	80.23
9 この言葉を知らない	7	2.71	214	82.95
10 複数回答	40	15.50	254	98.45
11 その他	1	0.39	255	98.84
12 なぜ知ったか覚えていない	—	0.00	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q7_c 言葉の意味や内容の情報収入経路 キャンドルナイト	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 テレビ番組・CM	73	28.29	73	28.29
2 新聞	16	6.20	89	34.50
3 雑誌	10	3.88	99	38.37
4 インターネット	4	1.55	103	39.92
5 市や県の広報	3	1.16	106	41.09
6 ポスター・電車内の広告	1	0.39	107	41.47
7 家族・地域の人から	4	1.55	111	43.02
8 友人・知人から	6	2.33	117	45.35
9 この言葉を知らない	117	45.35	234	90.70
10 複数回答	8	3.10	242	93.80
11 その他	—	0.00	244	93.80
12 なぜ知ったか覚えていない	2	0.78	244	94.57
99 DK/NA	14	5.43	258	100.00
Q8_a 環境対策の理解度 エコバッグがなぜ「エコ」か	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 わかっている	169	65.50	169	65.50
2 ある程度わかっている	55	21.32	224	86.82
3 少しはわかっている	16	6.20	240	93.02
4 わからない	15	5.81	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q8_b 環境対策の理解度 「3R」の意味	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 わかっている	48	18.60	48	18.60
2 ある程度わかっている	25	9.69	73	28.29
3 少しはわかっている	28	10.85	101	39.15
4 わからない	148	57.36	249	96.51
99 DK/NA	9	3.49	258	100.00

Q8_c 環境対策の理解度 地球温暖化のしくみ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 わかっている	83	32.17	83	32.17
2 ある程度わかっている	111	43.02	194	75.19
3 少しはわかっている	47	18.22	241	93.41
4 わからない	13	5.04	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q8_d 環境対策の理解度 チームマイナス6%	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 わかっている	32	12.40	32	12.40
2 ある程度わかっている	34	13.18	66	25.58
3 少しはわかっている	39	15.12	105	40.70
4 わからない	144	55.81	249	96.51
99 DK/NA	9	3.49	258	100.00
Q9_a 普段行っているエコ行動の頻度 資源ごみ分別	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	244	94.57	244	94.57
2 とときどき行う	8	3.10	252	97.67
3 あまり行わない	3	1.16	255	98.84
4 まったく行わない	1	0.39	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_b 普段行っているエコ行動の頻度 地域の古紙集団回収	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	197	76.36	197	76.36
2 とときどき行う	23	8.91	220	85.27
3 あまり行わない	19	7.36	239	92.64
4 まったく行わない	17	6.59	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_c 普段行っているエコ行動の頻度 トレ、紙パック回収ボックス	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	81	31.40	81	31.40
2 とときどき行う	31	12.02	112	43.41
3 あまり行わない	52	20.16	164	63.57
4 まったく行わない	89	34.50	253	98.06
99 DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q9_d 普段行っているエコ行動の頻度 乾電池回収ボックス	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	110	42.64	110	42.64
2 とときどき行う	44	17.05	154	59.69
3 あまり行わない	39	15.12	193	74.81
4 まったく行わない	58	22.48	251	97.29
99 DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q9_e 普段行っているエコ行動の頻度 不要品をリサイクル	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	42	16.28	42	16.28
2 とときどき行う	101	39.15	143	55.43
3 あまり行わない	63	24.42	206	79.84
4 まったく行わない	48	18.60	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q9_f 普段行っているエコ行動の頻度 修理・補修して使用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	76	29.46	76	29.46
2 とときどき行う	125	48.45	201	77.91
3 あまり行わない	38	14.73	239	92.64
4 まったく行わない	16	6.20	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q9_g 普段行っているエコ行動の頻度 紙の裏面をメモ用紙として再利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	104	40.31	104	40.31
2 とときどき行う	113	43.80	217	84.11
3 あまり行わない	29	11.24	246	95.35
4 まったく行わない	10	3.88	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_h 普段行っているエコ行動の頻度 過剰包装を断る	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	69	26.74	69	26.74
2 とときどき行う	117	45.35	186	72.09
3 あまり行わない	44	17.05	230	89.15
4 まったく行わない	24	9.30	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q9_i 普段行っているエコ行動の頻度 水筒（マイボトル）持参	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	76	29.46	76	29.46
2 とときどき行う	68	26.36	144	55.81
3 あまり行わない	38	14.73	182	70.54
4 まったく行わない	71	27.52	253	98.06
99 DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q9_j 普段行っているエコ行動の頻度 部屋の電気をこまめに消す	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	152	58.91	152	58.91
2 とときどき行う	82	31.78	234	90.70
3 あまり行わない	19	7.36	253	98.06
4 まったく行わない	3	1.16	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_k 普段行っているエコ行動の頻度 冷暖房を控えめに設定する	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	146	56.59	146	56.59
2 とときどき行う	86	33.33	232	89.92
3 あまり行わない	17	6.59	249	96.51
4 まったく行わない	6	2.33	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00

Q9_l 普段行っているエコ行動の頻度 使わない家電製品の主電源を切る	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	109	42.25	109	42.25
2 とときき行う	66	25.58	175	67.83
3 あまり行わない	60	23.26	235	91.09
4 まったく行わない	21	8.14	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_m 普段行っているエコ行動の頻度 水を出しっぱなしにしない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	144	55.81	144	55.81
2 とときき行う	81	31.40	225	87.21
3 あまり行わない	25	9.69	250	96.90
4 まったく行わない	4	1.55	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q9_n 普段行っているエコ行動の頻度 使用時以外シャワーの水を止める	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	166	64.34	166	64.34
2 とときき行う	45	17.44	211	81.78
3 あまり行わない	32	12.40	243	94.19
4 まったく行わない	13	5.04	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q9_o 普段行っているエコ行動の頻度 風呂の残り湯を洗濯に使う	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	89	34.50	89	34.50
2 とときき行う	27	10.47	116	44.96
3 あまり行わない	47	18.22	163	63.18
4 まったく行わない	92	35.66	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q9_p 普段行っているエコ行動の頻度 自転車・徒歩・交通機関を利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行う	95	36.82	95	36.82
2 とときき行う	95	36.82	190	73.64
3 あまり行わない	46	17.83	236	91.47
4 まったく行わない	20	7.75	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_a 普段行うごみ減量行動の頻度 リサイクルショップ利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	26	10.08	26	10.08
2 ややあてはまる	58	22.48	84	32.56
3 あまりあてはまらない	84	32.56	168	65.12
4 あてはまらない	87	33.72	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q10_b 普段行うごみ減量行動の頻度 フリーマーケット参加	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	8	3.10	8	3.10
2 ややあてはまる	25	9.69	33	12.79
3 あまりあてはまらない	66	25.58	99	38.37
4 あてはまらない	157	60.85	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_c 普段行うごみ減量行動の頻度 レンタルショップ利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	53	20.54	53	20.54
2 ややあてはまる	78	30.23	131	50.78
3 あまりあてはまらない	49	18.99	180	69.77
4 あてはまらない	72	27.91	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q10_d 普段行うごみ減量行動の頻度 割引クーポンなど利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	130	50.39	130	50.39
2 ややあてはまる	81	31.40	211	81.78
3 あまりあてはまらない	21	8.14	232	89.92
4 あてはまらない	25	9.69	257	99.61
99 DK/NA	1	0.39	258	100.00
Q10_e 普段行うごみ減量行動の頻度 質よりも量を重視して購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	20	7.75	20	7.75
2 ややあてはまる	56	21.71	76	29.46
3 あまりあてはまらない	97	37.60	173	67.05
4 あてはまらない	79	30.62	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q10_f 普段行うごみ減量行動の頻度 類似商品は安いものを選ぶ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	82	31.78	82	31.78
2 ややあてはまる	96	37.21	178	68.99
3 あまりあてはまらない	57	22.09	235	91.09
4 あてはまらない	19	7.36	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q10_g 普段行うごみ減量行動の頻度 詰め替え商品を選んで購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	127	49.22	127	49.22
2 ややあてはまる	96	37.21	223	86.43
3 あまりあてはまらない	22	8.53	245	94.96
4 あてはまらない	7	2.71	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q10_h 普段行うごみ減量行動の頻度 使い捨てではない商品を購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	96	37.21	96	37.21
2 ややあてはまる	108	41.86	204	79.07
3 あまりあてはまらない	41	15.89	245	94.96
4 あてはまらない	7	2.71	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q10_i 普段行うごみ減量行動の頻度 省エネ効果の高い家電製品購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	117	45.35	117	45.35
2 ややあてはまる	94	36.43	211	81.78
3 あまりあてはまらない	35	13.57	246	95.35
4 あてはまらない	10	3.88	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00

Q10_j 普段行うごみ減量行動の頻度 居住地の栽培・生産食材を購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	39	15.12	39	15.12
2 ややあてはまる	106	41.09	145	56.20
3 あまりあてはまらない	86	33.33	231	89.53
4 あてはまらない	25	9.69	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_k 普段行うごみ減量行動の頻度 エコマークのついた商品購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	25	9.69	25	9.69
2 ややあてはまる	96	37.21	121	46.90
3 あまりあてはまらない	99	38.37	220	85.27
4 あてはまらない	36	13.95	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_l 普段行うごみ減量行動の頻度 再生紙使用製品を購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	34	13.18	34	13.18
2 ややあてはまる	107	41.47	141	54.65
3 あまりあてはまらない	88	34.11	229	88.76
4 あてはまらない	27	10.47	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_m 普段行うごみ減量行動の頻度 物をなるべく捨てず長く使う	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	116	44.96	116	44.96
2 ややあてはまる	113	43.80	229	88.76
3 あまりあてはまらない	23	8.91	252	97.67
4 あてはまらない	3	1.16	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q10_n 普段行うごみ減量行動の頻度 人に譲る、お下がりをもらう	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	41	15.89	41	15.89
2 ややあてはまる	60	23.26	101	39.15
3 あまりあてはまらない	97	37.60	198	76.74
4 あてはまらない	56	21.71	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q10_o 普段行うごみ減量行動の頻度 無駄なものは購入しない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	80	31.01	80	31.01
2 ややあてはまる	123	47.67	203	78.68
3 あまりあてはまらない	50	19.38	253	98.06
4 あてはまらない	3	1.16	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q10_p 普段行うごみ減量行動の頻度 中古品でも気にせず購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 あてはまる	43	16.67	43	16.67
2 ややあてはまる	70	27.13	113	43.80
3 あまりあてはまらない	93	36.05	206	79.84
4 あてはまらない	48	18.60	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q11_1 家庭のエコ行動 水道に節水こまを設置	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	200	77.52	200	77.52
1 あてはまる	55	21.32	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q11_2 家庭のエコ行動 家庭で生ごみ処理	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	230	89.15	230	89.15
1 あてはまる	25	9.69	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q11_3 家庭のエコ行動 自宅に太陽光発電機を設置	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	248	96.12	248	96.12
1 あてはまる	7	2.71	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q11_4 家庭のエコ行動 どれも行っていない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 どれか1は行っている	77	29.84	77	29.84
1 どれも行っていない	178	68.99	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q12 エコバッグ（買い物袋）の所持	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 エコバッグを購入、またはもらった	150	58.14	150	58.14
2 以前から持っている	30	11.63	180	69.77
3 持っていない	59	22.87	239	92.64
4 購入かももらったかは不明だが持っている	13	5.04	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q12_1 エコバッグの使用頻度	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも持っていく	91	35.27	91	35.27
2 とときどき持っていく	71	27.52	162	62.79
3 あまり持っていない	20	7.75	182	70.54
4 持っていたことはない	10	3.88	192	74.42
88 非該当	59	22.87	251	97.29
99 DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q12_2 エコバッグの使用動機	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 レジ袋が有料化された	14	5.43	14	5.43
2 ポイントなどサービスを受けられる	39	15.12	53	20.54
3 環境に良い	77	29.84	130	50.39
4 ブランドやデザインが好き	6	2.33	136	52.71
5 流行している	1	0.39	137	53.10
6 もらったものだから	25	9.69	162	62.79
7 国や市が呼びかけている	3	1.16	165	63.95
8 その他	7	2.71	172	66.67
9 理由は複数ある	12	4.65	184	71.32
88 非該当	59	22.87	243	94.19
99 DK/NA	15	5.81	258	100.00

Q13_a 2008年に行った環境対策 エココン28度設定	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 今年初めて28度設定にした	40	15.50	40	15.50
2 以前から28度設定にしていた	85	32.95	125	48.45
3 以前はしていたが今年はしなかった	17	6.59	142	55.04
4 意識したことはない	66	25.58	208	80.62
5 エココンは使っていない	30	11.63	238	92.25
99 DK/NA	20	7.75	258	100.00
Q13_b 2008年に行った環境対策 エコドライブ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 今年から意識するようになった	39	15.12	39	15.12
2 以前から意識していた	80	31.01	119	46.12
3 以前はしていたが今年はしなかった	1	0.39	120	46.51
4 意識したことはない	59	22.87	179	69.38
5 車は使っていない	64	24.81	243	94.19
99 DK/NA	15	5.81	258	100.00
Q13_c 2008年に行った環境対策 環境家計簿	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 今年からつけ始めた	1	0.39	1	0.39
2 以前からつけていた	3	1.16	4	1.55
3 以前はつけていたが今年はつけなかった	3	1.16	7	2.71
4 知っているが、つけたことはない	69	26.74	76	29.46
5 環境家計簿を知らない	169	65.50	245	94.96
99 DK/NA	13	5.04	258	100.00
Q14 「エコ」という言葉をよく目に するテレビ番組	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 報道番組・ニュース解説	94	36.43	94	36.43
2 情報番組	48	18.60	142	55.04
3 スポーツ番組	—	0.00	142	55.04
4 ドキュメンタリー番組	8	3.10	150	58.14
5 娯楽番組	1	0.39	151	58.53
6 テレビCM	84	32.56	235	91.09
7 テレビは見ない	5	1.94	240	93.02
99 DK/NA	18	6.98	258	100.00
Q15_1 日常生活での流れやすさ テレビCM商品を度々購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	161	62.40	161	62.40
1 あてはまる	95	36.82	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_2 日常生活での流れやすさ 雑誌等で流行物をチェック	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	211	81.78	211	81.78
1 あてはまる	45	17.44	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_3 日常生活での流れやすさ 新商品が出たらつい購入	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	230	89.15	230	89.15
1 あてはまる	26	10.08	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_4 日常生活での流れやすさ 情報番組の商品や行動を試す	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	187	72.48	187	72.48
1 あてはまる	69	26.74	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_5 日常生活での流れやすさ 衝動買いをよくしてしまう	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	208	80.62	208	80.62
1 あてはまる	48	18.60	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_6 日常生活での流れやすさ 「限定」商品を購入してしまう	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	178	68.99	178	68.99
1 あてはまる	78	30.23	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_7 日常生活での流れやすさ 友人などから勧められたら試す	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	216	83.72	216	83.72
1 あてはまる	40	15.50	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q15_8 日常生活での流れやすさ どれもあてはまらない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 どれかあてはまる	175	67.83	176	67.83
1 どれもあてはまらない	81	31.40	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q16 千葉市の環境政策の認知・理解度 「消却ごみ1/3削減キャンペーン」	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 内容を理解している	32	12.40	32	12.40
2 聞いたことがある	105	40.70	137	53.10
3 知らない	120	46.51	257	99.61
99 DK/NA	1	0.39	258	100.00
Q17 千葉市の環境政策の認知・理解度 「マイバッグキャンペーン」	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 内容を理解している	31	12.02	31	12.02
2 聞いたことがある	57	22.09	88	34.11
3 知らない	168	65.12	256	99.22
99 DK/NA	2	0.78	258	100.00

Q18_a	地域への愛着 気軽に挨拶しあえる	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	73	28.29	73	28.29
2	ややそう思う	92	35.66	165	63.95
3	あまりそう思わない	57	22.09	222	86.05
4	そう思わない	34	13.18	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q18_b	地域への愛着 互いに協力しあえる	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	37	14.34	37	14.34
2	ややそう思う	86	33.33	123	47.67
3	あまりそう思わない	89	34.50	212	82.17
4	そう思わない	42	16.28	254	98.45
99	DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q18_c	地域への愛着 地域の悪口に腹が立つ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	38	14.73	38	14.73
2	ややそう思う	87	33.72	125	48.45
3	あまりそう思わない	87	33.72	212	82.17
4	そう思わない	40	15.50	252	97.67
99	DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q18_d	地域への愛着 この地域に住んでいたい	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	84	32.56	84	32.56
2	ややそう思う	99	38.37	183	70.93
3	あまりそう思わない	58	22.48	241	93.41
4	そう思わない	16	6.20	257	99.61
99	DK/NA	1	0.39	258	100.00
Q18_e	地域への愛着 地域の役に立つことをしたい	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	46	17.83	46	17.83
2	ややそう思う	131	50.78	177	68.60
3	あまりそう思わない	62	24.03	239	92.64
4	そう思わない	17	6.59	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q18_f	地域への愛着 自分の「まち」に帰ったと安心	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	101	39.15	101	39.15
2	ややそう思う	101	39.15	202	78.29
3	あまりそう思わない	39	15.12	241	93.41
4	そう思わない	15	5.81	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q19_a	地域活動への参加頻度 環境保全（ごみ拾いなど）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	50	19.38	50	19.38
2	よくしている	52	20.16	102	39.53
3	あまりしていない	46	17.83	148	57.36
4	全くしていない	41	15.89	189	73.26
5	あてはまらない	64	24.81	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q19_b	地域活動への参加頻度 地域行事（祭り、運動会など）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	25	9.69	25	9.69
2	よくしている	45	17.44	70	27.13
3	あまりしていない	65	25.19	135	52.33
4	全くしていない	64	24.81	199	77.13
5	あてはまらない	55	21.32	254	98.45
99	DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q19_c	地域活動への参加頻度 教育・文化（子供会、バザーなど）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	11	4.26	11	4.26
2	よくしている	29	11.24	40	15.50
3	あまりしていない	54	20.93	94	36.43
4	全くしていない	73	28.29	167	64.73
5	あてはまらない	86	33.33	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q19_d	地域活動への参加頻度 防犯・防災（パトロールなど）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	8	3.10	8	3.10
2	よくしている	34	13.18	42	16.28
3	あまりしていない	72	27.91	114	44.19
4	全くしていない	65	25.19	179	69.38
5	あてはまらない	74	28.68	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q19_e	地域活動への参加頻度 自治会運営（自治会役員など）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	19	7.36	19	7.36
2	よくしている	43	16.67	62	24.03
3	あまりしていない	63	24.42	125	48.45
4	全くしていない	61	23.64	186	72.09
5	あてはまらない	66	25.58	252	97.67
99	DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q19_f	地域活動への参加頻度 高齢者・障がい者支援	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	いつもしている	5	1.94	5	1.94
2	よくしている	11	4.26	16	6.20
3	あまりしていない	55	21.32	71	27.52
4	全くしていない	88	34.11	159	61.63
5	あてはまらない	96	37.21	255	98.84
99	DK/NA	3	1.16	258	100.00

Q20_a	ごみ減量行動の手間や時間 古紙集団回収	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	62	24.03	62	24.03
2	ややそう思う	48	18.60	110	42.64
3	あまりそう思わない	72	27.91	182	70.54
4	そう思わない	73	28.29	255	98.84
99	DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q20_b	ごみ減量行動の手間や時間 修理・補修して使用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	65	25.19	65	25.19
2	ややそう思う	98	37.98	163	63.18
3	あまりそう思わない	59	22.87	222	86.05
4	そう思わない	34	13.18	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q20_c	ごみ減量行動の手間や時間 家庭で生ごみを処理	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	75	29.07	75	29.07
2	ややそう思う	93	36.05	168	65.12
3	あまりそう思わない	56	21.71	224	86.82
4	そう思わない	29	11.24	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q20_d	ごみ減量行動の手間や時間 紙の裏面をメモ用紙として利用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	41	15.89	41	15.89
2	ややそう思う	49	18.99	90	34.88
3	あまりそう思わない	67	25.97	157	60.85
4	そう思わない	100	38.76	257	99.61
99	DK/NA	1	0.39	258	100.00
Q20_e	ごみ減量行動の手間や時間 過剰包装を断る	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	35	13.57	35	13.57
2	ややそう思う	53	20.54	88	34.11
3	あまりそう思わない	62	24.03	150	58.14
4	そう思わない	105	40.70	255	98.84
99	DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q20_f	ごみ減量行動の手間や時間 水筒（マイボトル）持参	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	41	15.89	41	15.89
2	ややそう思う	65	25.19	106	41.09
3	あまりそう思わない	72	27.91	178	68.99
4	そう思わない	78	30.23	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q20_g	ごみ減量行動の手間や時間 トレ、紙バック回収ボックス	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	65	25.19	65	25.19
2	ややそう思う	96	37.21	161	62.40
3	あまりそう思わない	52	20.16	213	82.56
4	そう思わない	43	16.67	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q20_h	ごみ減量行動の手間や時間 乾電池回収ボックス	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	69	26.74	69	26.74
2	ややそう思う	80	31.01	149	57.75
3	あまりそう思わない	53	20.54	202	78.29
4	そう思わない	52	20.16	254	98.45
99	DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q20_i	ごみ減量行動の手間や時間 資源ごみ分別	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	61	23.64	61	23.64
2	ややそう思う	53	20.54	114	44.19
3	あまりそう思わない	58	22.48	172	66.67
4	そう思わない	84	32.56	256	99.22
99	DK/NA	2	0.78	258	100.00
Q21_1	身の回りの人のエコ行動 家族は節電・節水する	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	74	28.68	74	28.68
1	あてはまる	179	69.38	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_2	身の回りの人のエコ行動 家族はごみ減量に積極的	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	183	70.93	183	70.93
1	あてはまる	70	27.13	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_3	身の回りの人のエコ行動 近隣の人は資源ごみ分別する	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	103	39.92	103	39.92
1	あてはまる	150	58.14	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_4	身の回りの人のエコ行動 親しい友人がフリーマーケットに参加	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	225	87.21	225	87.21
1	あてはまる	28	10.85	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_5	身の回りの人のエコ行動 親しい友人がエコバッグ使用	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	168	65.12	168	65.12
1	あてはまる	85	32.95	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_6	身の回りの人のエコ行動 職場は節電に積極的	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0	あてはまらない	173	67.05	173	67.05
1	あてはまる	80	31.01	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00

Q21_7 身の回りの人のエコ行動 職場はごみ減量に積極的	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 あてはまらない	206	79.84	206	79.84
1 あてはまる	47	18.22	253	98.06
99 DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q21_8 身の回りの人のエコ行動 どれもあてはまらない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 どれかあてはまる	237	91.86	237	91.86
1 どれもあてはまらない	16	6.20	253	98.06
99 DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q22_a 中学生時代のしつけ 物を粗末にしない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 よく注意された	135	52.33	135	52.33
2 ときどき注意された	82	31.78	217	84.11
3 注意されなかった	34	13.18	251	97.29
99 DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q22_b 中学生時代のしつけ 電気をつけっぱなしにしない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 よく注意された	130	50.39	130	50.39
2 ときどき注意された	90	34.88	220	85.27
3 注意されなかった	27	10.47	247	95.74
99 DK/NA	11	4.26	258	100.00
Q22_c 中学生時代のしつけ 水を出しっぱなしにしない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 よく注意された	123	47.67	123	47.67
2 ときどき注意された	92	35.66	215	83.33
3 注意されなかった	34	13.18	249	96.51
99 DK/NA	9	3.49	258	100.00
Q23_a 中学生時代のエコ行動 修理して使う	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行っていた	86	33.33	86	33.33
2 時々行っていた	104	40.31	190	73.64
3 あまり行っていなかった	46	17.83	236	91.47
4 行っていなかった	16	6.20	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q23_b 中学生時代のエコ行動 電気をこまめに消す	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行っていた	110	42.64	110	42.64
2 時々行っていた	80	31.01	190	73.64
3 あまり行っていなかった	51	19.77	241	93.41
4 行っていなかった	12	4.65	253	98.06
99 DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q23_c 中学生時代のエコ行動 水を出しっぱなしにしない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 いつも行っていた	136	52.71	136	52.71
2 時々行っていた	72	27.91	208	80.62
3 あまり行っていなかった	33	12.79	241	93.41
4 行っていなかった	13	5.04	254	98.45
99 DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q24_a 環境問題への取り組み方 一人だけ行動しても効果がない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	41	15.89	41	15.89
2 ややそう思う	72	27.91	113	43.80
3 あまりそう思わない	61	23.64	174	67.44
4 そう思わない	77	29.84	251	97.29
99 DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q24_b 環境問題への取り組み方 環境配慮した商品が身近にない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	35	13.57	35	13.57
2 ややそう思う	96	37.21	131	50.78
3 あまりそう思わない	85	32.95	216	83.72
4 そう思わない	28	10.85	244	94.57
99 DK/NA	14	5.43	258	100.00
Q24_c 環境問題への取り組み方 具体的に何をやるかわからない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	31	12.02	31	12.02
2 ややそう思う	75	29.07	106	41.09
3 あまりそう思わない	90	34.88	196	75.97
4 そう思わない	53	20.54	249	96.51
99 DK/NA	9	3.49	258	100.00
Q24_d 環境問題への取り組み方 現在の豊かさ便利さを保ちたい	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	57	22.09	57	22.09
2 ややそう思う	110	42.64	167	64.73
3 あまりそう思わない	58	22.48	225	87.21
4 そう思わない	24	9.30	249	96.51
99 DK/NA	9	3.49	258	100.00
Q24_e 環境問題への取り組み方 行動したくても時間的余裕がない	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	26	10.08	26	10.08
2 ややそう思う	81	31.40	107	41.47
3 あまりそう思わない	99	38.37	206	79.84
4 そう思わない	41	15.89	247	95.74
99 DK/NA	11	4.26	258	100.00
Q24_f 環境問題への取り組み方 環境配慮した行動はめんどろ	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 そう思う	9	3.49	9	3.49
2 ややそう思う	51	19.77	60	23.26
3 あまりそう思わない	118	45.74	178	68.99
4 そう思わない	68	26.36	246	95.35
99 DK/NA	12	4.65	258	100.00

Q24_g	環境問題への取り組み方 環境配慮した行動は非経済的	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	7	2.71	7	2.71
2	ややそう思う	34	13.18	41	15.89
3	あまりそう思わない	118	45.74	159	61.63
4	そう思わない	89	34.50	248	96.12
99	DK/NA	10	3.88	258	100.00
Q24_h	環境問題への取り組み方 環境配慮した行動はかっこ悪い	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	そう思う	0	0.00	0	0.00
2	ややそう思う	6	2.33	6	2.33
3	あまりそう思わない	77	29.84	83	32.17
4	そう思わない	163	63.18	246	95.35
99	DK/NA	12	4.65	258	100.00
Q25_I	A：企業は環境対策に積極的 B：企業はもっと積極的に	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	Aに近い	23	8.91	23	8.91
2	どちらかといえばAに近い	40	15.50	63	24.42
3	どちらかといえばBに近い	80	31.01	143	55.43
4	Bに近い	110	42.64	253	98.06
99	DK/NA	5	1.94	258	100.00
Q25_II	A：技術向上で環境改善 B：個人の変化で環境改善	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	Aに近い	45	17.44	45	17.44
2	どちらかといえばAに近い	41	15.89	86	33.33
3	どちらかといえばBに近い	79	30.62	165	63.95
4	Bに近い	87	33.72	252	97.67
99	DK/NA	6	2.33	258	100.00
Q25_III	A：未来のために良い環境を残す B：現在の快適さ維持	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	Aに近い	158	61.24	158	61.24
2	どちらかといえばAに近い	65	25.19	223	86.43
3	どちらかといえばBに近い	22	8.53	245	94.96
4	Bに近い	9	3.49	254	98.45
99	DK/NA	4	1.55	258	100.00
Q26_a	平日の余暇時間	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	時間未満	14	5.43	14	5.43
1	時間以上～2時間未満	38	14.73	52	20.16
2	時間以上～4時間未満	116	44.96	168	65.12
4	時間以上～8時間未満	67	25.97	235	91.09
8	時間以上	16	6.20	251	97.29
DK/NA		7	2.71	258	100.00
平均値＝3.28（時間）					
Q26_b	休日の余暇時間	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	時間未満	5	1.94	5	1.94
1	時間以上～2時間未満	8	3.10	13	5.04
2	時間以上～4時間未満	37	14.34	50	19.38
4	時間以上～8時間未満	108	41.86	158	61.24
8	時間以上～12時間未満	59	22.87	217	84.11
12	時間以上	27	10.46	244	94.57
DK/NA		14	5.43	258	100.00
平均値＝6.42（時間）					
Q27	就業場所	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	自宅外	145	56.20	145	56.20
2	自宅	25	9.69	170	65.89
3	就業していない	66	25.58	236	91.47
4	就業しているらしい	15	5.81	251	97.29
99	DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q27_1	一日平均の就業時間	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
4	時間未満	5	1.94	5	1.94
4	時間以上～8時間未満	45	17.44	50	19.38
8	時間以上～12時間未満	82	31.78	132	51.16
12	時間以上	51	19.77	183	70.93
非該当		66	25.58	249	96.51
DK/NA		9	3.49	258	100.00
平均値＝9.29（時間）					
Q28	一日平均のテレビ視聴時間	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	1時間未満	40	15.50	40	15.50
2	1時間以上3時間未満	144	55.81	184	71.32
3	3時間以上5時間未満	51	19.77	235	91.09
4	5時間以上7時間未満	10	3.88	245	94.96
5	7時間以上9時間未満	3	1.16	248	96.12
6	9時間以上	3	1.16	251	97.29
99	DK/NA	7	2.71	258	100.00
Q29	家計の管理者	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	自分	148	57.36	148	57.36
2	配偶者（パートナー）	72	27.91	220	85.27
3	母親・配偶者の母親	24	9.30	244	94.57
4	父親・配偶者の父親	6	2.33	250	96.90
5	子ども	—	0.00	250	96.90
6	子どもの配偶者（パートナー）	—	0.00	250	96.90
7	祖父母	1	0.39	251	97.29
8	兄弟、姉妹	2	0.78	253	98.06
9	その他	2	0.78	255	98.84
99	DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q30	居住形態	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1	一戸建て（持ち家）	144	55.81	144	55.81
2	一戸建て（借家）	6	2.33	150	58.14
3	集合住宅（持ち家）	44	17.05	194	75.19
4	集合住宅（借家）	59	22.87	253	98.06
5	その他	4	1.55	257	99.61
99	DK/NA	1	0.39	258	100.00

Q31 居住年数	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 1年未満	15	5.81	15	5.81
2 1年以上3年未満	36	13.95	51	19.77
3 3年以上5年未満	18	6.98	69	26.74
4 5年以上10年未満	29	11.24	98	37.98
5 10年以上20年未満	56	21.71	154	59.69
6 20年以上	103	39.92	257	99.61
99 DK/NA	1	0.39	258	100.00
Q32 世帯人数	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1人	31	12.02	31	12.02
2人	73	28.29	104	40.31
3人	70	27.13	174	67.44
4人	54	20.93	228	88.37
5人以上	26	10.08	254	98.45
非該当（福祉施設入所）	2	0.78	256	99.22
DK/NA	2	0.78	258	100.00
平均値＝2.94（人）				
Q33_1 同居家族 一人暮らし	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居人がいる	224	86.82	224	86.82
1 一人暮らし	31	12.02	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_2 同居家族 配偶者（パートナー）	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	82	31.78	82	31.78
1 同居している	173	67.05	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_3 同居家族 あなたの親	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	206	79.84	206	79.84
1 同居している	49	18.99	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_4 同居家族 配偶者（パートナー）の親	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	251	97.29	251	97.29
1 同居している	4	1.55	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_5 同居家族 あなたの子ども	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	137	53.10	137	53.10
1 同居している	118	45.74	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_6 同居家族 あなたの祖父母	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	248	96.12	248	96.12
1 同居している	7	2.71	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_7 同居家族 あなたの孫	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	249	96.51	249	96.51
1 同居している	6	2.33	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_8 同居家族 あなたの兄弟、姉妹	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	238	92.25	238	92.25
1 同居している	17	6.59	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q33_9 同居家族 その他	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
0 同居していない	253	98.06	253	98.06
1 同居している	2	0.78	255	98.84
99 DK/NA	3	1.16	258	100.00
Q34 世帯の年収	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 100万円未満	9	3.49	9	3.49
2 100万円以上300万円未満	36	13.95	45	17.44
3 300万円以上500万円未満	61	23.64	106	41.09
4 500万円以上700万円未満	49	18.99	155	60.08
5 700万円以上1000万円未満	44	17.05	199	77.13
6 1000万円以上	46	17.83	245	94.96
99 DK/NA	13	5.04	258	100.00
家族類型	度数	パーセント	累積 度数	累積 パーセント
1 一人暮らし	31	12.02	31	12.02
2 夫婦のみ	62	24.03	93	36.05
3 夫婦と子ども	129	50.00	222	86.05
4 三世代家族	22	8.53	244	94.57
5 それ以外	8	3.10	252	97.67
99 DK/NA	6	2.33	258	100.00

調 査 票

千葉市における生活様式と環境問題

淑徳大学総合福祉学部人間社会学科では、日頃よりフィールドワークの授業を通して地域の社会問題に対して学生とともに研究を進めております。

環境問題は、地球規模の問題であると同時に人びとの日々の生活行動の問題であることに特徴があります。近年、地球温暖化やエネルギー問題など地球環境問題への注目と人びとの身近なレベルでの取り組み（例えば千葉市の焼却ごみ 1/3 削減キャンペーンや地域での資源回収ならびにエコバッグ運動など）への関心も増大しています。これからの環境対策を考えていくためには、環境問題に関するさまざまな情報を人びとがどのように受け止め、地域や家庭でどのように取り組んでいるのかについて総合的な考察が求められています。このような観点から、本調査は 20 代～60 代の方々に生活様式と環境問題についての考え方や取り組み方についてお教えいただきたく企画いたしました。

お忙しいところ大変恐縮ですが、アンケートの趣旨をご理解いただき、ご協力いただきますようお願い申し上げます。ご回答いただく方々は、千葉市在住の 20 代～60 代の方々からくじ引きのような方法で選ばせていただきました。ご回答は無記名でお願いしており、データは数値化し、コンピュータで統計的に処理いたしますので、個々人が特定されることはありません。回答には多少お時間がかかりますが、どうぞありのままをご記入くださいますようお願い申し上げます。

なお、このアンケート調査につきまして、ご不明な点やご質問がございましたら、下記までお問い合わせください。

平成 20 年 10 月

調査責任者

淑徳大学教授 松菌 祐子
淑徳大学教授 磯岡 哲也

社会調査助手 本多 敏明
教育助手補 庄司 壮

淑徳大学 人間社会学科 3 年

渋谷 卓磨 岡崎 亜季 長島 瑠美 木戸口 薫 河野 恵 名取 真里恵

連絡先：千葉市中央区大巖寺町 200 番地

淑徳大学総合福祉学部人間社会学科

電話番号：043-265-7331(内線 559)

E-mail：fieldwrk@soc.shukutoku.ac.jp

Q 1 あなたは何区にお住まいですか。あてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつ)

- | | | |
|--------|---------|--------|
| 1. 中央区 | 2. 若葉区 | 3. 緑区 |
| 4. 稲毛区 | 5. 花見川区 | 6. 美浜区 |

Q 2 あなたの性別を教えてください。

- | | |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

Q 3 あなたの年齢を教えてください。数字をお書きください。

満 () 歳

Q 4 あなたは、次の a～e の環境問題の今後について、どれくらい不安を感じていますか。
それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

不安 である	やや 不安 である	あまり 不安 ではない	不安 ではない
-----------	-----------------	-------------------	------------

- | | | |
|----------|-------|---------------------|
| a. 地球温暖化 | _____ | 1.....2.....3.....4 |
| b. 大気汚染 | _____ | 1.....2.....3.....4 |
| c. 食糧危機 | _____ | 1.....2.....3.....4 |
| d. 食品の安全 | _____ | 1.....2.....3.....4 |
| e. ごみ問題 | _____ | 1.....2.....3.....4 |

Q 5 以下にあげる環境対策のうち、あなたが聞いたことのあるものすべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

- | | |
|------------|----------------|
| 1. マイ箸 | 2. キャンドルナイト |
| 3. エコ替え | 4. カーボンオフセット |
| 5. うちエコ! | 6. ちばルール |
| 7. ちばし環境宣言 | 8. どれも聞いたことがない |

Q 6 以下にあげる環境対策のうち、あなたが今までに実行したことのある環境に配慮した生活行動すべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

- | | |
|--------------|-----------------------|
| 1. マイ箸の携帯 | 2. キャンドルナイトへの参加 |
| 3. エコ替えの実行 | 4. カーボンオフセット |
| 5. エコツアーへの参加 | 6. オーガニックコットンでできた服の購入 |
| 7. クールビズ | 8. どれもやったことがない |

Q7 あなたは、次の a～c の言葉についてその意味や内容を、何を通して知りましたか。
それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

a. クールビズ

- | | | |
|--------------|------------|----------------|
| 1. テレビ番組・CM | 2. 新聞 | 3. 雑誌 |
| 4. インターネット | 5. 市や県の広報誌 | 6. ポスター・電車内の広告 |
| 7. 家族・地域の人から | 8. 友人・知人から | 9. その言葉を知らない |

b. エコバッグ

- | | | |
|--------------|------------|----------------|
| 1. テレビ番組・CM | 2. 新聞 | 3. 雑誌 |
| 4. インターネット | 5. 市や県の広報誌 | 6. ポスター・電車内の広告 |
| 7. 家族・地域の人から | 8. 友人・知人から | 9. その言葉を知らない |

c. キャンドルナイト

- | | | |
|--------------|------------|----------------|
| 1. テレビ番組・CM | 2. 新聞 | 3. 雑誌 |
| 4. インターネット | 5. 市や県の広報誌 | 6. ポスター・電車内の広告 |
| 7. 家族・地域の人から | 8. 友人・知人から | 9. その言葉を知らない |

Q8 あなたは、次の a～d についてどのくらいわかりますか。それぞれあてはまる番号に
○をつけてください。(○はひとつずつ)

わ か っ て い る	わ あ か る 程 度 で い る	わ 少 か し は て い る	わ か ら な い
----------------------------	---	--------------------------------------	-----------------------

- | | |
|------------------|---------------------|
| a. エコバッグがなぜ「エコ」か | 1.....2.....3.....4 |
| b. 「3R」の意味 | 1.....2.....3.....4 |
| c. 地球温暖化のしくみ | 1.....2.....3.....4 |
| d. チームマイナス6% | 1.....2.....3.....4 |

Q 9 あなたは、次の a～p の行動を普段どのくらい行っていますか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

いつも行う	ときどき行う	行わない	あまり行わない	まったく行わない
-------	--------	------	---------	----------

- a. 資源ごみ（びん、缶、ペットボトルなど）を分別する 1.....2.....3.....4
- b. 古紙（新聞、雑誌、ダンボールなど）を地域の集団回収に出す..... 1.....2.....3.....4
- c. トレーや紙パックを回収ボックスへ持っていく 1.....2.....3.....4
- d. 乾電池を回収ボックスへ持っていく..... 1.....2.....3.....4
- e. 不要品をリサイクルする 1.....2.....3.....4
- f. 直せば使える物を修理・補修して使う 1.....2.....3.....4
- g. 不要になった紙の裏面をメモ用紙として再利用する 1.....2.....3.....4
- h. 過剰包装を断る 1.....2.....3.....4
- i. 水筒（マイボトル）を持参する 1.....2.....3.....4
- j. 部屋の電気をこまめに消す 1.....2.....3.....4
- k. 冷暖房を控えめに設定する 1.....2.....3.....4
- l. 使わない家電製品の主電源を切る..... 1.....2.....3.....4
- m. 水を使うとき、出しっぱなしにしない 1.....2.....3.....4
- n. 体や頭を洗い流すとき以外は、シャワーの水を止める 1.....2.....3.....4
- o. 風呂の残り湯を洗濯に使う 1.....2.....3.....4
- p. 外出の際には、なるべく自転車や徒歩、
電車・バスなどの公共交通機関を利用する 1.....2.....3.....4

Q10 あなたは、次の a～p のことを日常的に行っていますか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	いあてはまらない
-------	---------	------------	----------

- a. リサイクルショップを利用する 1.....2.....3.....4
- b. フリーマーケットに参加する 1.....2.....3.....4
- c. レンタルショップ（本、CD、DVD など）を利用する 1.....2.....3.....4
- d. 割引クーポンやポイントカードを利用する 1.....2.....3.....4
- e. 質よりも量を重視して商品を購入する 1.....2.....3.....4
- f. 類似種類の商品はより安いものを選ぶ 1.....2.....3.....4
- g. 詰め替えができる商品を選んで購入する 1.....2.....3.....4
- h. 使い捨て商品（紙コップ、紙皿、カメラなど）
ではない物を購入する 1.....2.....3.....4
- i. 家電製品などを購入する際は、省エネ効果の高い製品を選ぶ 1.....2.....3.....4
- j. 自分が住んでいる地域で栽培・生産された食材を購入する 1.....2.....3.....4
- k. エコマーク等のついた商品を購入する 1.....2.....3.....4
- l. 再生紙を使用した製品を購入する 1.....2.....3.....4
- m. なるべく物を捨てないで、長く使う 1.....2.....3.....4
- n. 人に譲る、またはお下がりをもらう 1.....2.....3.....4
- o. 無駄なものは買わず、必要なものだけを購入する 1.....2.....3.....4
- p. 中古品でも気にしないで購入する 1.....2.....3.....4

Q11 あなたのご家庭では次の 1～4 のことを行っていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

- 1. 水道に節水こまを設置している
- 2. 家庭で生ごみを処理している
- 3. 自宅の屋根に太陽光発電機（ソーラーパネル）をつけている
- 4. どれも行っていない

Q12 あなたは、エコバッグ（買い物袋）を持っていますか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

- | | | |
|---------------------------------|-----|-----------------|
| 1. エコバッグとして購入した、またはもらった | → | Q12-1・Q12-2 |
| 2. 以前から持っている買い物袋をエコバッグとして使用している | └─┐ | <u>にお答えください</u> |
| 3. 持っていない | → | |

Q12-1 Q12 でエコバッグを持っている（1、2）と回答した方にお聞きします。あなたはどのくらいの頻度でエコバッグを持って買い物に行きますか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. いつも持っていく | 2. ときどき持っていく |
| 3. あまり持っていない | 4. 持っていってことはない |

Q12-2 Q12 でエコバッグを持っている（1、2）と回答した方にお聞きします。あなたがエコバッグを持つようになった一番の理由は何ですか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

1. レジ袋が有料化されたから
2. 店によってポイントなどのサービスを受けられるから
3. 環境に良いと思うから
4. そのブランドやデザインが好きだから
5. 流行しているから
6. もらったものだから
7. 国や市が呼びかけているから
8. その他()

Q13 今年、あなたは、次の a～c の環境対策に取り組みましたか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

a. エアコンの28度設定

1. 今年の夏、初めてエアコンを28度(以上)に設定した
2. 以前からエアコンを28度(以上)に設定していた
3. 以前はエアコンを28度(以上)に設定していたが、今年はしなかった
4. 意識したことはない
5. エアコンは使っていない

b. エコドライブ(アイドリング・ストップ)

1. 今年からエコドライブを意識するようになった
2. 以前からエコドライブを意識していた
3. 以前はエコドライブを意識していたが、今年は意識しなかった
4. 意識したことはない
5. 車は使っていない

c. 環境家計簿

1. 今年から、環境家計簿をつけ始めた
2. 以前から環境家計簿をつけていた
3. 以前は環境家計簿をつけていたが、最近はつけていない
4. 環境家計簿を知っているが、つけたことはない
5. 環境家計簿を知らない

Q14 あなたが「エコ」という言葉をもっともよく目にすると思うテレビ番組はどれですか。あてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつ)

1. 報道番組・ニュース解説
2. 情報番組(「おもいっきりイイテレビ」「生活ほっとモーニング」など)
3. スポーツ番組
4. ドキュメンタリー番組
5. 娯楽番組
6. テレビCM
7. テレビは見ない

Q15 あなたは、次の1～7のことがあてはまりますか。あてはまるものすべてに○をつけてください（○はいくつでも）。どれもあてはまらない場合は「8. どれもあてはまらない」に○をつけてください。

1. テレビCMで見た商品を買うことが度々ある
2. 雑誌やインターネットなどで流行ものをチェックしている
3. 新商品が出たらつい買ってしまう
4. 情報番組で紹介された商品や行動（節約術、健康法、食品など）は試してみる
5. 衝動買いをしてしまうことがよくある
6. 「地域限定」「期間限定」と書いてあると買ってしまう
7. 友人や知人から勧められたものはとりあえず試してみる
8. どれもあてはまらない

Q16 あなたは、千葉市で行われている「減らそう！焼却ごみ1/3削減キャンペーン」を知っていますか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

1. 内容を理解している
2. 聞いたことがある
3. 知らない

Q17 あなたは、平成19年11月15日（木）～平成20年1月15日（火）の2ヶ月間、千葉市の一部店舗にて行われた「マイバッグキャンペーン」を知っていましたか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

1. 内容を理解している
2. 聞いたことがある
3. 知らない

Q18 あなたの住んでいる地域（ここでいう地域は自治会の範囲を指します）についてお聞きます。次のa～fについて、あなたの考えにあてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつずつ）

そう 思う	やや 思う	そう あまり 思わ ない	そう 思わ ない
----------	----------	-----------------------	----------------

- a. 地域の人びととは気軽にあいさつをしあえる関係だ 1.....2.....3.....4
- b. 地域の人びととは互いに協力しあえる関係だ 1.....2.....3.....4
- c. 地域の悪口を言われると腹が立つ 1.....2.....3.....4
- d. できる限りこの地域に住んでいたい 1.....2.....3.....4
- e. この地域の役に立つことをしたい 1.....2.....3.....4
- f. 旅行から帰ってきたとき自分の「まち」に帰ってきたと安心する 1.....2.....3.....4

Q19 あなたは、地域の活動にどの程度参加していますか。次の a～f の活動について、あてはまる番号に○をつけてください。なお、地域で以下のような活動が行われていない場合、または以下のような活動が行われているか知らない場合は、「5. あてはまらない」に○をつけてください。(○はひとつずつ)

いつもしている	よくしている	あまりしていない	全くしていない	あてはまらない
---------	--------	----------	---------	---------

- a. 環境保全(ごみ拾い、掃除当番など) 1.....2.....3.....4.....5
- b. 地域行事(お祭、運動会など) 1.....2.....3.....4.....5
- c. 教育・文化(子供会、バザーなど) 1.....2.....3.....4.....5
- d. 防犯・防災(避難訓練、パトロールなど) 1.....2.....3.....4.....5
- e. 自治会運営(自治会役員、会合に参加など) 1.....2.....3.....4.....5
- f. 高齢者・障がい者支援(家事援助、交流会など) 1.....2.....3.....4.....5

Q20 あなたは、次の a～i のごみ減量行動は、時間や手間を必要としますか。それぞれあなたの考えにあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

そう思う	やや思う	そう思わない	あまり思わない
------	------	--------	---------

- a. 古紙(新聞、雑誌、ダンボールなど)を地域の集団回収に出す 1.....2.....3.....4
- b. 直せば使える物を修理・補修して使う 1.....2.....3.....4
- c. 家庭で生ごみを処理する 1.....2.....3.....4
- d. 不要になった紙の裏面をメモ用紙に再利用する 1.....2.....3.....4
- e. 過剰包装を断る 1.....2.....3.....4
- f. 水筒(マイボトル)を持参する 1.....2.....3.....4
- g. トレーや紙パックを回収ボックスへ持っていく 1.....2.....3.....4
- h. 乾電池を回収ボックスへ持っていく 1.....2.....3.....4
- i. 資源ごみをきちんと分別する 1.....2.....3.....4

Q21 現在、あなたの身の回りの人が行っている環境に配慮した行動について、あてはまるものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)

1. 私の家族は、節電・節水に心がけている
2. 私の家族は、ごみ減量に積極的に取り組んでいる
3. 近隣の人たちの多くは、資源ごみの分別をきちんとやっている
4. フリーマーケットなどに積極的に参加している親しい友人がいる
5. エコバッグを使用している親しい友人がいる
6. 私の職場では、節電に積極的に取り組んでいる
7. 私の職場では、ごみ減量に積極的に取り組んでいる
8. どれもあてはまらない

Q22 あなたが中学生くらいのとき、次の a～c のように家族の人から注意されたことはありますか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

よく注意された	ときどき注意された	注意されなかった
---------	-----------	----------

- a. 物を粗末にしない 1.....2.....3
- b. 電気をつけっぱなしにしない 1.....2.....3
- c. 水を出しっぱなしにしない 1.....2.....3

Q23 あなたが中学生くらいのとき、あなた自身は、次の a～c のようなことを行っていましたか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

いつも行っていた	時々行っていた	行ったりいなかった	行っていなかった
----------	---------	-----------	----------

- a. 直せば使えるものを修理して使う 1.....2.....3.....4
- b. 電気をこまめに消す 1.....2.....3.....4
- c. 水を出しっぱなしにしない 1.....2.....3.....4

Q24 次の a～h の環境問題に対する取り組み方について、それぞれあなたの考えにあてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

そう 思う	やや 思う	あまり 思わない	そう 思わない
----------	----------	-------------	------------

- a. 一人だけで環境に配慮した行動をしても
本当に効果があるとは思えない 1.....2.....3.....4
- b. 環境に配慮した商品サービスが身近にない 1.....2.....3.....4
- c. 環境対策といっても具体的に何をしたらいいのかわからない 1.....2.....3.....4
- d. 現在の生活の豊かさや便利さを失いたくない 1.....2.....3.....4
- e. 環境に配慮した行動をとりたくても時間的余裕がない 1.....2.....3.....4
- f. 環境に配慮した行動はめんどろ 1.....2.....3.....4
- g. 環境に配慮した行動は経済的ではない 1.....2.....3.....4
- h. 環境に配慮した行動はかっこ悪い 1.....2.....3.....4

Q25 次のⅠ)～Ⅲ)の項目について、それぞれA・Bの二つの意見のうち、どちらがあなたの考えに近いですか。あてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつずつ)

- Ⅰ) A. 日本の企業は、現在すでに積極的に環境対策に取り組んでいる
B. 日本の企業は、もっと積極的に環境対策に取り組む必要がある

1. Aに近い 2. どちらかといえばAに近い
3. どちらかといえばBに近い 4. Bに近い

- Ⅱ) A. 技術的な開発を進めることで、環境問題を改善することができる
B. 個人のライフスタイルを変えることは、環境問題の改善につながる

1. Aに近い 2. どちらかといえばAに近い
3. どちらかといえばBに近い 4. Bに近い

- Ⅲ) A. 未来の子どもたちのために、良い環境を残すべきだ
B. 未来も重要だが、現在の生活の快適さは維持したい

1. Aに近い 2. どちらかといえばAに近い
3. どちらかといえばBに近い 4. Bに近い

Q26 あなたの余暇時間（仕事、学校、家事、睡眠以外の自由に使える時間）は何時間くらいありますか。（a）平日と（b）休日についてそれぞれ数字をお書きください。

（a）平日_____時間くらい （b）休日_____時間くらい

Q27 あなたの就業場所は、自宅外（会社など）ですか、それとも自宅（自営業など）ですか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

1. 自宅外 ☐ → Q27-1 にお答えください
2. 自宅 ☐
3. 就業していない ☐ → Q28 へお進みください

Q27-1 Q27 で就業している（1、2）と回答した方にお聞きします。あなたの就業時間（通勤時間も含む）は一日平均で何時間くらいですか。数字をお書きください。

一日平均_____時間

Q28 あなたは一日平均何時間くらいテレビを見ますか。あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1. 1 時間未満 | 2. 1 時間以上 3 時間未満 | 3. 3 時間以上 5 時間未満 |
| 4. 5 時間以上 7 時間未満 | 5. 7 時間以上 9 時間未満 | 6. 9 時間以上 |

Q29 お宅の日常的な家計の管理を主にしているのはどなたですか。あてはまる番号に○をつけてください。なお、一人暮らしの方は「1. 自分」に○をつけてください。（○はひとつ）

- | | | |
|--------------|---------------|--------------------------------|
| 1. 自分 | 2. 配偶者（パートナー） | 3. 母親・配偶者の母親 |
| 4. 父親・配偶者の父親 | 5. 子ども | 6. 子どもの配偶者（パートナー） |
| 7. 祖父母 | 8. 兄弟、姉妹 | 9. その他（ ） |

Q30 あなたの現在のお住まいについて、あてはまる番号に○をつけてください。（○はひとつ）

- | | | |
|--------------|--------------------------------|--------------|
| 1. 一戸建て（持ち家） | 2. 一戸建て（借家） | 3. 集合住宅（持ち家） |
| 4. 集合住宅（賃貸） | 5. その他（ ） | |

Q31 あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい住んでいますか。あてはまる番号に○をつけてください。転出して同じ町内に戻ってきた場合には通算年数でお答えください。(○はひとつ)

- | | | |
|-----------------|------------------|----------------|
| 1. 1 年未満 | 2. 1 年以上 3 年未満 | 3. 3 年以上 5 年未満 |
| 4. 5 年以上 10 年未満 | 5. 10 年以上 20 年未満 | 6. 20 年以上 |

Q32 現在、あなたと一緒に住んでいる方は、あなたを含めて全部で何人ですか。数字をお書きください。一時的に別居している方は除いてください。一人暮らしの方は「1」とお書きください。

あなたを含めて () 人

Q33 現在一緒に住んでいる方について、次の 1~9の中から、あてはまる番号すべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

- | | | |
|-------------------|----------------|------------|
| 1. 一人暮らし | 2. 配偶者 (パートナー) | 3. あなたの親 |
| 4. 配偶者 (パートナー) の親 | 5. あなたの子ども | 6. あなたの祖父母 |
| 7. あなたの孫 | 8. あなたの兄弟、姉妹 | 9. その他 () |

Q34 過去 1 年間のお宅の収入は、次のどれに近いですか。家族全員の収入を含めて、あてはまる番号に○をつけてください。(○はひとつ)

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. 100 万円未満 | 2. 100 万円以上 300 万円未満 |
| 3. 300 万円以上 500 万円未満 | 4. 500 万円以上 700 万円未満 |
| 5. 700 万円以上 1000 万円未満 | 6. 1000 万円以上 |

お手数ですが、裏面の折れ線にしたがって三つ折りにして、返信用封筒にお入れください。

◇以上で質問は終わりです◇

なお、このアンケートに対するご意見等がありましたらお書きください

ご協力ありがとうございました。

平成 20 年度 フィールドワーク調査報告書 第 6 号

発 行：2009 年 3 月 31 日
発行者：淑徳大学総合福祉学部人間社会学科
〒260-8701
千葉市中央区大巖寺町 200
TEL 043-265-7331
印 刷：株式会社 正文社